

奈良女子大学構内遺跡
発掘調査概報Ⅶ

2004年

奈良女子大学

はじめに

奈良女子大学構内には、かつて近世の奈良奉行所が存在しました。当時の奈良町の行政・司法の中心であり、大久保長安・川路聖謨など歴史上著名な人物も奉行に赴任しています。現在の大学の正門は奉行所の正門でもありました。そして、正門前の道路を隔てた東側は大学の寮になっていますが、そこには与力屋敷が南北に並んでいました。

これらの事柄は日記等の文献記録や大学所蔵の奉行所絵図、それに多くの奈良町絵図によって知られるのですが、当時の奉行所の様子やそこに働く人々の暮らしぶりを何うことの出来る資料は地中に埋もれてしまって、なかなか目にすることが出来ませんでした。

1982年2月、講堂建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査で奉行所濠の東北隅が発見され、はじめて奈良奉行所と北側の町屋が我々の前に姿を現しました。この時の調査成果に関しましては、すでに報告済みであります。さらに、1995年7月から2003年6月にかけて、寮の新営・改修に伴って調査が行われ、この度、調査成果を報告する運びとなったものです。

与力屋敷に伴うと考えられる井戸・ゴミ捨て穴などからは、当時の生活を何うに足る多くの遺物が出土しました。なかでも中国製品や京焼をはじめとする優美な陶磁器は、彩り豊かな日々の生活を物語っています。また、幕末から明治初めにかけて商業活動として成り立っていた焼継ぎ磁器は、近代的な社会構造に遷りつつあったことを示しています。

奈良女子大学の埋蔵文化財発掘調査会は1981年に組織され、これまでも学内での発掘調査結果について「奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報」として順次刊行してまいりましたが、このたび、上記の調査結果について概報Ⅶを刊行する運びとなりましたことは誠に喜ばしいことであります。本概報は、本学が実施いたしました奈良市半田横町14の国際学生寄宿舎の新営、改修工事に伴う埋蔵文化財発掘工事の調査結果をまとめたものであります。

本学は昨春の法人化を契機に、今まで以上に様々な形で研究成果を社会へ発信することを目指しております。この概報報告書の調査結果あるいは資料が、学術研究面での有用な資料として学内外を問わず広く活用されることを念願いたしております。

最後になりましたが、この概報の刊行に尽力いただいた関係各位のご協力、ご支援に深く感謝いたします。

2005年11月

奈良女子大学長 久米健次

例 言

- 1 本書は奈良女子大学が実施した奈良市半田横町14の国際学生寄宿舎の新営、改修工事（下記）に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。

A棟新営工事に伴う調査	1995年7月13日～同8月19日
1・2棟改修工事に伴う調査	2002年6月7日～同6月17日
3棟改修工事に伴う調査	2003年6月16日～同6月26日
- 2 各発掘調査の実施にあたっては調査員・坪之内徹が現場を担当し、下記の人々の協力を得た。
小野有記子・保科季子・川合めぐみ・高橋直子・田中真由美・宮崎好美・小林和美・小林啓子・鈴木景二（以上A棟）
小林千夏・中嶋美恵子・大嶋 藍・加藤香織・井出絵巳・長谷川羽衣子（以上1・2棟）
小林千夏・佐々木望・藤原麻理（以上3棟）
- 3 遺物の実測・拓本については下記の人々の協力を得た。
三熊あきこ・宮裡美恵子・戸井田香苗・萩原美穂子・今井礼子・井上和美・松岡愛子・北村有貴江・山元章代・山本美智子・小林千夏・中嶋美恵子・六車美保
また、製図は大島 藍・池田 愛・藤本 愛・新宅由紀が分担して行った。
- 4 遺構写真・遺物写真ともに坪之内が担当した。
- 5 本書の編集は佐々木望の協力を得て坪之内が行った。また、執筆は、坪之内以外は文頭または文末に担当者名を明示している。

凡 例

- 1 層位と遺構の位置は国土座標によって表示している。また高さは絶対高を表わす。
- 2 遺構の略号、土器の器種分類、軒瓦の型式は奈良文化財研究所で設定したものに準拠した。
- 3 遺構番号は発掘調査区内検出のものだけに付されたもので、既往の調査の通し番号との関連はない。

目 次

I	調査地 調査の契機 調査の概要	1
II	A棟の調査	4
	1 層位	4
	2 遺構	4
	3 遺物	11
III	1・2寮の調査	19
	1 遺構	19
	2 遺物	20
IV	3寮の調査	22
	1 遺構	22
	2 遺物	25
V	考察編	25
	1 構内旧地形の復原 —古代・中世河川敷の検出—	25
	2 構内遺跡近世遺構の検討	26
	3 焼継磁器について	34
	付 奈良女子大学旧地形図の3Dモデリング その手法と問題点	36

ま と め

挿 図	図1 調査地点位置図	原色図版	Fig1 構内旧地形復原図と3D画像
	図2 S区・N区遺構配置図・北壁土層図		
	図3 S区東半A期遺構配置図・西壁土層図		
	図4 SE26実測図	写真図版	図版1 S区遺構
	図5 円筒埴輪		2 N区遺構
	図6 管玉		3 S区・N区遺構
	図7 Aトレンチ・Cトレンチ遺構配置図・南壁土層図		4 土器(1)
	図8 Bトレンチ・Dトレンチ遺構配置図・南壁土層図		5 土器(2)
	図9 西トレンチ・東トレンチ遺構配置図・南壁土層図		6 土器(3)
	図10 国際学生寄宿舎内の近世・近代泥湿地範囲概念図		7 土器(4)
	図11 近世北魚屋西町関係遺構配置図・想定復原図		8 土器(5)
	図12 近世北魚屋西町関連遺構出土土器		9 土器(6)
	図13 「新町かわちや」銘の焼継磁器		10 土器(7)・軒瓦
	図14 「大日本 諫川好」銘の磁器徳利		
	図15 北小路町・東新在家町の近世遺構		
	図16 復原が曖昧な箇所		
図 版	第1図 古墳・奈良・平安時代の土器	付 表	表1 古墳・奈良・平安時代
	第2図 SD06・SD07・SE26出土土器		表2 SD06・SD07・SE26
	第3図 SK12・SK18・SK17出土土器		表3 SK12・SK18・SK17
	第4図 SK23出土土器・SE20出土土器		表4 SK23・SE20
	第5図 SE21出土土器(1)		表5 SE21(1)
	第6図 SE21出土土器(2)		表6 SE21(2)
	第7図 SE22出土土器		表7 SE22
	第8図 SK25出土土器(1)		表8 SK25(1)
	第9図 SK25出土土器(2)		表9 SK25(2)
	第10図 SK25出土土器(3)		表10 SK25(3)
	第11図 SK01出土土器(1)		表11 SK01(1)
	第12図 SK01出土土器(2)		表12 SK01(2)
	第13図 SK01出土土器(3)・SK02出土土器		表13 SK01(3)・SK02
	第14図 軒瓦		表14 SK204・SK301
	第15図 木簡		表15 SK101
	第16図 SK204・SK301出土土器・軒瓦		
	第17図 SK101出土土器		

I 調査地 調査の契機 調査の概要

現在の奈良女子大学の敷地は、奈良時代の平城京左京（外京）二条六坊と七坊にまたがっている。二条六坊（6 AEB 地区）は五坪・十一坪・十二坪・十三坪・十四坪が、二条七坊（6 AEA 地区）では三坪・四坪・五坪・六坪が構内と重なり合っている（図1）。

1981年以来、大学構内の埋蔵文化財事前調査を行ってきたが、二条六坊内での調査が多く行われているのに比べて、七坊内での調査は1982年の講堂建設に伴って行なわれたもの以外は若干の立会があるだけであった。

ここに概要報告する調査は、その二条七坊三・四・五・六坪内の国際学生寄宿舎の新営・改修に伴うものである。当該地はこれらの坪の坪境小路の交差が想定される平城京内であるばかりでなく、興福寺西北隅のすぐ北側に接し、宿院・梨原・石切城といった古代から中世にかけての文献に見える諸施設の所在地とも極めて近接していることが予想された。また、近世は奈良奉行所の与力屋敷の所在地として夙に知られている。現存する多くの絵図によれば奉行所の東側に開く正門（現在の大学正門とはほぼ同位置）の道を隔てた東側に4～5軒の与力屋敷が南北に並び、その背後すなわち寄宿舎敷地の東半は、明治23年の実測図によれば、東に向けた町屋のような状況を示している。このように、近世の遺構では、その性格が他分野の資料で明らかである遺跡の調査であるという側面を持ち、それを前提にした遺構・遺物の分析に期待が寄せられるものである。

なお、A棟新営に伴う調査区は建物部分（既設建物で破壊されている部分を除く）と南側のポンプ室の二ヶ所に分かれている。前者をN区（337㎡）、後者をS区（195㎡）とした。また、1・2寮改修の場合は長さ28.5～30m、幅1.5mのトレンチを南北2列各2本計4本設定した格好となり、それぞれをAトレンチ・Bトレンチ・Cトレンチ・Dトレンチとした。同様に、3寮改修の場合は西側に36.5×1.7m、東側に24.0×1.7mのトレンチを設定した形であり、前者を西トレンチ、後者を東トレンチと呼ぶことにした（図1）。

A棟の調査は夏期に、1・2・3寮の調査は梅雨時に行われたが、3寮の調査が雨に妨げられた以外は天候に恵まれ、おおむね順調に予定通り進行させることができた。A棟調査の遺構実測の場合は空撮を行ったが、1・2・3寮の場合は面積から見て、人力による平面実測図作成も可能であった。しかし、諸般の事情により実現させることが出来なかった。

S区・N区の調査で検出された河原・河床は、その上限は明らかに出来なかったが、少なくとも14世紀以前は付近が河川敷であった事が判明した。この河川はA～Dトレンチ・東西トレンチでは、調査範囲の制約もあって十分確認することが出来なかったが、付近一帯は14世紀前半に大規模な整地が行われ、濠と土塁に囲まれた区画が形成されたりしたが、近世後半には泥湿地となっていたらしいことが明らかになった。

今回の調査では、奉行所廃絶後から奈良女子大学創立までの時期、すなわち明治時代の遺構・遺物も調査の対象とした。S区では井戸や大きな土坑をはじめとして当該時期の遺構が多く、A・B・C・Dトレンチや東・西トレンチでは遺構面に同時期の遺物が多く見られた。しかし、そのせいか出土遺物が

収納用コンテナ 200 箱分に上ったことは、今後この時期の遺構を調査する際の遺物の取り上げに関して課題を残したといえる。

上述したように、A棟の調査は平面的な広がりを持つ通常の発掘調査であるが、1・2・3寮の場合は、改修工事の規模に合わせて、その範囲と深さに制約のあるトレンチ調査とならざるを得なかった。すなわち、A～D、西・東トレンチはそれぞれ工事の及ぶ深さまでしか埋蔵文化財調査を行っていないのである。このことを明記して報告し、将来当該地で別途開発行為があるときは、改めて埋蔵文化財調査に留意する必要があることを付記しておきたい。

調査日誌

A棟（1995年7月13日～8月19日）

- 7月13～15日 N区の機械掘削
- 17～19日 S区の機械掘削
- 20～31日 N区遺構検出
- 25～27日 測点移動・地区杭打ち・レベル移動
- 8月1～8日 S区遺構検出
- 12日 N区断面図作成
- 14～16日 盆休み
- 18日 空撮
- 19日 N区井戸枠取上げ・補足調査・S区断面図作成・S区東半平板図作成

1・2寮（2002年6月7日～6月17日）

- 6月7日 Dトレンチ機械掘削
- 10日 C・Bトレンチ機械掘削
- 11日 Aトレンチ機械掘削・Cトレンチ遺構検出
- 12日 C・D・Bトレンチ遺構検出
- 13日 B・Aトレンチ遺構検出・Cトレンチ断面図作成
- 14日 D・Bトレンチ断面図作成
- 15日 Aトレンチ断面図作成
- 17日 空撮・補足調査

3寮（2003年6月16日～6月26日）

- 6月16日 東・西トレンチの機械掘削
- 17・18日 雨のため作業中止
- 19日 東トレンチの遺構検出
- 23日 西トレンチの遺構検出・基準点設定
- 25日 断面図作成
- 26日 断面図作成・空撮



(○内の数字は条切内の坪名)

(円内) 今回の調査地点

- | | |
|--------------|----------|
| a. Aトレンチ | b. Bトレンチ |
| c. Cトレンチ | d. Dトレンチ |
| e. f. 立余調査地点 | |
| g. 西トレンチ | h. 東トレンチ |
| i. N区 | j. S区 |

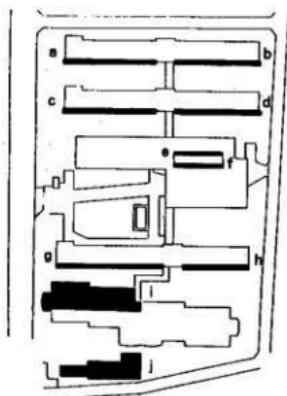


図1 調査地点位置図

II A棟の調査

1 層位

発掘区は南から北への緩やかな傾斜面上に位置し、N区・S区表土面での高低差は約0.7mである。東西方向は現況（発掘調査開始時）では大きな高低差は認められない。

S区では地山（第1層）は礫を多く含む灰色砂質土で、湧水が激しいことから河川内の堆積と推定される。この下に本来の地山である礫混じり明黄灰褐色粘質土が潜り込んでいるが、河川内では確認できなかった。S区西半ではこの本来の地山が高まりを見せて河岸を形成し、西端では明黄灰色粘質土となる。

第2層は暗灰褐色粘質土で、S区東半すなわち河川部分だけで見られる。河川を埋め立てるためのやや規模の大きな整地土と考えられる。

第3層は黄褐色粘質土・黄灰褐色粘質土等からなる比較的明るい土で整地面に薄く敷いたものであろう。時期は14世紀前半である。この上でSD06、SX09等の遺構を検出した。

第4層は黄灰褐色粘質土（小石・土器を混じえる）・灰黄褐色粘質土から成り、14世紀前半以降の整地の可能性がある。この上でSD08、SK04等の遺構を検出したが、本来の遺構面は大きく削平されている。

N区では地山（第1層）は明灰褐色砂質土・礫混じり茶褐色砂質土等であるが、これらは河川内の堆積で、限られた地点でのレンズ状の堆積も含まれている。やはり本来の地山である礫混じり黄褐色砂質土はN区西半だけに見られ、東半では深く潜っていると考えられる。第2層は暗黄灰褐色粘質土で、この上を第3層である明茶灰褐色粘質土・黄灰褐色粘質土で整地して面を築いている。ほとんどの遺構はこの第3層上で検出されたが、本来の遺構面およびさらに上層の整地土はかなり削平されていると推定される（図2）。

N区・S区の対応する層位と推定される時期を以下に示す。

	N区	S区	
第4層	（対応する層なし。削平か）	灰黄褐色粘質土	15世紀の整地土か
第3層	明茶灰褐色粘質土	黄褐色粘質土	14世紀の整地土上層
第2層	暗黄灰褐色粘質土	暗灰褐色粘質土	14世紀の整地土
第1層	明灰褐色砂質土	灰色砂質土	川の中の堆積

N・S両区とも西半の安定した地山部分と東半の北に流れる河川部分に分けられ、東半では安定した生活面を志向しての整地作業の痕跡が顕著である。その上限の時期は、今の所14世紀前半までしか明らかにならないが、古代・中世前期においては河川に接して居住とそれに伴う整地などは行われず、下流300mの佐保川にかけて広範囲に自然河川そのままの景観が展開されていた可能性が高い。

2 遺構

検出した遺構は鎌倉時代から近代にわたっている。層位との対応からはA～Cの三時期にしか分ける

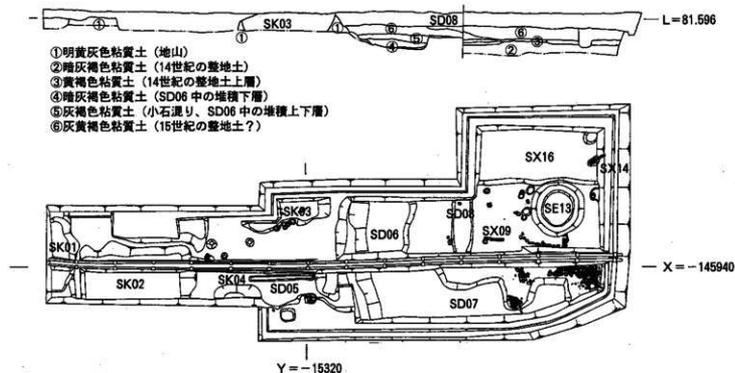
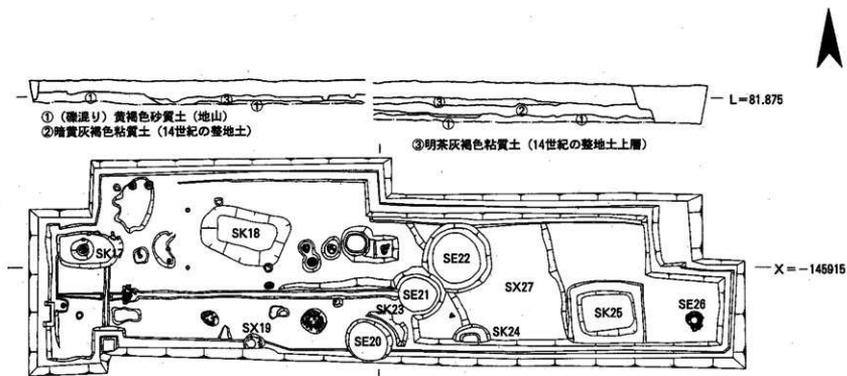


図2 S区・N区遺構配置図・北壁土層図(1/200)

ことが出来ないが、これは上層での削平が著しいためである（図2）。

A期

両調査区東半を占める河川部分を埋め立てて整地を行い、溝・井戸などの遺構を形成している（図3）。

SD05 S区西半東端寄りにある東西方向の溝。長さ3.4m、幅0.31m、深さ0.08m。溝内埋土は茶灰褐色粘質土で、土師器・瓦器の細片が出土し、詳細な時期は不明であるが、便宜上この時期に入れることにした。

SD06 S区中央を縦断して南壁際でL字状に東に折れる溝。北壁際での溝幅3.4m、深さ0.60m。溝内の傾斜は東側が険しく、西側が緩やかである。溝内の埋土は上・下二層に分かれ、下層が明灰褐色粘質土、上層が小礫を混じた灰褐色粘質土である。埋土中から14世紀前半の土師器皿・土釜、中国製輸入磁器、瓦片が出土した。

SD07 S区東南隅にある東西方向の溝状遺構。SD06がS区中央南壁際で東に折れたもので、南側の岸と推定される部分は発掘区外となる。総延長はSD06の西側のカタから11.4m、残存部分の最大幅は1.8m、最大深さ0.47mである。埋土中から14世紀前半の土師器皿・土釜、中国製輸入磁器、瓦片が出土した。

SX09 S区東半ほぼ中央に位置する東西方向の丸瓦列。いずれも玉縁丸瓦の凸面を上に向け、玉縁部を東側にして並べたものである。現存するのは5枚で、本来は東側に少なくともさらに1枚以上並べられていたと考えられるが、それ以上の詳細は明らかでない。瓦列の東側に拳大よりもやや小さな礫が列をなし、あたかも瓦列の延長のような観を呈しているが、相互の関係は明らかでなかった。また瓦列を除去したが、掘形等の関連する施設や水の流れた痕跡等は一切認められなかった。

SA10 SX09を暗渠排水の施設であるとする、この瓦列と直交する方向の構築物（土壘・土塀その他）の存在が想定される。遺構検出時には気付かれなかったが、S区東半西壁断面（図3）と同北壁断面図（図2）を検討すると、遺構面上に限られた範囲で載っている状態の灰褐色砂質土がこの構築物の一部分であった可能性が高い。また、新しい時期の井戸であるSE13の西側に接する箇所から始まり、北壁に向かって僅かに東に偏しながら伸びてゆく帯状の浅い落ち込みも関連遺構と考えられる。さらに、この帯状落ち込みの西側にピット等の遺構が認められないやはり帯状の空白部分があり、SX09との位置関係からみても、この空白部分が構築物の中心主軸にあたと推定される。

SA11 このSA10は暗渠排水のすぐ南側で東に折れて東西方向の構築物となると推定されるが、該当部分は高压ケーブルの管が埋設されていたため十分な調査が行えなかった。すぐ南側にはSD07があるため、両者の距離がSA10とSD06の間の距離に比べてかなり短いことなど問題は残るが、いちおう土壘ないしは土塀といった構築物が存在したと想定しておく。

SE26 N区東端東南寄りにある石組み井戸（図4）。石組みは最下段のみでしかも全周の五分の四しか残存していなかった。全体の掘形は周囲が削平されていたため明らかでない。底部からさらに0.85mを掘り凹めて直径約0.8mの曲物を掘えている。曲物は桶の底を抜いて転用したもので、上段に一部腐食が見られる。現存高0.85m、内径0.67m。曲物内から14世紀前半の土師器皿が出土した。

B期

A期の生活面上に整地を行って、溝・土坑等の遺構を形成している。S区北壁ではかううじて層位関係を把握できたが、N区北壁では全く明らかでない。これは上層の近世以降（特に近代以降）の削平の規模が大きく、この時期の本来の面を完全に消滅させてしまったためである。

SK04 S区西半中央やや東寄りの南壁際にある土坑。現状は地山に掘り込まれているが、上面が削平されているために本来の面は明らかでない。東西2.45m、南北0.75m以上、深さ0.09mで、南壁より調査区外に広がってゆく。埋土は灰茶褐色粘質土で、中から15世紀前半の土師器皿、丸瓦片が出土した。

SD08 S区東半中央北寄り、SX09の西側にある南北溝。A期の面で検出を行ったために長さ、幅、深さともに本来の数値ではない。残存長2.78m以上、残存最大幅1.12m、残存深さ0.05m。北壁断面の所見では幅3.3m以上、深さ0.6m以上である。なお、西壁の断面を見る限りでは、この溝は北（の発掘区外）に延びるにしたがって浅くなり、途切れている可能性もある。埋土は炭を混じえた灰褐色粘質土で、遺物は出土しなかったが、西壁際で大量に出土した国産陶器・土師器の年代に拠れば15世紀である。

C期

本来の面は近代以降の削平・攪乱によって消滅してしまっており、表土を除去した段階の面で一様に検出されたが、出土遺物によってC₁、C₂、C₃の三つの時期に分けることが出来る。

C₁期

SK17 N区西端中央にある不整形円形の土坑。東西3.5m、南北1.95m、深さ0.66m。坑底は平坦である。埋土は炭を混じえた暗灰色砂質土であるが、坑の東北隅に拳大から人頭大よりやや小さい礫が集中している所があり、礫の間に17世紀前半の土師器土釜（菅原氏分類の大和H型）が5個体分破碎した状態で出土した。このため石を組み合わせた簡単な屋外のカマドだった可能性がある。土師器土釜以外に土師器皿、唐津碗、美濃天目茶碗、伊賀・信楽系播鉢、瓦質土器と少量の瓦片が埋土中から出土している。

SK18 N区西半中央北寄りにある不整形の大きな土坑。東西4.4m、南北2.8m、深さ0.55m。16世紀末の土師器皿・土釜、灰軸陶器碗、中国製青磁碗が出土した。

SK12 S区東半のSD06とSD07の合流地点の内側にある土坑。高圧ケーブルのために残した土堤状部分の断面で確認出来ただけである。SD07の埋土に切り込んで掘られている。やはり16世紀末の土師器土釜、瓦質土器播鉢、中国製白磁碗が出土した。



L=80.236

図4 SE26実測図(1/40)

C₂期

SE20 N区南壁際中央にある井戸。東西2.43m、南北2.12mの不整形の掘形を持つ。遺構面から約1.5mまでしか掘り下げていないため、枠の構造等の詳細は明らかでない。埋土は炭混じり暗灰褐色粘質土で、18世紀後半の国産陶磁器・土師器、瓦、漆喰土間破片が大量に出土した。

SE21 N区ほぼ中央にある井戸。東西2.07m、南北1.08mの不整形の掘形を持つ。遺構面から約1.5mまでしか掘り下げていないため、枠構造その他の詳細は明らかでない。埋土は炭混じり灰褐色粘質土で、18世紀後半の国産陶磁器・土師器、瓦、漆喰土間破片が大量に出土した。

SE22 SE21の東北に接して掘られた井戸。東西2.50m、南北2.62mの円形に近い掘形を持つ。遺構面から約0.8mまでしか掘り下げていないので、枠構造をはじめとする詳細は不明である。埋土中より19世紀前半(幕末)の国産陶磁器・土師器、瓦、漆喰土間の断片が大量に出土した。

SK25 N区東端南壁寄りにある大土坑。東西長3.00m、南北幅2.37mの長方形を呈する。深さは遺構面から0.77mで、底面(地山に達している)の高さを一様に揃えて掘られている。埋土は黒灰褐色粘質土で、18世紀を中心とした時期の国産陶磁器、中国製陶磁器、朝鮮王朝製陶器碗、瓦等が出土した。

C₃期

SK01 S区西端西壁際にある土坑。東西約1.5m以上、南北3.9m、深さ0.3mで、発掘区より西に広がる。粘土質の地山に直接掘り込まれている。明治時代の土器・鉄製品が大量に出土した。

SK02 S区西端南壁際にある大きな土坑。東西6.1m、南北約3.0m以上、深さ0.6mで、粘土質の地山に直接掘り込まれている。明治時代の土器・鉄製品が大量に出土した。

SK03 S区SD06の西側の北壁際にある大きな土坑。東西4.6m、南北1.7m以上、深さ0.55m以上。発掘区内より北に拡がり、全体の一部分を検出しただけと考えられる。埋土は暗灰褐色粘質土で、明治時代の土器・瓦・木製品が出土した。

SE13 S区東半東寄りにある井戸。東西1.7m、南北1.9mの円形に近い掘形を持つ。遺構面から1.0m掘り下げた所で止めたため、枠構造等の詳細は不明である。埋土は灰黒色砂質土で、明治時代の土器が出土した。

3 遺物

出土した遺物には土器・瓦・木製品(木簡を含む)・金属製品(銭貨を含む)・自然遺物(魚貝類などの食物残滓を含む)がある。時代は古墳時代から明治時代に及んでいる。

A 古代の遺物(第1図、図版4)

おもにN区東半でまとまった量が出土したが、いずれも明確な遺構を伴っていない。河川内への投棄あるいは埋土に伴うものと考えている。土器(土師器・須恵器・黒色土器)・埴輪(円筒)・瓦(平瓦・丸瓦)・石製品(管玉)などがあるが、ここでは中世後期以降と区別して一括して報告する。

古墳時代の須恵器は杯蓋(1・2)、杯身(3・4)、器台(5)、甕(6~9)がある。杯身は口径が比較的大きく、口縁部が直立せず内傾しており、陶邑古窯址群MT15号窯型式の杯身の特徴と共通する。こ

れは口縁端部外面直下に突帯による装飾が見られなくなる中型の甕の特徴とも矛盾しない。

円筒埴輪(図5)は基底部と最下段(第一段目)のタガ部分の十分の一だけが残存している。外面にはタテハケが施され、内面には不定方向のナデが認められる。

胎土には半透明の白色砂粒と細かな灰色砂粒を多く、やや大きな白色砂粒を若干含み、色調は淡赤褐色を呈する。復原基底径36.8cm、残存高15.6cm。

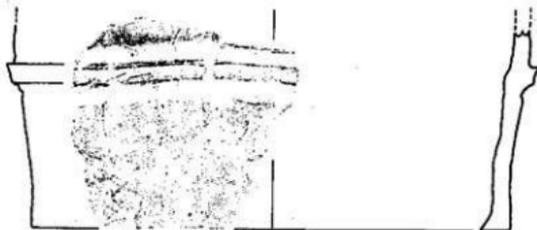


図5 円筒埴輪(1/4)

管玉(図6)は研磨によって丸い棒状に加工した暗緑色の石

に穿孔したもので、長さ2.1cm、直径0.7cm。穿孔は一端からは強く行われているが、他端からは全く行われていないいわゆる片側穿孔であるかどうかはよく判らない。孔の径は0.2cmと0.1cm。いずれも端面の中心からやや偏した位置にあげられている。

奈良・平安時代の土器(10~25)は須恵器が甕C(10)、杯A(11~13)、杯B(14~16)、蓋(17)、壺(18)、土師器が皿A(19)、皿C(20)、杯B(21)、甕(22)、黒色土器は全て内面だけが黒いA類で、杯(23・24)と碗(25)がある。これらの土器の年代は奈良時代後半~平安時代中葉(10世紀)であるが、従来の構内遺跡で出土する土器の時期と大きな隔たりはない。

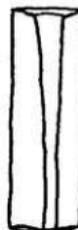


図6 管玉(1/1)

B 土器

ここでは井戸・土坑等の遺構に伴う、いわゆる一括遺物としての土器を扱う。古墳時代から明治時代までの土器が出土しており、内訳は土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・国産陶磁器・中国製輸入陶磁器・朝鮮王朝製陶器である。

SD06 出土土器(第2図1~12、図版4) 緑釉陶器碗(1)は硬陶系で、高台復原径が6.8cmと小型化した碗と考えられる。器表面の磨きはもはや認められず、暗緑灰色の釉が全面に施されている。10世紀前半の山城系の緑釉と考えられ、溝埋土中に混入したものであろう。土師器皿(2~7)は大皿(2・3)が口径12~14cm、小皿(4~7)が口径9.5~10.5cmとややばらつきがある。土師器器台(8)は直径6.5cmで、前段階より法量の縮小が認められ、次の段階(14世紀後半)には姿を消す。土師器台付皿(9)は13世紀前半までの通常の土師器皿に高台をつけたものとは系譜が異なる。このような器台風の台付皿は13世紀後半から14世紀前半にかけて見られるが、出土遺構によって数量に偏りがあり、今後の検討を必要とする。土師器土釜(10)は口縁端部が内湾するタイプで、菅原氏分類の大和H₁型に属する。中国製青磁碗(11・12)は(12)が大宰府龍泉窯系青磁碗I類、(11)は普通の大きさの碗であり、釉色も異なるため、別個体である。

SD07 出土土器（第2図13～29、図版4） 土師器皿（13～22）は大皿（13～17）が口径12.0～12.5cm、小皿（18～22）が口径9.0～9.5cmと法量にまとまりを見せている。瓦器碗（24・25）は14世紀後半に見られるような半球状を呈するものでなく、13世紀までの通常の瓦器碗のミニチュアのもの系譜上にあると考えられる。いずれにしても、土器組成中にしめる割合は極めて小さい。須恵器東播系片口鉢（23）は口縁端部の拡張や小型化傾向といった特徴から14世紀前半に位置づけることが出来る。瓦器鉢（26）は三脚の付くもので、外面には縦方向の、口縁部内面には横方向の丁寧なへら磨きが施されている。底部外面には離れ砂痕跡が認められる。（27）（28）も大型の深い鉢で、バケツ状の形態をもつ。瓦器播鉢（29）は8本一単位の播り目が施されている。

SE26 出土土器（第2図30～33） 土師器皿（30・31）は大皿のみであるが、（30）の復原口径が13.2cmであるなどやや古い様相をもつ。（32）は口縁端部が内湾する菅原分類の大和H₁型土釜である。瓦器鉢（33）は浅いバケツ状を呈する。脚部の有無は不明である。内外面ともに磨滅のため調整等は明らかでない。

SK12 出土土器（第3図1～5） 土師器土釜（1・2）は菅原氏分類の大和I₁型であるが、胴部最大径が鈎部より下にあり、器壁も薄いのが特徴である。瓦質土器播鉢（3・4）はいずれも8本一単位の播り目が施されている。内面は使用による磨耗が著しい。中国製白磁碗（5）は底部だけの残存で、高台の内外面は露胎である。大宰府白磁碗Ⅱ類に属するもので、やや古い時期のものである。土師器土釜・瓦質土器播鉢の形態から16世紀前半に比定される。

SK18 出土土器（第3図6～11） 土師器土釜大和I₂型（6・7）は鈎が器のほぼ中央にあり、器壁がさらに薄い。土師器皿（8・9）は大型で薄手灰白色のもの（8）と小型で比較的高いもの（9）がはっきりしており、16世紀の様相を示している。美濃大碗（10）は口縁の一部しか残存していないが、内外面ともに灰白褐色の釉が認められる。中国製青磁碗（11）は口縁部の外反と薄い器壁が特徴である。土師器土釜の型式から16世紀後半～末と考えられる。

SK17 出土土器（第3図12～29、図版4） 土師器土釜大和I₂型（12～15）は鈎の位置が体部中央より下にあり、器壁が厚くなってくるのが特徴である。土師器皿（16～21）は法量が一定しないものの、小皿（16～18）と大皿（19～21）に分けることが出来、色調も灰白色のものやなくなるなど近世的な様相を示してくる。伊賀・信楽系播鉢（22）は口縁端部を強くナデで外反気味に造り出し、内面に沈線状に段をなしている。（23）も伊賀・信楽系播鉢の底部である。内面には7本一単位の交差した播り目が残存している。（24）は水指あるいは花生の底部と考えられる。やはり伊賀・信楽系のものであろう。唐津碗（25・26）はいずれも高台周辺露胎で（26）は灰白色釉を流し掛けしている。器壁はやや薄く、焼成は堅緻で、砂目積み皿段階に併行する。美濃天目茶碗（27）は底部を欠いているが、外面に黒褐色釉を流し掛けしているのが認められる。美濃丸皿（28）・折縁皿（29）はやや時期のさかのぼるものであろう。

SK23 出土土器（第4図1～11）（1）は土師器土釜大和I₂型の口縁部である。くの字状に外反せずに、直立するのはこの時期では特異である。土師器皿（2～4）は（4）が内底面周辺から上に向かってナデ上げる技法が認められ、中世的な様相を残しているといえる。瓦質土器鉢（5～7）は播鉢の形態

をしているが、播り目がなく、内面には横方向の細かなヘラ磨きが施されている。(8)は瓦質土器で、大型の鉢の蓋である。天井部外面には離れ砂痕跡が認められる。瓦質土器鉢(9)は大型でバケツ状の形態をもつものである。(10)も瓦質土器で風炉火鉢の口縁部である。播り目のない瓦質土器の存在から、17世紀初頭～前半に位置付けられよう。

SE20 出土土器(第4図12~44、図版5) 伊万里磁器(12~19、21)には碗(12~18)、仏飯器(19)、皿(21)があり、碗は薄手で高台が低くて小さいものが多いのが特徴である。(20)は中国製染付磁器の皿である。陶器(22~32)は唐津系刷毛目碗(22)と京焼風の一群(23~27、30)美濃系のもの(28、29)信楽系大甕(31)赤膚焼皿(32)に分けられる。京焼風陶器のうち、(23~27)は肥前系であろう。また(30)の土瓶は僅かに細かな模様が認められ、肥前系の可能性もあるが、やはり本来の京焼であろう。土師器皿(33~44)は基本的に大皿(33~40)と小皿(41~44)に分けられ、胎土・焼成から見ても近世の土師器皿への移行が完了している。伊万里磁器の年代が比較的同時期を見せしており、18世紀前半とすることが出来る。また「赤ハタ」刻印のある赤膚焼の年代の一端を知りえたことも意義深いといえよう。

SE21 出土土器(第5図、第6図、図版5) 伊万里磁器(第5図1~25)には碗(1~17)猪口(18)蓋物(19・20)瓶(21)皿(22・23)小杯(24・25)がある。(5)の碗の絵付けは型紙摺り(13)(15)(17)にはコンニャク判が使用されている。コンニャク判は(19)の蓋物や(22)の皿の見込みにも見られる。(23)の三足付皿は青磁染付である。見込み部分の必要な箇所だけ釉薬をカキ取り絵付けを行っている。陶器(第5図26~42、第6図1~5)には京焼系・京焼風碗(26~36)丹波焼蓋(37)同壺(38)美濃瀬戸系碗(39)唐津系黒軸瓶(40)同碗(41)同皿(42)伊賀・信楽系播鉢(第6図1~3)産地不明甕(4)同鍋(5)がある。碗はいずれも淡黄褐色あるいは淡灰白褐色の貫入の目立つ釉が施されていて高台周辺は露胎である。これらのうち(第5図31・35)は見込みに呉須による絵付けが見られることなどから京焼風陶器と考えられる。絵付けの一部分しか残存していないので断定的には言えないが、簡略化されており、京焼風陶器の盛行した17世紀後半よりは新しいものであろう。また(第5図26~30)はいずれも絵付けが施されているが、(26)(30)には金泥風の彩色が使われるなど、肥前系京焼風陶器には見られない特徴をもつ。特に(26)は高台内に楕円枠で囲った「清水」の刻印が見られ、本来の京焼である可能性が高い。さらに(27)(28)は柴束・竹葉などの細かい絵付けや、(29)では、実測図では表現できなかったが、湾曲した口縁などやはり京焼風陶器にはない意匠が見られる。このほか(32)(33)も外面に僅かではあるが絵付けの一部が残存しており、この時期における国産陶器碗の様相を窺い知ることができるが、各々の産地とともに製作時期を確定することが今後の課題であろう。播鉢(第6図1~3)はすべて高台のつくタイプで、釉の色調も暗紫色あるいは紫褐色に統一される傾向を見せる。瓦質土器(6~8)には壺(6)土風炉(7)鉢(8)がある。壺(火消し壺あるいは火鉢か)は焼成は土師器のそれであるが、外面に磨きを施すなど製作技法上瓦質土器と共通する所が多いためこの中に含めた。土師器ほうらく(9~11)は(9)が難波洋三氏分類のC類、同じく(10)がF類(11)がE類である。C類は18世紀に製作年代の中心があったとされている。土師器皿(12~26)はSE20の土師器皿よりも口径が縮小している傾向があるが、両者ともに復原口径の個体が多いため、今後

の検討が必要である。伊万里磁器の年代から18世紀前半に位置付けられよう。

SE22 出土土器 (第7図、図版6) 国産磁器 (1~14) には碗 (1~5) 蓋 (6) 皿 (7~10) 小杯 (11・12) 鉢 (13) がある。(2)の端反り碗や(9)の高台内に蛇の目状に削る皿など幕末の様相を見せている。(14)は中国製染付磁器の可能性もある。高台内に「玩玉」の銘があり、焼継が少なくとも二回施されている。国産陶器には灯火具 (15~17) 蓋 (18~20) 徳利 (21) 湯呑み茶碗 (22) 壺 (23・24) 盤 (25) 信楽焼筒花生 (26) 同播鉢 (27) 罍 (あるいは明石) 産播鉢 (28) があるが、生産地の不明なものが多い。

SK25 出土土器 (第8図~第10図、図版6・図版7) 磁器 (第8図1~44)のうち(1~43)が国産であり、碗(1~26)の数が多い。その中には青磁染付碗(24・25)筒型碗(26)など18世紀中葉~後半の特徴を示すものがあるが、端反り碗(7)などやや新しい時期のものもある。(10)は赤絵地に金彩を施した色絵で、菊花?をあしらった唐草状の模様が特徴的である。(20)はキハラ系の碗で、時期がさかのぼるものであろう。(23)の白磁碗には口錆が施されている。小杯(28~34)のうち(30・31)には紙摺りによる絵付けが見られ、18世紀前半代に盛行したものである。(35)はそば猪口で、皿(36~40)のうち(39)は青磁の四角皿で伊万里以外の産地の可能性もある。(40)は繊細な絵付けを持つ染付け大皿であるが、断片なので文様や技法の詳細はわからない。(41・42)は蓋物であるが、(42)は赤と緑で細かな文様が施されている色絵磁器である。(43)も火を受けているために全体が黒変しているが、色絵磁器の徳利と考えられる。内面には釉が見られない。中国製赤絵磁器鉢(44)は時期の遡るものか。高台内は露胎である。朝鮮王朝(李朝)陶器碗(45)は火を受けて赤変している部分もあるが、卵黄白色の釉が高台畳付以外全面に施され、見込みと畳付けに目あとを残す典型的な茶碗である。国産陶器(第9図1~19、21~34)のうち(1)は系譜が明らかでないが、肥前系であろう。(2)は京焼風陶器で高台内に「清水」の刻印が見られる。(3)は内野山系緑釉陶器の口の部分である。京焼系陶器(5~19)はその産地を同定しがたいものばかりであるが、碗(5~12)蓋物(14~16)皿(17)をはじめとして、ある程度残存しているものにはほとんど絵付けが認められる。主題の判明する絵付けの内容としては、竹葉、草花、花枝があり、色調や描かれている位置からしても、この系統の陶器に通用のものである。しかし、(12)の碗は火を受けているが、内底面に緑と金による梅花状の絵付けが見られ、他とはやや異なった意匠が認められる。また(19)は形態は不整形な板状部分に楕円形に近い高台がついたもので、緑釉と褐釉が色分けして施されるという特殊なものである。(20)は中国元代の黒釉乳頭文小壺で、江西省贛州窯の製品である。(21)は信楽壺(22)は京焼系陶器花生(23・25)は信楽播鉢(24)は信楽甕である。信楽播鉢はいずれも高台のないタイプで、(25)は内底面の磨耗が著しい。(27~33)は「(伊賀)信楽系」と総称される近世後半以降各地で生産された日常雑器である。土瓶(27・28)は体部が算盤玉状を呈している。蓋(29~31)のうち(30)のような形態のものが対をなすか。(32・33)は把手を欠いているが行平鍋である。蓋は(28)のような形態のものか。釉色は(27~32)は暗茶褐色中に細かな黒斑が点在し、(33)は光沢のある暗灰黒色である。(34)の甕は大型でトイレに使用された可能性がある。産地不明。(第10図1・2)は瓦質土器、(3~52)は土師器である。瓦質土器甕(1)は大型でバケツ状の形態の中世から通用のものであるが、口縁部外面下に波状文が見られるのは近世に入

てからの特徴である。瓦質土器火鉢(2)は焼成は土師器のそれであるが、表面の磨きなど共通する部分が多いため瓦質土器に含めた。土師器塩壺(3)は外面に「泉湊伊織」の刻印があり、内面は板の継ぎ目痕跡の上に黒色物質の付着が認められる。土師器ほうらく(4~7)は(4)が難波分類のE類、(5~7)が同じくC類である。C類はSE21出土のものに比べると口縁部が直立する傾向にある。土師器皿(8~52)は大皿(8~22)が口径10cm前後、小皿(23~52)が口径6.5~7.5cmの量目に収まるが、完形のもので比較するとSE21のものに近く、18世紀になってようやく近世的な形態と量目が安定してきたといつてよいであろう。

SK01 出土土器(第11図、12図、13図1~6、図版8・図版9) 磁器(第11図1~33)には幕末以来の端反り碗(1~5)、蓋のつく薄手でやや大ぶりの碗(6・7)なども見られるが、型紙摺を絵付けに用いた碗(8~11)や蓋(16・17)、同じく銅版摺を用いた碗(13)蓋(19)小杯(24)も伴出していることから、この土坑の年代が近代に入っていることを知ることが出来る。(5)と(27)の小杯は色絵である。皿(30~33)のうち(30)は高台内を蛇の目状に削るいわゆる蛇の目凹型高台をもつ。(31)は三田青磁である。(14)の碗も青磁であるが産地は明らかでない。皿は幕末の特徴を残すものが多い。陶器(34~40)のうち(34~37)は袋状の小瓶であるが、(34)の外面に「をしろいこ」「大版塩麩」と軸書きされていることから(34・35)はおしろい粉を水に溶いたものを入れた水おしろい瓶である。(35)は「登録商標」と書かれており、(35)のようにタール状の物質によって四花形の皿に溶着した状態で出土した。(36・37)は(34・35)をひとまわり小さくしたような形態であり、外面の軸色も暗青色を呈し同じく水おしろい瓶の用途を推測させるが、外面には「四季の友 柏園製」と軸書きされており、おしろい瓶以外の用途も考えられる。(38)は細頸壺の肩部である。胴部上半にかけての外面には格子文様中に省略された花文がへらで施されている。外面には淡緑褐色の軸が施されている。蓋(39)は外面(蓋上面)に暗緑色の軸の上に波濤文が白色で描かれている。土瓶(40)は算盤玉状の胴部をもち外面上半には呉須と褐釉で山水樓屋が描かれている。(第12図)は陶器である。蓋(1・2・5・6)のうち(1)は内外面に施軸され白地の上に黒の独案文様の見られるものである。陶胎磁器の可能性もあるが、時期的に考えて陶器の中に含めた。(2)は外面に飛鉋模様と鉄軸による彩色の見られる製品である。内面天井部にも暗黄褐色の施軸が見られる。(5)は外面に白色の軸が施されている。(6)は亀の形をした鈕と外面に暗黄緑色の軸が施され、三箇所梅花風の絵付けが見られる。仏花瓶(7)は頸部と口縁部しか残存していないが、内外面に茶褐色の軸が施されている。小瓶(8)は高台部より上の外面全面に淡緑褐色の地に白粉をちりばめたような独特の軸が施されており伊賀高原焼の系統であることがわかる。仏壇あるいは神棚に使用したいわゆる御神酒徳利であろう。灯火器(4)は底部内外面を除いて淡緑灰色の軸が施されている。小杯(9・10)は胎土・焼成・軸色・製作技法において共通点が見られ、口径と高台の高さにおいて僅かな相違が見られる。備前蓋物小壺(11)は肩部外面に文様を意識したカキメが見られる。行平鍋(3・12・13)は外面に飛鉋模様が見られるが、その上から暗黄緑色の軸が施されている。両手鍋(14)は内面と外面上半に暗緑色の軸が施されている。壺(15・16)瓶(17・18)ともに外面に暗茶褐色の軸が施されている。鉢(19・20)は内外面に施軸されているが(19)は外面の体部下半と底部外面には施軸されておらず、外面に部分的に暗茶褐色と白濁した軸が流し掛けられている。

(20) も明白褐色の釉が見られるが断片なので詳細は不明である。盤(21)は水槽として使用されたか。やはり内外面ともに施釉され、淡灰褐色の地に淡灰青色と淡灰緑色の釉が流し掛けられている。第13図(1~6)は植木鉢(1~4)と土師器かんてき(5)しちりん(6)である。(1)は暗赤茶褐色を呈する備前焼風であるが産地は明らかでない。釉は施されていない。(2)は底部より上の外面に淡白褐色の釉が施されている。(3)は瓦質土器で四角い箱状の器形であるが、幅だけで長さは明らかでない。(4)は陶器で底部より上の外面と口縁部内面にまで淡白褐色の貫入の目立つ釉が施されている。やはり幅だけで長さは明らかでない。かんてき(5)は内面が熱で黒変している。しちりん(6)は外面に獣面を中心とした装飾が見られる。

SK02 出土土器(第13図7~30、図版9) 国産磁器(7~10)のうち(7)の碗は口縁端部が面をなし絵付けがなされていて、底部は蛇の目凹型高台の名残をとどめている。焼継が施されており底部外面高台内に「六十二」と鉛ガラスで書かれた数字が見られる。(10)は紙摺りによる絵付けがなされている。陶器(11~27)には小杯(11・12)蓋(13~20・26)植木鉢(22・23)土瓶(24・25)皿(27)がある。蓋は(13)が天井部外面に染付けによる絵付け(16~19)も天井部外面に施釉されていて(16~18)には色絵付けが見られる。(14)は内外面に暗緑色の釉が施されていて、口縁端部は釉をカキ取っている。(15・20・21)は内面全面施釉、外面に鉄釉と白色釉で絵付けがなされている。植木鉢はいずれも灰赤褐色を呈し(23)は底部の孔の部分欠いているが、同類に含めた。土瓶はいずれも外面に光沢のある灰白色の釉が施されている。焼成は堅緻である。(27)は赤膚焼の角皿である。底部外面の高台外側裾に「赤ハタ」の刻印が見られる。土師器(28~30)は(28)が土瓶か急須であろう。皿(29・30)は時期がさかのぼる可能性もあるが、近世のものとはやや形態が異なるので報告した。(31)は瓦を打ち欠いて作った瓦製円盤である。時期のさかのぼるものであろう。

C 瓦(第14図1~8、図版10)

瓦は軒瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦が出土しており、時代は古代から近世に及んでいる。ここでは軒瓦にだけ説明を加える。

巴文軒丸瓦(1) 主文は左巻きの巴文で外区に珠文をめぐらせている。珠文の両側に一周づつ二周の界線がめぐる。丸瓦部の挿入は瓦当裏面をやや深く掘り凹めて行われており接合粘土は少ない。丸瓦部凸面には縦方向の刷毛目が認められ、側面はへう削りにより面取りがなされている。

巴文軒丸瓦(2) 左巻きの巴文の下半部4分の1だけ残存する。外区には比較的細かな珠文をめぐらせている。界線は内側の一周しかない。

巴文軒丸瓦(3) 上半部全体の3分の1しか残存していない。主文は左巻きの巴文で外区には珠文がめぐるが、(1)(2)に比べてやや疎らである。瓦当面には離れ砂痕跡が見られる。

唐草文軒平瓦(4) 右から左に流れる唐草文の一部分しか残存していない。顎下部を失っているが、周縁が幅広く復原されるところから垂下するような形態であったと考えられる。

均正唐草文軒平瓦(5) 古態な中心飾りから左右対称に唐草文が展開する意匠であるが、右半分しか残存していない。顎部が外れてしまっているが、平瓦部端面を折り曲げて范に押し付けてから顎部を

貼り付けて、瓦当部全体を成形していると復元できる。

珠文軒平瓦 (6) 外区に珠文をめぐらせ界線がその内外に配されている。内区の主文様は不明であるが「興福寺」等の文字銘である可能性が高い。

唐草文軒平瓦 (7) 瓦当残存部分には左から右に流れる唐草文と円の中に文字をあしらった意匠がみとめられる。顎は幅広くて高い。平瓦部凸面は縦方向のへら削りを行った後、顎部とともに縦方向の刷毛目が施されている。

均正唐草文軒平瓦 (8) 中心に剣視の蓮華を配し、左右に唐草文を3回以上反転させている。平瓦部凸面端部から顎部にかけて強いナデが施されている。

(小林千夏)

D 木簡 (第15図)

木簡は合計6点出土しているが、いずれも近世・近代のものである。墨書の施されている木材の形態も様々で、その目的を知り得る記載内容に乏しく、史料としてのまとまりはない。

1 □□
(寛永)

直径8.3cm、厚さ0.55cmの円盤状に加工した木材の片面に一見墨画風の書体で書かれている。

2 待こひ
(天)

直径10.0cm、厚さ0.65cmの円盤状木材の片面に書かれている。曲物底部の可能性あり。

3 □□

□勝軒様
(享和)

長さ12.6cm、幅2.9cm以上、厚さ0.15cmの長方形薄板の片面に書かれている。右端に隣りの行の墨痕が認められるが、どのような字かは明らかになっていない。

4 ・□元
(明・徳)

・□□

長辺7.8cm、短辺5.4cm、厚さ0.65cmのやや歪んだ平行四辺形の板の両面に書かれている。墨書内容の意味不明。

5 □□

・□□ < 免

・□□

□
(享和)

高さ19.5cm、最大幅15.0cm、厚さ1.5cmの厚版の両面に書かれている。

6 第九号

残存長51.0cm、断面5.2×5.0cmの方形で先端を尖らせた杭の頂部付近の一面に書かれている。内容から杭番号を示していることは確実で、「号」の字から近代以降の遺物と考えられる。

E 銭貨 (第14図9~12)

銭貨(銅銭)は全発掘区で4点(中国銭2、寛永通宝1、不明1)を出土している。

洪武通宝は、1368年初鑄。洪武通宝(9)は縁部分の幅が比較的広い。裏面右側にも文字が認められるが磨滅のために判読出来ない。

寛永通宝(10)は「通」の字上半にやや特異な部分が認められる。裏面は無字無文である。N区SK25出土。

不明銭貨(11)は□□□寶(カ)のみ判読可。銹蝕によるためか全体に薄い。

洪武通宝(12)は(9)よりも縁の幅が狭い。裏面に文字はない。

III 1・2寮の調査

1 遺構

今回の調査は学生寄宿舎の北二棟(1・2寮)の改修に伴うものである。埋蔵文化財の発掘調査対象地となったのは各棟の南側に接した構築物基礎が埋置される部分(中央の出入口を除く)で、幅1.5m、長さ28.5~30mの東西方向のトレンチを二箇所8m離れて南北に二列に設定した格好となる。各トレンチ名を西北からA・B・C・Dとした(図7・図8)。なお、深さは構築物基礎が及ぶ地表下約0.7mまでとし、遺構面に達していなくてもそれ以上の掘り下げを止めている。

各トレンチの調査結果を以下に述べる。

Aトレンチ

西半は近世のしっくい土間片を含む整地土(暗黄褐色粘質土)が底まで認められ(地表下70~80cm)、なおも下に続いていくようである。この整地土は均一でなくて表面の凹凸が著しく、現代にいたるまで繰り返し攪乱が行われたことを示している。特に東半はそれが顕著で東端では近代以降に形成された瓦を主とするゴミ穴によって大きく攪乱を受けている。

Bトレンチ

東端には古い時期(14世紀?)の整地土とみられる黄褐色粘質土が残存していた。この整地土上で18世紀後半の遺物を出土したSK101の一部を検出した。この整地土は東端から三分の一の所で西側に落ち込んでおり、それより西側は灰褐色砂質土・明灰褐色砂質土の堆積が地表下80~50cmにわたって見られる。これらには近世以降の遺物が含まれており、当該時期の泥湿地とそれを埋め立てた整地土の可能性が高い。

Cトレンチ

西半と中央部分には地表下40~80cmに茶褐色粘質土が均一に認められ、近世以降(おそらくは近代)の整地土と考えられる。東半では護岸状施設(SX201・SX202)が見られるあたりから青灰色粘質土、青灰褐色粘質土、礫混じり黒灰褐色粘質土など池や泥湿地中の堆積の可能性のある層が存在する。護岸状施設(瓦組み・石組み)は西側が瓦を比較的細かく破碎して縦に並べ、小さな石を配したもので、東

側が拳大かやや小さな石（しっくい土間片を含む）や五輪塔の地輪を敷きつめたものであった。いずれも池あるいは泥湿地の縁辺の護岸施設と考えているが、両者の時期的な関係は明らかでない。

D トレンチ

東端には14世紀の整地土と見られる茶褐色粘質土が残存していた。さらに地表より80cmの深さ以下にはB トレンチで見られたような黄褐色粘質土が認められたが両者の関係は明らかでない。この整地土の上で、いずれも14世紀前半の遺物を出したSK203、SK204を検出した。この整地土はSK203の西側で傾斜しており、それより西側は礫混じり黒灰褐色砂質土、暗茶褐色粘質土など池や泥湿地中の堆積の可能性がある層が認められる。トレンチ中央やや西よりの礫群はC トレンチの瓦組み、石組みに対応する護岸の可能性がある。

2 遺物

SK204 出土土器（第16図1～45） 土師器皿（1～43）土師器土釜（44）須恵器こね鉢（45）がある。土師器皿は口径10.0～11.0cmの大皿（1～39）と8.0～9.0cmの小皿（41～43）に分けられる。大皿の大多数と小皿は暗赤褐色を呈するいわゆる赤土器であるが、（40）は灰白褐色を呈し、口径と器高から見てもやや新しい時期の様相を呈している。土釜は菅原氏分類の大和H₁型で、この時期の通有のものである。須恵器こね鉢は東播系の製品である。

SK101 出土土器（第17図）国産磁器（1～12）には碗（1～5）皿（6）小杯（7～9）仏飯器（10）鉢（11）蓋物（12）がある。（1）は青磁染付、（8）は絵付けにコンニャク判が使われている。陶器（13～16）には甕（13）播鉢（14）碗（15）小杯（16）がある。播鉢は伊賀信楽系で高台のつくタイプであろう。暗紫色の釉が施されている。京焼系の碗は卵黄色の地に黒の絵付けが認められるが、断片なので全体を知り得ない。土師器（17～35）はほうらく（17）皿（18～34）器台形土器（35）墨書皿（36～38）がある。ほうらくは難波分類のC類で、皿は小皿が大部分であるが、SK25のものに量目が近く、形態からも近世の土師器皿に移行を終えていると言えよう。器台形土器は土師器皿をのせることの出来る大きさではあるが、胎土・焼成・色調ともやや異なりを見せており検討を要する。墨書土師器皿は外面および内面に数字を墨書したもので、（38）のように数字以外も書かれているが判読出来ていない。

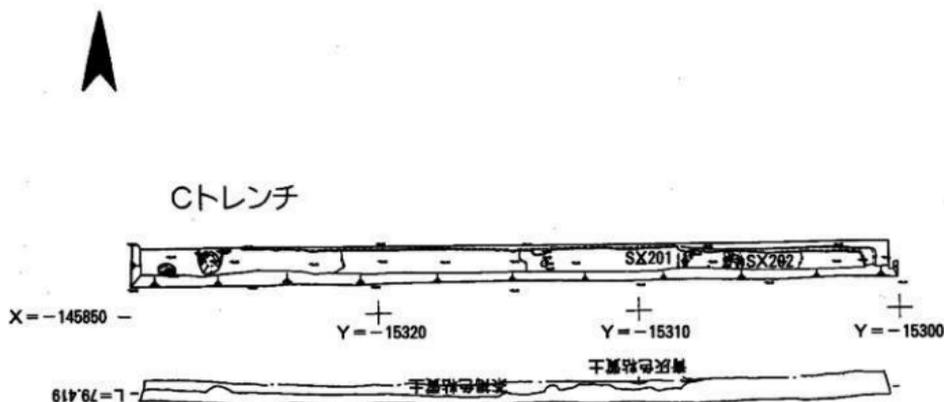
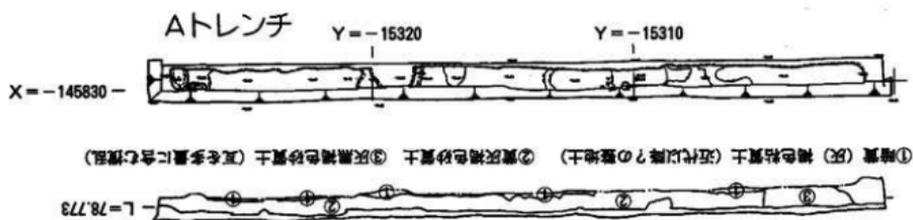


図7 Aトレンチ・Cトレンチ遺構配置図・南壁土層図 (1/2)

軒瓦

巴文軒丸瓦 (第16図46) 内区は中央に小さな珠文をもつ左巻きの三巴文で、外区に比較的大きな珠文をめぐる。丸瓦の挿入位置は高いが、接合粘土は多く、分厚い瓦当裏面を形成している。

唐草文軒平瓦 (第16図47) 瓦当面の右半分、左から右に流れる唐草だけ残存する。残存部左端に中心飾り状の文様が認められるが、明らかでない。頸の形態は平安時代末～鎌倉時代初頭の軒平瓦によく見られるものである。

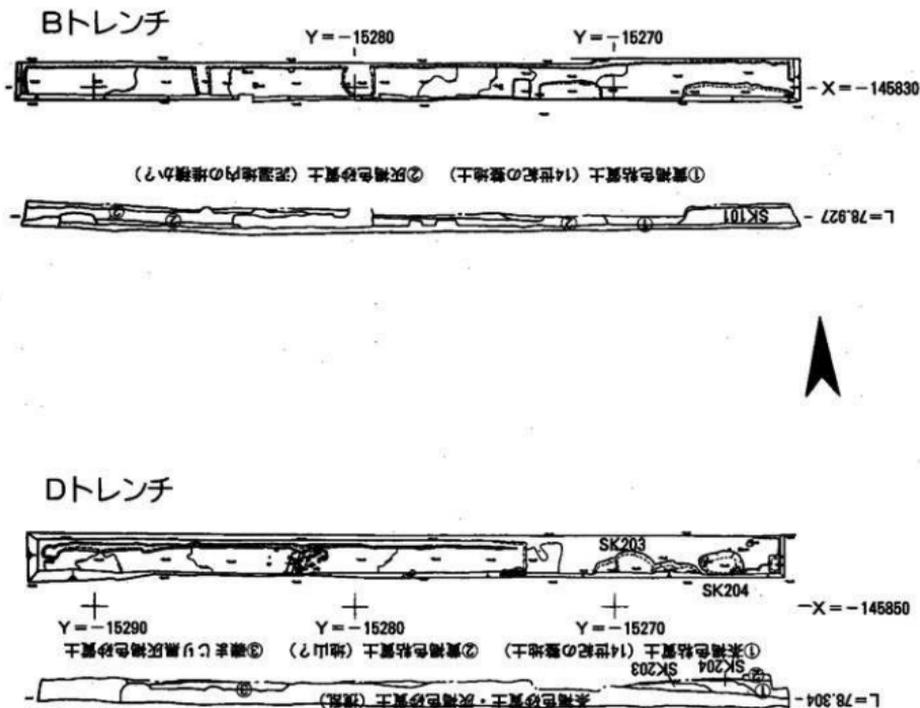


図8 Bトレンチ・Dトレンチ遺構配置図・南壁土層図 (1/2)

IV 3寮の調査

1 遺構

今回の調査は国際学生寄宿舍の管理棟の南に残る一棟(3寮)の改修に伴うものである。埋蔵文化財の発掘対象地となったのは、建物の南側に接した構築物基礎が埋置される部分(中央出入口をのぞく)で、幅約1.7mのトレンチを西側は36m、東側は24m東西方向に設定した格好となった。西側を西トレンチ、東側を東トレンチとした(図9)。なお、深さは構築物基礎が及ぶ地表下約0.8mまでとし、遺構面に達していなくてもそれ以上の掘り下げを止めている。

当該地は平城京左京二条七坊四坪の東北隅にあたり、東トレンチのほぼ中央に南北方向の坪境小路が走り、東端は五坪の西北隅となる。また、西トレンチが奈良奉行所与力屋敷の南端の一軒に、東トレンチが与力屋敷東側の町屋の一部にあたと推定された。

各トレンチの調査概要を以下に記す。

西トレンチ

西半では表土下 60～70cm で明灰褐色砂礫層の地山が認められ、一部では新察予定地 N 区で見られた河川堆積状の明黄茶褐色砂質土も存在する。この地山上では SK301 と SK302 を検出した。SK301 は埋土が暗茶褐色粘質土で、部分的に地表下 135cm まで掘り下げたが底に達しなかった。15 世紀前半の土師器、平安時代末～鎌倉時代初頭の軒平瓦が出土している。SK302 は埋土が暗黄茶褐色砂質土で、SK301 同様底まで掘り下げている。埋土から多数の瓦小片と 15 世紀の瓦質土器火鉢の断片が出土した。SK302 の東側 2.4m のところで地山が途切れ、暗灰褐色粘質土あるいは暗茶褐色粘質土の堆積が東側に広がっている。A～D トレンチで検出された池ないしは泥湿地に関係のある堆積と考えられる。一部に暗青灰褐色粘質土を埋土とする新しい遺構のようなものもあるが、調査範囲の制約もあって確認は出来なかった。

東トレンチ

西端と東端近くで、表土下 50～75cm で、中世（14 世紀）の整地土である明黄灰褐色砂質土が認められた。この整地土上の発掘区東半で SK303 が検出された。埋土中からは 15 世紀の土器・瓦片が出土している。SK303 より西側には暗灰褐色粘質土や暗黄茶褐色粘質土の堆積が見られ、西トレンチ東半から存在する池ないし泥湿地に関する堆積と考えられるが、やはり調査範囲の制約から新しい攪乱との区別をつけられなかった。

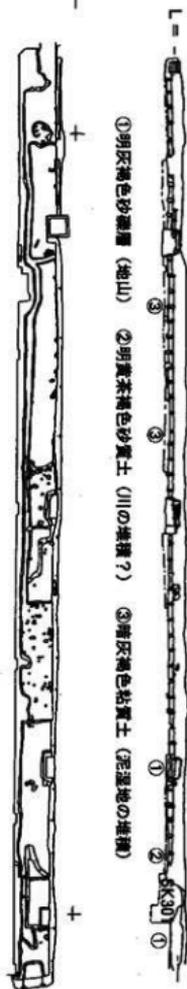
今回の調査もやはり範囲に制約があったため、得られた知見は 14 世紀前半以降にとどまってしまったが、中世後半～近世にかけての遺構・遺物が当該地区に多く存在することが明らかとなった。なかでも A～D トレンチや管理棟改修に伴う立会い調査（2003 年 7 月 22・24 日）で確認された池ないし泥湿地の東限と西限を知ることが出来たのは大きな収穫である。すなわちこの泥湿地は西側は地山を、東側は 14 世紀前半の整地土上の遺構をカタとして東・西トレンチにまたがって幅 38m の範囲を占めている。東のカタは B トレンチ・D トレンチの所見から大きく動いていないが、西のカタは A・C トレンチとも攪乱等で明らかでない。今回の調査によってこの泥湿地が与力屋敷のほうに入り込んでいた可能性が大きくなった。近世～近代にかけてと見られるこの泥湿地の詳細な時期を明らかにしていくことが課題として残されているといえよう。

西トレンチ

Y = -15330
+

Y = -15300
+

- X = -145900



① 扇状地の堆積 (扇状地の堆積) ② 扇状地堆積層 (扇状地堆積層) ③ 扇状地堆積層 (扇状地堆積層) ④ 扇状地堆積層 (扇状地堆積層) ⑤ 扇状地堆積層 (扇状地堆積層)

- X = -145905

東トレンチ

Y = -15280
+

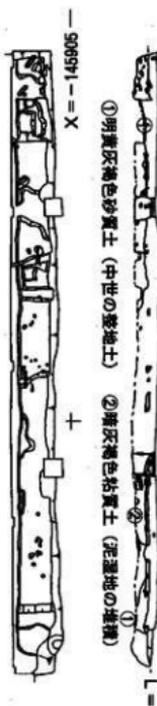
- X = -145990

西トレンチ

+ X = -145900



Y = -15300
+



① 扇状地の堆積 (扇状地の堆積) ② 扇状地堆積層 (扇状地堆積層) ③ 扇状地堆積層 (扇状地堆積層) ④ 扇状地堆積層 (扇状地堆積層) ⑤ 扇状地堆積層 (扇状地堆積層)

X = -145905

図9 西トレンチ・東トレンチ連続配置図・青磁土層図

2 遺物

SK301 出土土器 (第16図48~53) 土師器皿 (48~52) は口径 7.0~7.5cm、8.0cm前後、13.0~13.5cmに分けることが出来る。すでに赤褐色系 (赤土器) と灰白色系 (白土器) の明瞭な区別をなくしつつあるが、(48~50) の底部を押し上げたタイプは淡赤褐色あるいは明灰赤褐色を呈し、外面を指頭で成形するなど赤褐色土器の特徴を残している。これに対して (51・52) は形態や灰白褐色の色調からいっても灰白色系土器の系譜を引いており、器のゆがみも比較的少ない。土師器土釜 (53) は菅原氏分類の大和H₂型で、色調は淡黄灰褐色を呈する。これらの土器は15世紀でも中葉以降に位置付けられよう。

唐草文軒平瓦 (第16図54) 瓦当部の右端近くしか残存していない。左から右に流れる唐草文であるが、主葉と支葉の区別や単位がわからなくなりつつある。顎の形態は(47)に近く、同時期と考えてよいであろう。

V 考察編

20年以上に及ぶ継続的な構内遺跡の調査の結果、おのおのの調査区の面積は広くなくても、各調査結果を総合することによって、構内遺跡の存在する地域の歴史を考察する上で不可欠の資料を得ることが出来た。特に、平城京以来都市遺跡としての奈良 (南都・奈良町) の一部を形成しているという位置付けと興福寺から佐保川左岸にかけての斜面地を各時期においてどのように有効利用していたかという観点からは、都市の住環境における課題解決、すなわち環境問題を歴史的な視点から考えて行く可能性を認識出来たと言えよう。本概報では近世の構内遺跡調査成果を中心に、この地域に居住を行った人々が都市を舞台にした環境の問題をどのように解決していったかを明らかにするところまで及んでみたい。

1 構内旧地形の復原 —古代・中世河川敷の検出—

まず、構内遺跡が存在する地域の本来の地形がどのようなものであったかを、発掘調査資料をもとに概観しておきたい。当該地は奈良女子大学創立に伴って、大きな改変を受けていることは想像に難くないが、それ以前にも近世初頭の奈良奉行所の造営のように、景観変化の大きな画期が見られる。また、本概報でみたように、河原や河床であったところを埋め立てた中世後期初頭の規模の大きな整地も認められた。しかし、この地域の基本的な地理的環境を古代にまでさかのぼって考えてみると、第一に考慮に入れなければならないのは、興福寺をのせる尾根上地形から佐保川に向かって何本も存在したであろう、南から北に向かって流れる小河川とその侵食に伴う谷状地形であろう。

実際のところ、大学構内は半分近くこういった2つの谷に占められている。1つは、現在の寮 (国際学生宿舎) のあるところは、南から北に大きな谷があり、佐保川に向かって川が流れていた。もう1つは、南門から北へ行く道の下にも小さな谷があって、やはり佐保川に流れ込む小河川があったのである。つまり、大学構内のうち、記念資料館と文学部棟、それとG棟から国際交流会館にかけての地区が尾根

状となって安定した場所であり、グラウンド・E棟・体育館のある場所は2つの谷を流れる川と佐保川の川原であった。

川原や河床には大きな礫が広い範囲で散乱し、上流からのゴミや流木が所々に見られたことであろう。称徳天皇の詔にある「天皇ノ大御髪ヲ盗ミ給ハリテ、岐多奈キ佐保川ノ鬮籠ニ入テ」(『統日本紀』神護景雲三年五月二十九日)というくだりもあながち根拠の無いことではない。これが奈良時代の初め頃、少なくとも東大寺が建設され、聖武天皇陵が造営されるまでの大学付近の景観であると推定される。

大学の場所を含む佐保川流域や対岸の奈良山一帯は古くは佐保と呼ばれ、奈良時代の文献にもしばしば出てくる。なかでも「長屋王の佐保の宅」というのは、奈良時代の初め723年から726年にかけて、新羅使を迎えて詩宴が催されたことが『懐風藻』に見える。長屋王の邸宅については左京三条二坊の広大な宅地がそれに当たることが発掘調査によって明らかにされたが、同時に出土した『長屋王家木簡』の中に「佐保解進生薑貳拾根」というのがあり、「佐保宅」が別に存在することが明らかとなった。かつては左京一条三坊十五・十六坪で発掘された庭園を伴う宅地に比定されたこともあったがこの地では宮に近く佐保川に遠くて、佐保と呼ぶには抵抗があり、「繁絃辨山水」(塩屋連古麻呂)「山嶺幽幽谷。松林對晚流」(安倍朝臣広庭)「勝地山園宅」(百済公和麻呂)という具合に『懐風藻』で詠まれた佐保宅(作宝楼・宝宅とも)の風景とはかけ離れているのではないと思われる。

ここで、復原された奈良女子大学及びその周辺の地形を考えると、佐保川上流の北に向かって開けた2つの谷、すなわち「深山幽谷」の存在、「佐保」とするのにも問題の無い立地等々といったところから、興福寺西北に当たるこの付近を「佐保宅」の有力候補地としても問題無いといえよう。ただし、発掘によって得られたデータはそのことを証明するには程遠い。今後の大学及びその周辺の考古学的調査に期待しなければならない。

2 構内遺跡近世遺構の検討

過去の構内遺跡で検出された近世(近代も含む)遺構で最も顕著なものは奈良奉行所の濠であろう。詳細は各々の概報で既出したが、奉行所の四周をめぐる濠の東北隅と西南隅が明らかになっている。特に東北隅は発掘面積の広さもあって、東西方向の濠とその北側に存在した近世の町屋の遺構の変遷を明らかにすることが出来た。しかし、それ以外の調査区では面積の制約や後世の攪乱もあって、井戸や大きな土坑だけしか検出されないことが多い。これらの大部分は奉行所周辺の一般の町屋であり、与力屋敷、寺院、田畠といった近世奈良町の構成要件であるが、出土遺物や時期の変遷を検討することにより、近世都市奈良を支えた都市民の生活実態を僅かながら伺うことが出来ると言えよう。以下に過去の調査で得られた近世遺構の概略を述べてみたい。

一、与力屋敷

今回の調査では与力屋敷が存在すると推定されてきた、現大学学生寄宿舎敷地に関する考古資料を得ることが出来た。概要は上述したが、遺構についてのまとめと関連した遺物に関する考察を行っておきたい。やはり、上述したように当該地域は古代、中世前期は河川敷であって、14世紀になって短時間

で大規模な整地が行われ、河川は消滅した。この間水系がどのように変化させられたかは明らかでないが、中世後期の新しい段階に至ってまた同じところが水が流れた形跡がある。そのために、S区・N区・A～Dトレンチ、東・西トレンチの東半でみられたような泥湿地状堆積が形成されたと考えたい。この泥湿地はさらに南北にひろがり、「半田」という地名から田畦として使用されていた可能性もある。つまり、近世を通じて与力屋敷の背後には河川の名残である泥湿地が広がっていた景観を復元出来る。そうすると、近世になって当該地に存在した河川をどのように流路変更させたのかという疑問が残る。このような疑問に対する答えは、同時代のほかの資料に伺うことが出来る。まず、この河川の水系に関しては、新しい資料になるが、宝永六年の「和州南都之図」には若草山の背後

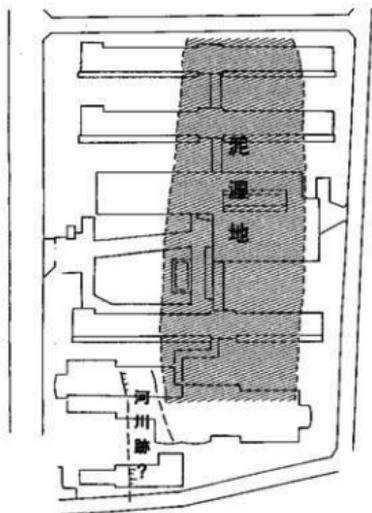


図10 国際学生宿舎内の近世・近代泥湿地範囲概念図

に源を発し、山麓西側で南に枝分かれし、春日社の鳥居間を参道に沿って流れ、西北に折れて興福寺境内を斜めに横断して一乗院にまで至る水系が描かれている。一乗院より下流は図示されていないが、この小河川が同院境内の遺水として利用されていたことは2001年3月の発掘調査で明らかにされており、西北あるいは北流して興福寺旧境内西北隅外から急斜面を佐保川に流れ込んでいた可能性が高い。

この河川の延長となり、佐保川につながっているとみられる河川遺構に2つある。ひとつは今回の調査で確認された河川である。もうひとつは旧二条六坊の十一・十二と十四・十三の坪の坪境小路に沿った谷状地形河川である。十一坪内の調査で、佐保川に流れ込んで行く末端の状況が明らかにされている。そして、川路聖謨の「車府紀事」には奉行所南半西寄りにあった庭園の泉水は水を引いていたという記事があり、奉行所造営に伴って与力屋敷の敷地を確保する目的もあって、奉行所の中を通る水系に変更された可能性が高い。あるいは、灌を直接水系の一部に使用したことも考えられる。この泥湿地は近代に入ってから整地され、おそらく町屋として利用されたことが明治二十三年の「奈良町実測全図」から伺える。

次に、遺構の変遷の画期についてみることにする。S区・N区におけるC期の遺構については上述したが、C期はSK17のように最終末大和型土釜の時期であり、1640年代頃が下限とされる。この時期の顕著な遺構一井戸やゴミ捨て穴は確認されなかったが、与力屋敷は江戸時代初頭、奉行所開設と同時に存在したことが考えられるため、発掘区外になる可能性もある。SE20に切られたSE23などがC期に属するのであろうか。なお、C期直前、B期最終末とも言えるべき遺構(SK12)は講堂調査の時のSE2783、SE2800など散見されるが、その時期や井戸の規模から考えても奉行所開設直前まであった町

屋に関連する遺構の可能性が高いことに留意すべきであろう。C₁期は遺構の埋設時期が18世紀後半と幕末の両方があり、18世紀〜幕末の長い期間に設定したが、SE20の遺物を検討した結果、18世紀前半とすることが妥当であり、井戸からすれば3時期すなわち、SE20→SE21→SE22と推移していくことが明らかとなった。近世のうちに与力屋敷南端の一軒では井戸を3回（4回の可能性あり）掘り直し、屋敷の背後に掘られた四角形の土坑からはC期全期間の土器が出土している。これはS区、N区のC期における順調な時期変遷（17世紀中葉〜後半に問題を残しているが）とSK25の特殊な用途（防火用水か）を伺わせる手がかりとなろう。C₁期（近代）に入ると与力屋敷は廃され、新たな土地利用がなされたと考えられるが、詳細は明らかでない。ただS区の西半にある土坑群は計画的な廃棄を思わせるものがあり、井戸SE13とともに下限年代を詳細に検討する必要がある。これは後世の奉行所濠西南隅出土一括遺物から求められる明治末年という濠の最終埋め立て年代とも関連があらう。

二、奉行所北濠と北魚屋西町

奈良奉行所は与力を代々務めた玉井家に残る『庁中漫録』に「一椿井町ノ奉行所今ノ奉行所へ移ル年代ハ慶長八癸卯年同九甲辰年両年二成……（中略）……私父五郎右衛門常ニ語りシハ某十六歳ノ時椿井町ノ御奉行所今ノ所ニ移ル依之惣構ノ掘ヲホル人歩ニ某モ出ノホル……」とあり、慶長八・九年にそれまでの椿井町の代官所から興福寺北西の地に移転が行われた。なお、昔日を回顧する際の過剰な表現でなかったとすれば、「総構之」の堀が掘られたことになる。

奉行所は慶応4（1868）年に奈良奉行の役職が廃止されるまで機能するわけであるが、その敷地自体は明治に入ってから様々な目的で使われ、明治41（1908）年の奈良女子高等師範学校開校の際の整地工事によって土塁が削られ濠が埋められるまで存続した。

しかし、その具体的な景観については文書や絵図によって断片的にうかがうことが出来るだけで十分に判明していない。奈良女子大学に残る「南都御役所絵」（文化3年2月の書き込みあり）によれば、奉行所は外周が東西93間（約180m）、南北93.5間で、四周を6間（約10m）前後の濠が取り囲んでいる。内部の建物は文化3（1806）年時点で取り壊されたものがあるようであるが、40以上の棟を数え、かなり詳細な間取りをも知ることが出来る。また、濠の内側には幅10～15mの土塁が存在していたことが奈良女子大学に残る奉行所跡実測平面図から知られる。

1982年2月から5月にかけて、奉行所の東北隅西寄りで約1100㎡の発掘調査が行われた。検出された遺構は奉行所濠の東北隅とその北側に続く近世の町屋である。下層には古代・中世の遺構が多数認められた。

濠は北濠SD2780と東濠西岸の一部が検出された。北濠は検出された部分の全長27.5m、濠の上端幅9.0m、底面の幅4.8m、深さ2.2mの規模である。濠内の堆積は普請のはじまった慶長8～9（1603～04）年から濠が最終的に埋められた明治41（1908）年ごろまでの約300年間おおむね順調であり、各層から出土した遺物は膨大な量である。内側の土塁については、遺構として確認することが出来なかった。

濠の北側にひろがる町屋は、玄関口を北に東西に走る道路SF2823に向けていたと考えられ、北魚屋西町（現在に至る）の一角を形成していた。遺構としては新田2時期の井戸が2組検出され、町屋の変

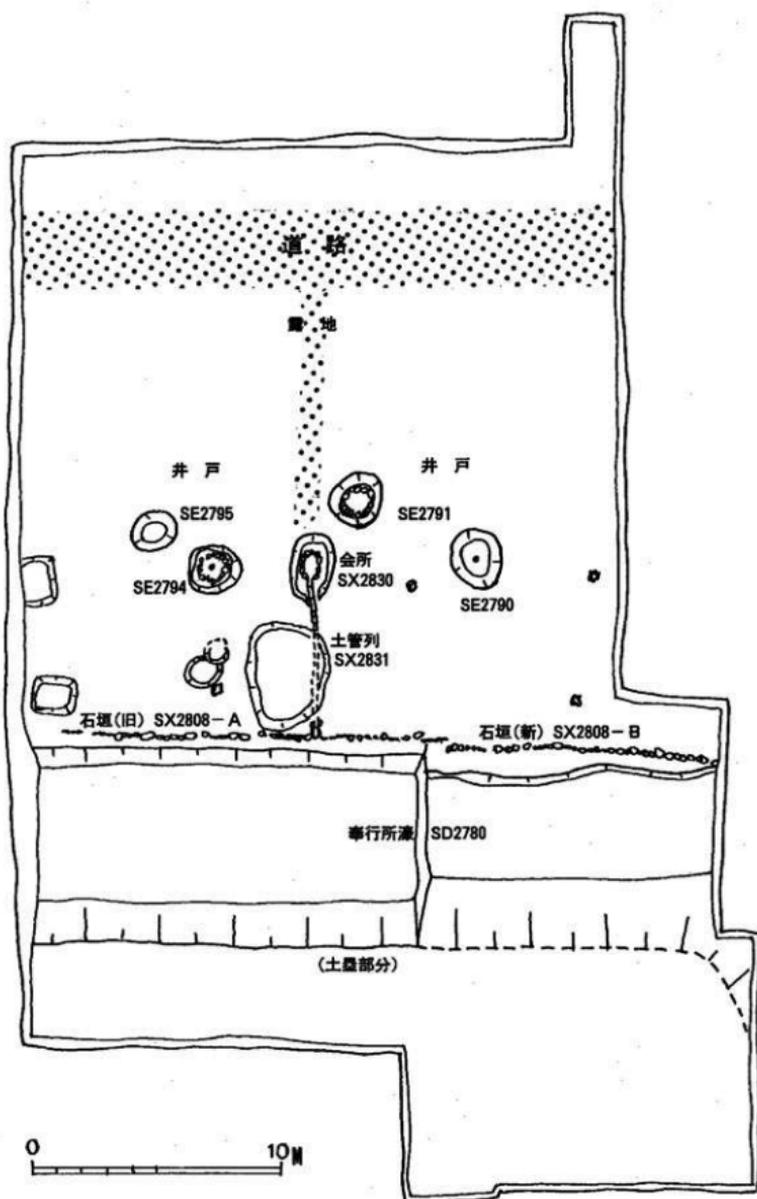
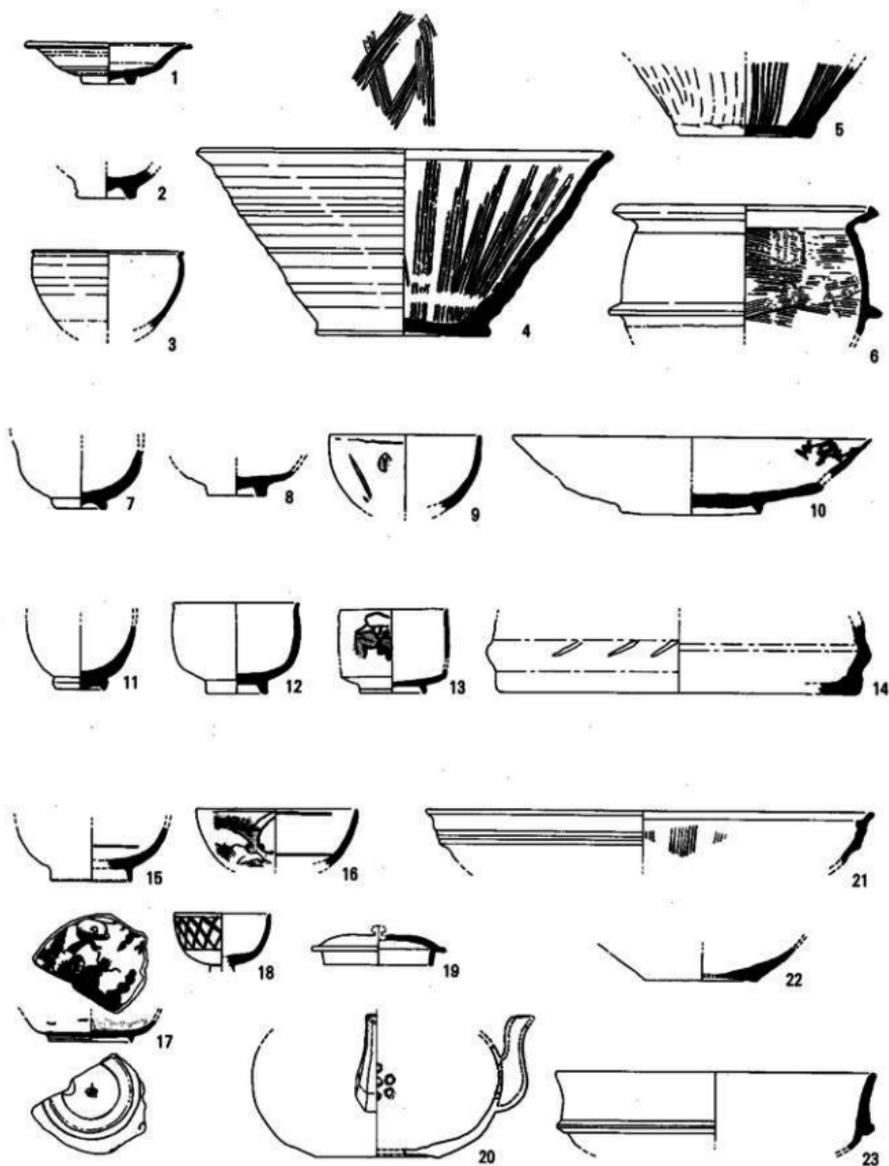


図11 近世北魚屋西町関係遺構配置圖・想定復原図



1~6 : SK2806 7~10 : SX2830 裏込め 11~14 : SE2790 15~23 : SE2795

图12 近世北魚屋西町開運遺構出土土器

遷を跡付けられるが、古い時期の井戸 SE2791・SE2795 は 18 世紀初頭に埋まり、竹筒を立てて埋められた新しい時期の井戸 SE2794・SE2790 は 18 世紀後半を下限とすることが出来る。また、濠北側には 2 時期にわたって石垣が築かれているが、時期的な対応関係は未解明である。

井戸とともに重要なのが両者の中間にある石室状遺構 (SX2830) である。南北長 2.45m、東西幅 1.76m の掘形の中に内法 1.0m×6.3m、深さ 6.2m の小規模な石室状石組みを構築したものである。この石室の南端面から土管列 SX2831 (暗渠) が南へ伸び、途中、土坑で攪乱されている部分はあるものの、奉行所濠とつながっており、この施設が集水を行って堀に排水するいわゆる会所の役割を果たしたものであると推定される。掘形と石組みの間、いわゆる裏込め土中からは砂目積唐津皿とともに 17 世紀後半の伊万里磁器が出土しており、この施設の年代の上限を知る手がかりとなる。この排水施設は濠の北岸に接する土坑 SK2807 によって土管列が壊されて機能を果たせなくなり、濠への排水は SD2834、SD2838 という 5m 強の間隔をもつ 2 本の溝が行うこととなって、近代に至ったと考えられる。このようなことから SX3830 と暗渠排水 SX3831 の存在する空間は、2 基 1 組の井戸で代表される居住単位間の通路状部分すなわち露地のようにできていると考えられる。この露地の両側の居住単位の住人については、裏木戸の表札風の木簡に「イサガハ」とあったり、焼磁磁器の銘に「新町かわちや」とあったりすることから寛政元年 (1789) 5 月 11 日の触状 (『奈良内侍原町諸事記録』) や文化四年 (1807) 8 月 7 日の「奈良奉行所町代日記」にみえる「河内屋源之介 (助)」と関連させて、(諫川) 源之助の経営する公事宿・河内屋が発掘調査区内に存在したと考えられている。焼磁磁器は幕末から明治にかけてのものであり、さらに化学系の呉須を使い、底部外面に「大日本諫川好」と書かれた徳利も出土していることから、露地をはさんだ 2 軒のうちのどちらが河内屋かは判らないにしても、18 世紀後半以降、河内屋という公事宿が奉行所との関連で、この場所に設けられていたとい

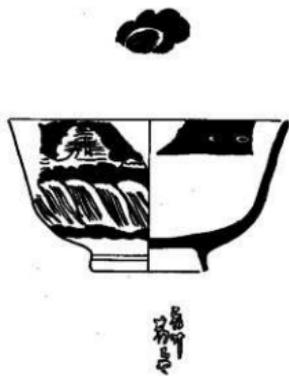


図13 「新町かわちや」銘の焼磁磁器 (1/2)

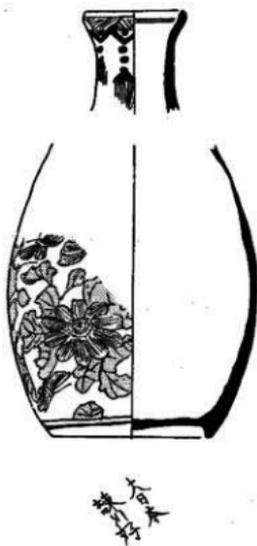


図14 「大日本 諫川好」銘の磁器徳利 (1/2)

う事実が確認された。元禄期（1688～1704）の郷宿（公事宿）16軒を記した「高木又兵衛文書」を信じるなら、この段階には「河内屋源之助」の名は北魚屋西町にはなく（中御門町に河内屋小左衛門の名）、この場所に「河内屋」はまだ存在していなかった可能性が高い。いっぽう、これらのことと会所（石室伏遺構）の設置年代等の考古資料によると、17世紀後半の北魚屋西町は18～19世紀とは違った景観を呈していた可能性が高いが、この時期とそれ以前の奉行所創始期については改めて論じたい。

なお、これ以外の奉行所関係の調査では、1986年2月から3月にかけて、西南隅北寄りで約650㎡の面積が調査され、西濠SD4020東岸が30mにわたって検出されている。

西濠の西岸および隅角部分は発掘区内にはなく、西濠の幅、正確な深さをはじめとする規模は不明である。

濠内の堆積も近代の暗渠配管埋設のため大きく攪乱されており、最下層に1m弱の厚さで本来の堆積を残すのみであった。なお、この堆積土の花粉分析から、濠外土堤には松が並木をなして植えられていることが推測されている。

三、北小路町の町屋

奉行所周辺の調査であるが、1987年に西濠から西へ150m離れた地点（奈良市北小路町）で約800㎡が発掘調査され、幅3～4m、深さ80cmの南北方向の溝SD5631が検出された。この溝は堆積状況から長期間存続したものではなく、短期間に掘られて一挙に埋められている。

この溝の評価も課題として残されているが、溝を埋めた上に整地を行って形成された近世の町屋の変遷については未解明な部分が多い。井戸SE611を破壊して掘られた土坑SK722から出土した大量の墨作り道具（油煙受け）から、18世紀後半までは工場を兼ねた墨屋が存在したことは確実であるが、その上限や町屋としての形成時期がいつごろまで遡るかは明らかでない。

しかし、道路を現在と同じ位置一発掘区の東側に考えると、近世以降の町屋において道路に近い部分にSE611・SE612・SE711・SE811・SE812といった井戸が集中し、トイレと考えられる埋桶SX651の存在などから、生活関連の遺構は東側の道路寄りに集中している傾向が認められる。一方で生活廃棄物の捨て場たる土坑はSK622・SK621・SK721のように、道路より離れた西側の奥まった部分に見られる。

このようなことから、近世から近代にかけての町屋の居住空間は道路に接する発掘区東側にあり、これらから西に離れた家屋の背後に空き地になっていてゴミ捨て穴が多く掘られたと推定される。なお、同時期で特徴的な遺構としてSK821やSK822のようにある程度の規格を意識して計画的に掘られた土坑がある。これは今回の調査のN区SK25とも規模や家屋外に位置することなどから同じ性格を持つものと言えよう。一応防火用水の可能性を考えておくことにする。

この発掘区から道を隔てた東側のやはり北小路町内でも近世の町屋が検出されている。南北方向の溝SD3134とその南端の方形土坑SK3135は北魚屋西町で見られたような集水施設（会所）を思わせるが、この両側に井戸SE3106・SE3138で代表される居住単位が存在していたと考えられる。SK3135・SD3134が集排水の機能を果たしていたとすると、北に流れた水は一旦東に向きを変え、旧地形復原のところで

述べた西側の谷に沿った水系に合して最終的に佐保川に流れ込んだと考えられる。本来の地形を大きく改変することなく活かして普段の水はけや出水時の排水に対処していたのであろう。ここでは他の地区のように井戸が複数の時期にまたがらず、町屋形成を比較的短期間に終わってしまった可能性が高い。しかも、その時期は18世紀後半である。この西側の道路に近いところで近世の比較的大きな井戸SE06が1基検出されているが、それ以外は顕著な遺構はなく、道より東の北小路町は近世を通じてあまり居住が行われなかったとすることが出来る。

四、その他 一東新在家町一

奉行所の北西から西に延びて北小路町の北に至る道の両側は東新在家町と呼ばれたが、大学創立に伴って構内に取り込まれ消滅した。この道の両側に当たる部分を、1981～1982、1999、2002の各年に調査を行った。この結果、居住単位を示すと見られる井戸は東端の奉行所に接する道の南側でSE2858・SE2859が、西端近く南寄りて幕末頃の井戸が検出された。いずれも石組みで、前者は奉行所西側の南北道に沿った南法蓮町の町屋の一軒に伴うもの、後者は絵図にも見える「愛正寺」と関係のあるものといった可能性が考えられる。なお、SE2859からは、管状にした竹を穴をあけた太い角材でジョイントとしてつないだ上水施設の残骸が出土しており、近世でも比較的新しい時期の井戸であった事が判る。

この両者の中間地点では近世の井戸SE2311があるが、その5m北に東西に並んだ3基の円形土坑が

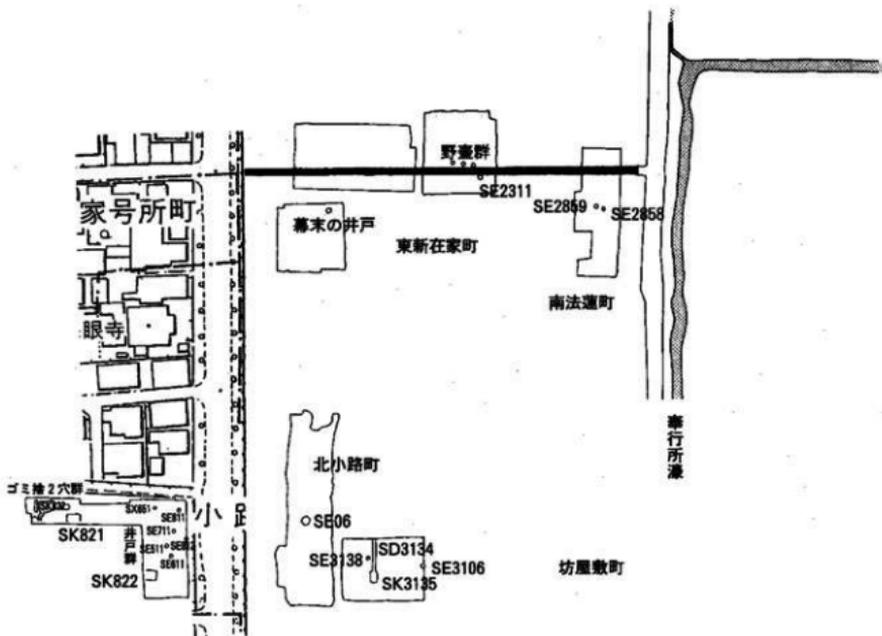


図15 北小路町・東新在家の近世遺構

あり、ここから漆喰が出土していることから、これは野壺である可能性が高い。野壺は人糞肥料を蓄えておくための施設で、水で薄めて畝に播かれるため、SE2311はその目的に沿った野井戸であると考えられる。したがって、少なくともこの付近は近世には扇地の風景が展開していたと想定されるのである。

このように奉行所周辺の町屋という特殊性はあるかもしれないが、井戸や土坑という顕著な居住遺構の時期を見る限りは、奉行所付近の近世奈良町は奉行所創始と同時に始まったものでなく、それは17世紀中葉まで下る可能性が高い。

もちろん、奉行所移転に伴って立ち退いた町屋も多く、奉行所の機能を支える新しい町屋建設には少なからぬ時間を要したであろう事を推察すると当然のことかもしれない。しかし、濠から大量に出土した唐津・美濃・初期伊万里によって示される時期をどのように評価すればよいかという問題が残されるが、やはり改めて論ずることにしたい。

3 焼雑磁器について

奈良奉行所濠及びその周辺の近世・近代の遺構から出土している焼雑磁器を総覧すると、時期的には幕末（19世紀前半）～近代初頭のものが中心で、やや時期の古いものを含んでいるが、これらは伝世的要因の強いものを中心であろう。地点ごとの数量に注目すると、最も多いのは奈良奉行所北濠（北半）から出土した「新町かわちや」銘を持つ碗をはじめとする一群である。

現在のところ、染付磁器ばかり25点（2000年1月5日現在）が知られており、器種は碗、皿、碗蓋、猪口、杯、大型鉢、湯呑など各種であるが、日常雑器がほとんどであり伝世的なものはごく少数である。これらの焼雑磁器はその銘にも見られたように、奉行所北濠外にある町屋（北新町西之町）の中の旅館「かわちや」で使用された器と考えられる。つまり、旅館という、不特定多数の人々に食を供するため不特定多数の日常雑器（食器が大部分であろう）を擁していた状況を想定出来るのである。

焼雑磁器は奉行所濠南西隅から西に150m離れた北小路丁（やすらぎの道）に面した現在の北小路町4番地の調査でも見られた。ここでは18世紀後半までは墨屋（墨の製造・販売？）が存在していたが、それ以後近代に至るまでどのような性格の町屋があったかは明らかでない。しかし、東西3.5m以上、南北3.5mの方形土坑SK822からは幕末を中心にして近代初頭に至るまでの陶磁器、土師器等が出土した。焼雑は7点の染付磁器に認められるが、色絵の蓋物や、やや大型の蛸唐草花枝文皿のように伝世的要素の強いものがあることは注意してよい。この幕末の町屋遺構の性格を明らかに出来ていないので、陶磁器の利用状況がいまひとつ判然としないが、ごく普通の商家ないしは民家であるとする、奉行所北濠外の「かわちや」のような様相とは異なっていると考えられる。すなわちここでは「不特定多数の人による不特定多数の雑器の使用」という様相でなく、少数の構成員が銘々器的なものを保持していることが基本となっていると考えられよう。そして集団の構成員の銘々器には焼雑が施されていないという事実を確認してよいであろう。

幕末から近代初頭という時期的共通性を前提にして、旅館と普通の町屋という性格の異なる居住単位における焼雑磁器のあり方を対比すると、以上のような明瞭な様相の違いが指摘できる。そして、後者における（前者の中にも存在する）伝世的要素の強い磁器に対する焼雑は、その普及以前に見られた漆

等を使用した陶磁器の補修の延長上にあると考えられる。

19世紀に入って、焼継師という専門技術者をも生み出したこの「アイデア商売」は、当時の日常雑器における磁器使用の隅々にまで入り込んだわけではなく、上述のような「不特定多数の人々に食を供するための不特定多数の日常雑器」といった状況下で商業活動として成り立つのが限界であったと言うことが出来るであろう。

焼継は近代に入ると急速に衰える。これはそれまで焼継師の活動に異議を唱え続けてきた陶磁器販売業者が生産業者にコストダウンを強いた結果、型紙摺や銅版摺によってそれが実現し、生産地の拡大による競争の激化と併せて、安価な陶磁器の普及が見られ、前近代的な活動を脱し切れなかった焼継師を駆逐したと考えられるのである。

近年、建築・土木設計図面のデジタル化が進んでいる。そのシステムを使って、奈良女子大学近辺の旧地形図の3Dモデリングを行った。

1. モデリングの目的

モデリングの目的は、現在失われてしまった地形を、より直感的に感じとることである。等高線図では地面の高低等は把握しにくい。だが3Dで確認すれば、その錯覚は生じにくくなると思われる。

2. モデリングの手法

2-1. 使用データ

今回使用するのは、等高線データのみである。このデータは、明治期における第式女子高等師範学校の建設時に行われた測量図を元に、武久義彦氏が復原したものを基準としている（『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報 I』1982）。武久氏も指摘しているように、明治期の段階で地形はかなりの改変を受けている。また、この測量図に示されている高さは0を工事の基準面とする相対的なものである。

これに、1981年～2002年にかけての発掘調査で得られた測量データを加え、作成されたのがFig1上である。上述したように、明治期のデータは相対的な高さしか記されていないため、発掘地点の標高から推測して、高さを与えている。

このように、各部で顕著なデータ不足が見られる。

2-2. 手法の詳細

等高線から、地形の3Dモデリングを行う方法として、今回は二つの方法が考えられる。一つは、等高線上の点同士を結ぶ方法。もう一つは、直接等高線上の点同士を結ぶのではなく、図上に一定間隔に印を配置し、等高線を読んでその印に高さを与え、印同士を結んでいく方法である。

今回は、谷・尾根等上下の動きの激しい部分は前者を、そうでない部分は後者を使用することとした。

A 等高線上の点を線で結ぶ方法

- ①画像処理ソフトを用い、地図をスキャニングする。
- ②CADソフトに取り込み、ベジェ曲線でなぞる（ベクトルデータ化）。
- ③等高線（多角形）に高さデータを与える。
- ④各等高線の頂点同士を線で結び、それに囲まれた面に色をつける。

B 一定間隔で置かれた点に高さを与える方法

- ①画像処理ソフトを使い、地図をスキャニングする。

- ②地図上に任意の大きさの格子を引き、交点に何らかの印（今回は基準点）を与える。
- ③等高線を読み、基準点に高さを与える。
- ④基準点同士を線で結び、囲まれた面に色を付ける。

3. 結果

3Dモデリングの結果はFig1下に示す。

大まかには復原できたと考えられるが、図16で示された箇所周辺は、他の地点より曖昧な復原となっている。

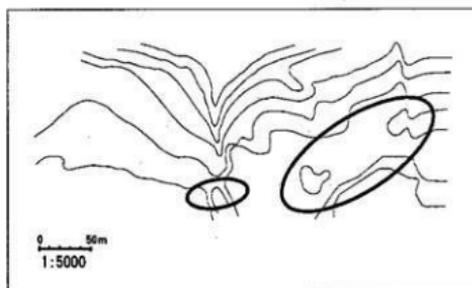


図16 復原が曖昧な箇所

このように1)「不自然に盛り上がった地形」・2)「広範囲にデータの無い地形」では等高線間の高さの推定が難しい。また、今回はデータのとられた時期が明治期であり、傾きを示す等高線以外のデータ（写真等）も存在しない。このことから、これ以上の詳細な復原は不可能と考え、等高線がある場所の高さを合わせるのみとなっている。

4. 考察

谷・尾根等の地形は等高線のみを図より直感的に判断出来るようになった。

明治期のこの場所は北へと下がるゆるやかな斜面であった。

このようにデータ不足の地図であってもここまでの復原が可能である。

最後に、この図を作るにあたってアドバイスいただいた矢部岳晴さん、ご協力くださった皆様方に感謝の意を述べたいと思います。

まとめ

興福寺北西の佐保川に向かった斜面地、中位段丘の礫と粘土の互層上、といった立地が構内遺跡の性格を限定する基本的な存在形態である。1,000年以上も継続する遺跡になると問題となっている時期のいわゆる原地形が判然としないことが多い。居住や耕作に便利なように斜面地にはテラスが造られる。そのために高い部分の土を削って低い場所の整地を行う。生活圏をおびやかさないように川の流れを変える。同時に排水を効率的に行う。やがては川を暗渠にして上に道路などを設ける。こういった努力が不断にくり返されてきたことは20年以上の調査の結果から明らかである。このような営為の痕跡を逆

にたどってこの遺跡に積極的居住が行われはじめた当初の地形を復原することを先ず試みた。現在よりも起伏が激しく佐保川に流れ込む小河川が礫層を浸食し、砂礫を押し流していたであろう。小河川に挟まれた尾根上には古墳が築かれ、次の奈良時代には「深山幽谷」の景観を呈していたであろうと推定される。

こういった自然河川が形成する侵食谷を基本とする地形（原地形）をこの遺跡の住人たちが居住に適するように改変していくわけであるが、積極的な働きかけがなされるようになったのは奈良時代後半（土器編年平城IV期以降）になってからである。以後平安時代中頃（10世紀）までは河川の形成する谷と中間の尾根という基本的な地形を大きく改変することなく、整地などで少しずつ居住に適する土地を拡大していった。これは奈良時代初頭に構内遺跡東南の高所に建立された興福寺がその領域を徐々に広げてきた結果であると思われる。

中世に入ると、興福寺（時期によっては東大寺）を支えたいわゆる都市の「機能域」として本格的な都市生活が営まれていたことを知る事が出来る。人間が都市で生活する場合、農村と比べて、対自然あるいは集住という形態からする解決しなければならない課題が存在する。構内遺跡の場合は、斜面地にあり河川に隣接しているため、扇状地末端をも安定した居住地としなければならないので、効率的な排水が大きな課題であったと考えられる。この点に関しては、少なくとも鎌倉時代（13世紀）に入ると、大きな居住単位（掘立柱建物と井戸からなる）には浅いが面積の広い池が伴い（SG01）、おそらくこれが生活排水を集める役割を果たし、豪雨などによる出水時には自然地形によって既存の河川に排水していた可能性が高い。

中世後期初頭（14世紀）に東側の河川は大規模な整地によって埋め立てられ、西側の河川も遅くとも奉行所濠が掘られて水系の大きな改変がなされるまでには姿を消していた。近世に入ってからは、東側はおそらく出水時にはしばしば河道として再生され、その痕跡が泥湿地となって残ったと考えられる。当該地域にとって、排水を中心とした水利のための土木技術の発達もさることながら、奈良奉行所という司法・行政の中心となる機関が設置されたことは大きな転機であった。北濠北側の北魚屋西町の成立に際しては会所SX2830と濠への排水のための暗渠土管列SX2831が設置されてから町屋が成立したと考えられ、しかも発掘区内には公事宿という奉行所の機能とかかわりの深い施設が存在していたことは興味深い。17世紀中頃から後半にかけて奉行所周辺の町屋の整備がある程度計画的に行われたことを物語っている。

なお、17世紀中葉～後半という時期は他の近世遺跡においてもその景観の変遷の大きな画期があったことが指摘されているが、その意味するところに考察を加えるのは今後の課題であろう。

土器観察表

表1 古墳・奈良・平安時代

(単位cm、カッコ内は復原値)

図版 番号	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
1-1	須恵器杯蓋	(17.6)			2~3mm程度の白色砂粒を含む	良好	灰青色	
1-2	須恵器杯蓋	(16.8)			2~3mm程度の白色砂粒を多く含む	良好	淡灰青色	
1-3	須恵器杯身	(14.6)			1mm程度の白色砂粒を適度に含む	良好	灰青色	
1-4	須恵器杯身	12.8	5.0		2~3mm大の白色砂粒を若干、0.1mm前後の白色砂粒を多く含む	良好	淡灰青色	
1-5	須恵器器台				1mm程度の白色砂粒を若干含む	良好	外面淡灰青色、 内面黒灰色	残存径12cm、通し孔は三角形か
1-6	須恵器甕	(20.0)			1mm以下の白色砂粒を僅かに含む	良好	青灰色	
1-7	須恵器甕	(27.0)				良好	暗紫灰色	
1-8	須恵器甕	(21.2)				良好	黒灰緑色	外面自然釉
1-9	須恵器甕				1mm以下の白色砂粒を含む	良好	暗灰色、濃暗 緑色釉	外面平行叩き、自然釉、 内面同心円叩き、底部外 面付近に他の器体の溶着 あり
1-10	須恵器甕C	(44.8)				良好	暗灰色	
1-11	須恵器杯A	(14.0)	3.4	(10.8)		良好	淡青灰色	
1-12	須恵器杯A	(19.0)	3.5	(14.4)		良好	灰白色	
1-13	須恵器杯	(17.6)				良好	灰白色	
1-14	須恵器杯B			(12.6)	0.5mm大の白色砂粒を含む	良好	灰色	
1-15	須恵器杯B			(11.2)		良好	内面灰白色、 外面黒灰色	壺底部の可能性あり
1-16	須恵器杯B			(11.8)		良好	淡白褐色	
1-17	須恵器蓋	(15.0)				良好	灰色	
1-18	須恵器壺			(6.0)	1mm大の白色砂粒を含む	良好	淡灰色	
1-19	土師器皿A	(18.3)	(3.4)			良好	赤褐色	
1-20	土師器皿C	(9.2)	(1.9)		1mm大の黒色砂粒を含む	良好	灰白褐色	
1-21	土師器皿B			(16.6)	0.5mm大の白色砂粒を含む	良好	赤褐色	
1-22	土師器甕	(22.2)			透明な白色砂粒を多く含む	やや 不良	淡白褐色	
1-23	黒色土器A類杯	(16.8)				良好	淡白褐色	
1-24	黒色土器A類杯	(14.0)			0.5mm大の白色砂粒を含む	良好	淡褐色	
1-25	黒色土器A類碗			(9.2)	0.5mm大の透明砂粒、雲母を含む	良好	淡褐色	

表2 SD06・SD07・SE26

図版 番号	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
2-1	緑釉陶器皿			(7.0)	良好	良好	暗濃緑色	
2-2	土師器皿	(12.6)			1~4mmの白色砂粒を多く含む	良好	赤褐色	
2-3	土師器皿	(14.2)			3mm程度の白色砂粒を多く含む	良好	赤褐色	
2-4	土師器皿	(9.4)	(1.4)		2~3mmの白色砂粒を含む	良好	赤褐色	内面にすず付着
2-5	土師器皿	9.3	1.6		1~3mmの白色&黒色砂粒を多く含む	良好	赤褐色	
2-6	土師器皿	(10.0)			1~3mmの白色砂粒を多く含む	良好	淡赤褐色	内面に7mm程の長石あり
2-7	土師器皿	10.4	1.8		2mm程度の白色砂粒をわずかに含む	良好		
2-8	土師器皿	5.8	1.3		1~2mmの白色砂粒を多く含む	良好	赤褐色	
2-9	土師器器台	(8.4)			3mm程度の白色砂粒を多く含む	良好	淡赤褐色	
2-10	土師器土釜	(27.6)			0.5mm大の白黒色砂粒を多く含む	良好	淡赤褐色	
2-11	青磁碗	(16.4)			良好	良好	淡緑白色	
2-12	青磁碗			(4.2)	良好	良好	青灰色・淡緑白色(釉)	
2-13	土師器皿	12.6	2.7		1mm大の白色砂粒と雲母を多く含む	良好	赤褐色	
2-14	土師器皿	12.5	2.8		雲母を含む	良好	赤褐色	
2-15	土師器皿	12.1	3.0		1mm大の白色砂粒と雲母を含む	良好	明淡赤褐色	
2-16	土師器皿	12.4	2.8		良好	良好	淡白褐色	
2-17	土師器皿	11.5	3.4		雲母を含む	良好	淡赤褐色	
2-18	土師器皿	9.3	1.6		雲母を含む	良好	淡赤褐色	
2-19	土師器皿	9.0	2.0		雲母を多く含む	良好	暗茶褐色	
2-20	土師器皿	9.5	1.5		0.5mm大の白色砂粒を含む	良好	暗褐色	
2-21	土師器皿	9.3	1.5		雲母を含む	良好	淡白褐色	
2-22	土師器皿	9.0	1.4		雲母を含む	良好	淡赤褐色	
2-23	須恵器鉢	(22.2)			2mm大の白色砂粒を含む	良好	黒灰色	
2-24	瓦器碗	(10.6)			白色砂粒・クサリ礫を含む	良好	淡灰色	
2-25	瓦器碗	(9.8)			赤色クサリ礫を多く含む	良好	灰黒色・灰白褐色	
2-26	瓦質土器鉢	(27.6)		(19.5)	良好	良好	黒灰色	
2-27	瓦質土器鉢	(44.6)			良好	良好	灰白色	

図版 番号	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
2-28	瓦質土器鉢			(27.0)	良好	良好	黒灰色	
2-29	瓦質土器鉢	(43.0)			良好	良好	黒灰色	
2-30	土師器皿	13.4	3.0		1mm以下の白色砂粒と雲母を含む	良好	淡赤褐色	
2-31	土師器皿	(12.8)	(2.4)		良好	良好	淡褐色	
2-32	土師器釜	(29.0)			1mm大の白色砂粒を多く含む	良好	白褐色	
2-33	瓦質土器鉢	(32.6)	16.2	(26.4)	1mm大の白色砂粒を多く含む	やや粗	灰白色	

表3 SK12・SK18・SK17

図版 番号	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
3-1	土師器釜	(25.4)			0.5mm大の黒色砂粒を多く含む	良好	淡白褐色	
3-2	土師器釜	(35.6) (羽径)			0.5mm大の黒色砂粒を多く含む	良好	淡白褐色	
3-3	瓦質土器鉢	(32.4)			0.5mm大の白色砂粒を含む	良好	黒灰色	
3-4	瓦質土器鉢			(12.4)	0.5mm大の白色砂粒を含む	良好	黒灰色	
3-5	白磁碗			6.2	良好	良好	白褐色・淡白褐色(軸)	
3-6	土師器釜	(21.5)						
3-7	土師器釜	(26.0)			1mm大の白色砂粒を含む	良好	淡灰赤褐色	
3-8	土師器皿	(16.4)			雲母を多く含む	良好	淡茶褐色	
3-9	土師器皿	(6.8)						
3-10	美濃大碗	(15.0)						内外面灰白褐色軸
3-11	中青国製碗	(15.4)						
3-12	土師器釜	21.6			良好	良好	淡黄褐色	
3-13	土師器釜	(22.2)			良好	良好	暗黒褐色	
3-14	土師器釜	(21.2)			1mm大の白色砂粒をわずかに含む	良好	淡茶褐色	外面にすず付着
3-15	土師器釜	21.6			1mm以下の白色砂粒と雲母を少量含む	良好	淡赤褐色	
3-16	土師器皿	(7.6)	(1.6)		良好	良好	淡黄褐色	
3-17	土師器皿	(8.7)						
3-18	土師器皿	(8.3)						
3-19	土師器皿	10.9	2.0		良好	やや粗	淡白褐色	
3-20	土師器皿	(11.6)						
3-21	土師器皿	(12.5)						
3-22	信濃素鉢	27.6	12.4	13.2	5mm以下の白色砂粒を多く含む	良好	赤褐色	

図版 番号	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口徑	器高	底徑				
3-23	信摺 蓋鉢			14.2	1mm大の白色砂粒を多く含む	良好	濃赤褐色	
3-24	信水 蓋差			(22.4)	2mm大の白色砂粒を含む	良好	明淡赤褐色	
3-25	唐 津 碗			3.6	良好	良好	黄褐色	
3-26	唐 津 碗	(10.8)	7.1	(4.4)	良好	良好	灰白色	
3-27	美 天 目 茶 濃碗	(10.3)						
3-28	美 濃 皿			(7.0)				
3-29	美濃折縁皿	(9.3)						

表 4-a SK23・SE20

図版 番号	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口徑	器高	底徑				
4-1	土 師 器 土 釜	(20.2)			良好	良好	白褐色	
4-2	土 師 器 皿	(10.2)	(2.0)		雲母を含む	良好	淡白褐色	
4-3	土 師 器 皿	(8.8)	(1.5)		0.5mm大の白色砂粒を含む	良好	淡黄褐色	
4-4	土 師 器 皿	(8.8)	1.9		1mm大の白色砂粒を含む	良好	淡灰褐色	
4-5	瓦 質 土 器 鉢	(32.4)		(6.0)	良好	良好	淡白灰褐色	
4-6	瓦 質 土 器 鉢			(14.6)	1mm以下の白色砂粒を多く含む	良好	黒灰色	
4-7	瓦 質 土 器 鉢			(12.0)	0.5mm大の白色砂粒と雲母を含む	良好	黒灰色	
4-8	瓦 質 の 土 器 蓋	(43.4)	3.7		0.5mm大の白色砂粒を含む	良好	黒灰色	
4-9	瓦 質 土 器 火 鉢	(47.4)			良好	良好	灰黒色	
4-10	瓦 鉢 の 土 器 蓋	(36.6)	3.9		0.5mm大の白色砂粒を多く含む	良好	黒灰色	
4-11	天 日 茶 碗	(10.2)			良好	良好	濃茶褐色	
4-33	土 師 器 皿	11.8	2.5		良好	良好	淡黄灰色	すず付着部分あり
4-34	土 師 器 皿	(12.0)			0.5mm大の黒色砂粒を少量含む	良好	淡褐色	
4-35	土 師 器 皿	(12.8)			良好	やや 不良	淡黄灰色	
4-36	土 師 器 皿	(11.6)			良好	良好	黄褐色	
4-37	土 師 器 皿	(11.0)			良好	やや 不良	淡黄灰色	
4-38	土 師 器 皿	(11.0)			良好	良好	淡黄褐色	
4-39	土 師 器 皿	(10.2)			雲母を少量含む	やや 不良	淡黄濃灰色	すず付着部分あり

図版 番号	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
4-40	土師器皿	(9.8)			良好	良好	淡褐色	
4-41	土師器	(8.4)	1.7		良好	良好	淡黄褐色	
4-42	土師器皿	(6.6)	1.5		良好	良好	淡黄褐色	
4-43	土師器皿	(7.0)	1.2		良好	良好	淡褐色	
4-44	土師器皿	7.0	1.3		雲母と0.5mm大の黒色砂粒を少量含む	良好	明灰白褐色	

表 4-b SE20

図版 番号	器種	法 量 (cm)			器形の特徴	絵付の方法	窯詰技法	備 考
		口径	器高	底径				
4-12	伊万里磁器碗	(10.5)	5.5	4.4				「大明年製」崩れ銘
4-13	伊万里磁器碗	10.8	5.4	4.4				
4-14	伊万里磁器碗			3.8				「大明年製」崩れ銘
4-15	伊万里磁器碗			(4.7)				「大明年製」銘?
4-16	伊万里磁器碗	(10.0)						
4-17	伊万里磁器碗			(3.2)				「大明」銘
4-18	伊万里磁器碗	(10.9)						
4-19	伊万里磁器 仏飯器			(2.2)				
4-20	中国製 染付磁器皿			(8.4)				
4-21	伊万里磁器皿	(13.2)				墨弾き		
4-22	唐津刷毛目碗			3.9				
4-23	唐津系 緑釉碗			4.2				
4-24	唐津系 青緑釉碗	(12.0)						
4-25	京焼風陶器鉢			(7.8)				
4-26	陶器碗			3.0				
4-27	陶器碗			(5.1)				
4-28	美濃小瓶			1.4				
4-29	美濃菊皿			(8.8)				
4-30	陶器土瓶	(14.0)						絵付けあり、京焼か?
4-31	陶器壺	(29.6)						
4-32	赤膚焼皿			4.0				底部縁辺に「赤ハタ」の刻印

表5 SE21 (1)

図版 番号	器種	法 量 (cm)			器形の特徴	絵付の方法	窯詰技法	備 考
		口径	器高	底径				
5-1	伊万里磁器碗	(11.2)	6.0	4.4			見込蛇の目軸 ハギ	
5-2	伊万里磁器碗			4.3			見込蛇の目軸 ハギ	
5-3	伊万里磁器碗	(11.2)						
5-4	伊万里磁器碗	(11.6)						
5-5	伊万里磁器碗	(10.0)	5.7	5.2		型紙摺		
5-6	伊万里磁器碗	10.8	5.9	(4.8)				
5-7	伊万里磁器碗	(9.8)						
5-8	伊万里磁器碗	(10.2)						
5-9	伊万里磁器碗	(10.2)						
5-10	伊万里磁器碗	(9.5)	5.2	4.2				高福
5-11	伊万里磁器碗	(8.9)	5.2	3.3				「大明年製」崩れ蛇
5-12	伊万里磁器碗	8.3	5.3	3.0				高福
5-13	伊万里磁器碗	(8.9)	4.6	(4.6)		コンニャク判		
5-14	伊万里磁器碗			4.2				高福
5-15	伊万里磁器碗			3.9				
5-16	伊万里磁器碗			4.0				
5-17	伊万里磁器碗			(5.6)				
5-18	伊万里磁器 そば猪口			(6.0)				角福
5-19	伊万里磁器 蓋	10.8	8.8	6.4		コンニャク判		
5-20	伊万里白磁 重	(8.8)	7.3	(6.2)				
5-21	伊万里青磁 花			5.4				灰緑色軸
5-22	伊万里磁器皿	13.0	3.1	7.2		見込五弁花 コンニャク判		「大明年製」崩れ蛇
5-23	伊万里青磁 染付三足大皿	(30.2)			蛇ノ目高台			
5-24	伊万里 白磁小杯	(5.8)	4.0	2.9				
5-25	伊万里 磁器小杯	(6.6)	2.3	(3.1)				
5-26	陶器碗	12.7	5.3	4.8				高台内「清水」刻印
5-27	陶器碗	9.6	5.6	3.0				淡黄色軸

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			器形の特徴	給付の方法	窯結技法	備 考
		口径	器高	底径				
5-28	陶器碗	(11.0)	4.7	3.8				淡黄白色釉
5-29	陶器碗		(4.9)	(6.2)	波状口縁			淡黄灰色釉
5-30	陶器碗			(3.8)				緑、金泥で給付
5-31	陶器碗			(4.5)				内底面給付
5-32	陶器碗	(9.8)	5.5	4.3				淡黄白色釉
5-33	陶器碗	(10.0)						淡黄白色釉
5-34	陶器碗			3.8				
5-35	陶器碗			(4.4)				
5-36	陶器碗			2.6				
5-37	陶器蓋	9.8	2.3					暗赤褐色
5-38	陶器蓋	(12.7)						
5-39	陶器碗	(12.7)	7.2	(6.7)				内底面に目あと 瀬戸? 淡緑色釉
5-40	唐津系徳利			6.0				黒褐色釉
5-41	唐津系 刷毛目碗							
5-42	唐津系 刷毛目皿							内底面に目あと
5-42	陶器筒碗							淡灰黄褐色釉

表 6 SE21 (2)

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
6-1	信楽播鉢	38.4			3mm以下の白色小石を含む	良好	暗褐色	鉄輪塗布
6-2	信楽播鉢	(18.0)			1mm大の黒色砂粒を含む	良好	赤茶褐色	鉄輪塗布
6-3	信楽播鉢			(14.4)	3mm大の白色砂粒、1.2mm大以下の黒色砂粒を含む	良好	赤茶褐色	全面鉄輪塗布
6-4	信楽壺	36.0			0.5mm以下の黒色砂粒を含む	良好	赤茶色	
6-5	陶器鍋	(19.8)	(8.8)	(8.3)	1mm大の白色砂粒を含む	良好	濃茶褐色	
6-6	土師器 消し壺	(23.2)	20.0	19.8	5mm大の白色砂粒を含む。雲母を多く含む。	良好	赤褐色	
6-7	土師器七輪	(26.2)			0.5mm以下の白・黒色砂粒と雲母を含む	良好	灰茶褐色	
6-8	瓦質土器壺	46.0			3mm以上の黒色小石を含む	良好	暗灰色	
6-9	土師器焙烙	(31.0)			5mm以上の小石と雲母を含む。	良好	赤褐色	すず付着部あり

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
6-10	土師器焙烙	(24.6)			0.5mm以下の白・赤色砂粒、 雲母を含む	良好	暗茶褐色	
6-11	土師器焙烙	(17.0)			3mm大の白色砂粒と0.2mm以下 の黒色砂粒・雲母を含む	良好	赤褐色	
6-12	土師器皿	10.0	1.9		0.5mm以下の白・黒色砂粒と 雲母を含む	良好	明淡黄褐色	
6-13	土師器皿	10.0	1.6		石英・雲母を含む	良好	淡灰褐色	
6-14	土師器皿	10.2	2.2		白色砂粒・雲母を少量含む	良好	灰褐色	
6-15	土師器皿	(10.2)	1.9		0.5mm以下の黒色砂粒を多量 に含む	良好	淡褐色	
6-16	土師器皿	10.1	2.1		1mm以下の黒・白色砂粒と雲 母を含む	良好	暗灰褐色	
6-17	土師器皿	11.9	2.4		雲母を含む	良好	淡灰褐色	内部一面スミ
6-18	土師器皿	7.4	1.6		1mm以下の白・黒・赤色砂粒 と雲母を多く含む	良好	灰茶褐色	
6-19	土師器皿	7.5	1.8		1mm以下の白・黒色砂粒と雲 母を含む	良好	淡灰褐色	
6-20	土師器皿	(7.8)	1.3		6mm大の灰色砂粒を1個と、 雲母を含む	良好	淡明灰褐色	
6-21	土師器皿	7.3	1.5		0.5mm以下の黒色砂粒を少量 含む	良好	淡黄褐色	
6-22	土師器皿	7.0	1.6		1mm以下の黒色砂粒を多く含む	良好	淡白褐色	
6-23	土師器皿	6.9	1.4		2mm大の白色砂粒を多く含む	やや粗	淡黄褐色	
6-24	土師器皿	7.2	1.3		0.5mm以下の赤・黒・白色砂 粒を多く含む	良好	淡灰褐色	
6-25	土師器皿	7.1	1.4		0.2mm以下の黒色砂粒と雲 母を含む	良好	淡赤褐色	
6-26	土師器皿	6.8	1.5		良好	良好	淡灰褐色	

表 7-a SE22

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			器形の特徴	絵付の方法	窯詰技法	備 考
		口径	器高	底径				
7-1	伊万里磁器碗	10.8				コンニャク判		
7-2	伊万里磁器碗	(11.2)	5.6	(4.8)	端反り碗			
7-3	伊万里磁器碗	(11.8)						
7-4	伊万里磁器碗			3.8				
7-5	伊万里磁器碗							
7-6	伊万里磁器蓋	9.6		3.8				
7-7	伊万里磁器碗			4.4				
7-8	伊万里磁器皿			8.0		見込手描五弁花		渦福

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			器形の特徴	絵付の方法	窯詰技法	備 考
		口径	器高	底径				
7-9	伊万里磁器皿	(13.3)	3.1	8.1				
7-10	伊万里磁器皿	(一辺) 7.6	2.2	(一辺) 3.2				
7-11	伊万里磁器碗							
7-12	伊万里磁器 小 杯	6.6	2.6	2.2				
7-13	伊万里磁器鉢			6.5				焼継ぎ
7-14	磁 器 皿							焼継ぎ、「玩玉」銘 中国製か

表 7-b SE22

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
7-15	陶器灯火器	(10.4)	2.3	4.1				
7-16	陶器灯明皿	10.5	2.3					淡緑灰色(軸)
7-17	陶器灯火器							
7-18	陶 器 蓋							
7-19	陶 器 蓋	3.6	3.8	(12.4)				
7-20	陶 器 蓋	7.9		2.7				
7-21	陶器徳利			4.6				側面底部以外は黒で着色
7-22	陶器湯呑	(7.2)	7.1					白灰色(軸)
7-23	陶 器 壺	(20.6)						
7-24	陶 器 鉢	(13.2)	(9.8)	(7.4)				
7-25	陶 器 碗	(30.8)	5.8	(12.3)				淡黄灰色(軸)
7-26	信楽花活け	(15.0)		(16.0)				明黄褐色(外面軸)・濃 茶褐色(内面軸)
7-27	信楽播鉢			8.4				
7-28	備前播鉢	(38.0)						

表 8 SK25 (1)

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			器形の特徴	絵付の方法	窯詰技法	備 考
		口径	器高	底径				
8-1	磁 器 碗	(10.8)	5.4	(4.4)				
8-2	磁 器 碗	(10.3)	4.5	(3.6)		コンニャク判		

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			器形の特徴	絵付の方法	窯詰技法	備 考
		口径	器高	底径				
8-3	磁器碗	(10.4)	6.4	(4.2)		コンニャク判		大明年製崩れ銘
8-4	磁器碗	11.2	5.5	4.9				
8-5	磁器碗	10.6	5.0	3.9				
8-6	磁器碗	(10.4)	5.9	(3.4)				
8-7	磁器碗	(9.6)			端反り碗			
8-8	磁器碗	(12.2)			端反り碗			
8-9	磁器碗	(9.2)	6.2	(4.9)				
8-10	色絵磁器碗	(10.2)						
8-11	色絵磁器碗			3.1				
8-12	色絵磁器碗	(12.6)						
8-13	色絵磁器碗	(12.4)						
8-14	色絵磁器碗			(4.1)				
8-15	色絵磁器碗			(4.1)				大明年製崩れ銘
8-16	色絵磁器碗			(3.3)				
8-17	色絵磁器碗			(4.0)				
8-18	色絵磁器碗			(3.6)				
8-19	白磁碗	(8.8)	5.3	(3.6)				
8-20	染付磁器碗	(11.2)						キハラ系
8-21	染付磁器碗	(11.6)	5.0	(4.2)				
8-22	染付磁器碗	(12.8)						
8-23	白磁碗	(11.2)						口錆あり
8-24	染付磁器碗	11.8	7.4	4.8		見込五弁花コン ニャク判		
8-25	染付磁器碗			(4.8)		見込五弁花コン ニャク判		瀬福銘
8-26	染付磁器碗	8.4	6.5	4.5	筒碗			
8-27	青磁香炉			(7.3)				
8-28	白磁碗	(7.6)	4.7	3.9				
8-29	染付磁器碗	(8.4)	5.3	(5.3)				
8-30	染付磁器碗	7.8	3.8	3.0		型紙摺		

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			器形の特徴	絵付の方法	窯詰技法	備 考
		口径	器高	底径				
8-31	染付磁器碗	8.4	4.1	3.7		型紙摺		
8-32	染付磁器碗	(5.6)	2.9	(2.4)				
8-33	白磁小碗	6.7	2.8	3.2				
8-34	白磁小碗	5.8	2.3	2.8				
8-35	染付磁器 そば猪口			(4.8)				
8-36	染付磁器皿	9.0	1.3	5.0				
8-37	染付磁器皿			6.8		見込五弁花コン ニャク判	大明年製崩れ銘	
8-38	染付磁器皿	13.2	4.5	7.5	波状口縁	墨弾き	大明成化年製銘	
8-39	青磁皿			7.0	四角皿(高台円形)			
8-40	染付磁器皿							
8-41	染付磁器蓋物	(13.2)						
8-42	色絵蓋物	(6.8)						
8-43	色絵徳利			6.0			内外面ともに黒変	
8-44	中国製 赤絵磁器鉢			(10.7)			熱を受ける	
8-45	朝鮮王朝 陶器碗	16.2	6.6	7.0			内底面10箇所 の目あと	

表9 SK25 (2)

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			器形の特徴	絵付の方法	窯詰技法	備 考
		口径	器高	底径				
9-1	陶器碗	12.6	6.2	4.6			淡緑灰褐色釉 貫入目立つ	
9-2	陶器深皿			(4.6)			京焼風陶器「清水」刻印 淡黄色釉	
9-3	陶器徳利	4.0					淡黄色と銅緑色の釉内野 山系	
9-4	陶器皿			(7.2)			胎土灰褐色淡黄色釉	
9-5	陶器碗	(11.0)					淡黄白色釉緑色、赤褐色 で絵付	
9-6	陶器碗						色釉、絵付	
9-7	陶器碗						色釉	
9-8	陶器碗	(10.2)					灰白色釉	
9-9	陶器碗			4.6			淡褐色釉	
9-10	陶器碗	(9.6)					淡灰黄色釉で絵付	

図版 番号	器種	法 量 (cm)			器形の特徴	絵付の方法	窯詰技法	備 考
		口径	器高	底径				
9-11	陶器碗	11.2	6.4	4.4			内底面3ヶ所の目あと	淡黄褐色釉、絵付あり
9-12	陶器碗			3.4				絵付に金泥を使用
9-13	陶器皿	(9.0)						淡黄緑色釉
9-14	陶器蓋物	(11.6)	8.3	(7.2)				淡灰緑色釉、絵付あり
9-15	陶器蓋物	(10.9)	10.5	7.3				淡黄褐色釉、絵付あり
9-16	陶器蓋物	(14.2)	9.6	(9.1)				淡緑灰色釉、黒・青で絵付
9-17	陶器皿							内底面絵付
9-18	陶器皿							黄色釉全釉
9-19	陶器托							淡褐・緑の釉
9-20	黒釉陶器壺 (中国製)	(7.2)						濃茶褐色釉(内面)、 鞆州窯産
9-21	陶器壺			(8.4)				黄褐色、断面淡灰色
9-22	陶器花生			(6.8)				淡褐色
9-23	陶器搗鉢			(14.2)				暗茶褐色
9-24	陶器壺			(20.6)				黒褐色釉
9-25	陶器搗鉢			(22.0)				赤褐色、信楽か
9-26	陶器壺			(12.4)				暗褐色
9-27	陶器土瓶			(7.8)				茶褐色釉
9-28	陶器土瓶			(9.1)				淡暗緑色釉
9-29	陶器蓋	(11.0)	2.2					暗茶褐色釉
9-30	陶器蓋	(9.0)	(1.6)					茶褐色釉
9-31	陶器蓋	8.4	2.6					暗緑色釉
9-32	陶器行平鍋	16.0						暗茶褐色釉
9-33	陶器行平鍋	12.0						暗茶褐色釉
9-34	陶器壺	(37.4)						暗褐色、黒色釉

表10 SK25 (3)

図版 番号	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
10-1	瓦質土器鉢	(31.4)			0.1mm以下の白色砂粒、黒色砂粒を多く含む	良好	淡黒褐色	

図版 番号	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
10-2	瓦質土器小鉢	27.1× 27.8	12.1		5mm大の白色砂粒、0.5mm以下の雲母、黒・白色砂粒を多く含む	良好	内面赤褐色、 外面淡灰褐色	焼成土師器
10-3	土師器壺壺	7.2	7.6	5.5	1mm以下の赤色砂粒、0.5mm以下の白色砂粒雲母を含む	良好	淡赤褐色	泉湧伊織の刻印、内面に 付着物
10-4	土 師 器 ほ う ら く	(15.4)			1mm前後の砂粒を含む	良好		火熱を受けているか？ 全体に黒変
10-5	土 師 器 ほ う ら く	(29.1)				良好	暗赤褐色	外面両部より下にスス付 着
10-6	土 師 器 ほ う ら く	(29.1)				良好	暗赤褐色	外面全面スス付着
10-7	土 師 器 ほ う ら く	(31.8)				良好	暗赤褐色	外面全面スス付着、内面 黒褐色化
10-8	土 師 器 皿	(11.6)			雲母、0.1mm以下の白色砂粒 を含む	良好	淡灰色	
10-9	土 師 器 皿	11.7	2.3		0.5mm大の白色砂粒を含む	良好	淡褐色	やや 散らかい
10-10	土 師 器 皿	(11.2)			1mm大の白色砂粒を含む	良好	淡褐色	
10-11	土 師 器 皿	(9.2)	2.0		0.3mm大の白色砂粒、雲母を 含む	良好	淡黄褐色	
10-12	土 師 器 皿	9.9	1.9		雲母、0.1mm以下の白色砂粒 を含む、0.1mm以下の白色砂 粒を少量含む	良好	淡黄褐色	
10-13	土 師 器 皿	10.0	2.8		3mm大の砂粒を少し含む	良好	淡黄褐色	
10-14	土 師 器 皿	9.8	1.8		雲母、0.5mm以下の黒色・白 色砂粒を少量含む	良好	淡灰色	
10-15	土 師 器 皿	10.0	1.8		雲母を少量含む	良好	淡黄灰色	
10-16	土 師 器 皿	10.0	1.8		雲母、0.1mm以下の白色砂粒 を含む	良好	淡灰色	
10-17	土 師 器 皿	(10.0)			0.1mm以下の白色砂粒を多く 含む、1mm大の白色砂粒を含む	良好	淡灰色	
10-18	土 師 器 皿	(10.4)	(1.8)		雲母を含む	良好	暗灰色	
10-19	土 師 器 皿	9.8	2.3		雲母、0.1mm以下の黒色砂粒 を含む	良好	淡褐色	
10-20	土 師 器 皿	(8.6)	(1.8)		雲母を少量含む	良好	淡褐色	
10-21	土 師 器 皿	(9.2)				良好	淡黄褐色	
10-22	土 師 器 皿	(9.4)			0.5mm大の黒色砂粒、雲母を 含む	良好	淡褐色	
10-23	土 師 器 皿	(7.8)	(1.4)		0.5mm以下の白・赤色砂粒と 雲母を含む	良好	淡赤褐色	
10-24	土 師 器 皿	7.6	1.4		雲母を含む	良好	淡灰褐色	
10-25	土 師 器 皿	7.6	1.5		雲母を少量含む	良好	淡赤褐色	
10-26	土 師 器 皿	7.6	1.2			良好	淡白褐色	
10-27	土 師 器 皿	(7.2)	(1.3)		雲母を含む	良好		
10-28	土 師 器 皿	(7.6)	(1.4)		雲母を含む	良好	淡黄褐色	やや散 らかい

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
10-29	土 師 器 皿	(7.1)	(1.5)		雲母を含む	良好	淡灰褐色	
10-30	土 師 器 皿	(7.2)	(1.4)		1mm以下の白色砂粒を含む	良好		
10-31	土 師 器 皿	7.0	1.5		雲母、0.1mm大の白色砂粒を含む	良好	淡白褐色	
10-32	土 師 器 皿	6.8	1.4		雲母を含む	良好	淡褐色	
10-33	土 師 器 皿	(7.6)	(1.7)		雲母を少量含む	良好	淡黄褐色	
10-34	土 師 器 皿	7.5	1.2		雲母、0.1mm以下の白色砂粒を含む	良好	淡灰褐色	
10-35	土 師 器 皿	(7.2)	(1.5)		雲母少量、1mm以下の黒色砂粒を少量含む	良好	淡黄褐色	
10-36	土 師 器 皿	(7.6)	(1.2)		0.5mm以下の白色砂粒と雲母を含む	良好	淡赤褐色	
10-37	土 師 器 皿	7.3	1.5		雲母を含む	良好	淡褐色	
10-38	土 師 器 皿	6.9	1.5		0.5mm大の黒色砂粒、雲母を含む	良好	淡灰褐色	
10-39	土 師 器 皿	6.8	1.2		雲母あり	良好	淡褐色	
10-40	土 師 器 皿	6.6	1.6		0.5mm以下の白色砂粒と雲母を含む	良好	淡褐色	
10-41	土 師 器 皿	7.0	1.55		0.5~1mm以下の黒色砂粒を含む	良好	淡白褐色	
10-42	土 師 器 皿	(6.8)	(1.2)		0.1mm以下の黒色砂粒を含む 2mm大の白色砂粒あり	良好	淡褐色	
10-43	土 師 器 皿	6.6	1.4			良好	淡褐色	
10-44	土 師 器 皿	6.8	1.7		雲母、1.5mm大の白色砂粒を含む	良好	淡褐色	
10-45	土 師 器 皿	7.0	1.4		2mm大の黒色砂粒を含む	良好	淡褐色	
10-46	土 師 器 皿	6.8	1.7			良好	淡灰褐色	
10-47	土 師 器 皿	6.6	1.6			良好	淡黄褐色	
10-48	土 師 器 皿	6.8	1.25		雲母を含む	良好	淡褐色	
10-49	土 師 器 皿	(6.0)	(1.4)		雲母を少量含む	良好	淡褐色	
10-50	土 師 器 皿	6.6	1.6		雲母を含む	良好	淡赤褐色	
10-51	土 師 器 皿	6.8	1.8		雲母を含む	良好	淡黄褐色	
10-52	土 師 器 皿	6.6	1.5		雲母を含む	良好	淡褐色	

表11 SK01 (1)

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			器形の特徴	絵付の方法	窯詰技法	備 考
		口径	器高	底径				
11-1	染付磁器碗	(8.6)			端反り碗			

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			器形の特徴	絵付の方法	窯詰技法	備 考
		口径	器高	底径				
11-2	染付磁器碗	(10.9)			端反り碗			
11-3	染付磁器碗	(10.2)			端反り碗			
11-4	染付磁器碗	(8.6)	(4.7)	(3.2)	端反り碗			
11-5	色絵磁器碗	(8.6)	3.6	3.2	端反り碗	燈赤、淡緑青色		
11-6	染付磁器碗			4.6				
11-7	染付磁器碗			(4.2)				
11-8	染付磁器碗	9.8	4.3	3.8		型紙摺		
11-9	染付磁器碗	11.0	4.4	3.8		型紙摺		
11-10	染付磁器碗	(12.8)	4.8			型紙摺		
11-11	染付磁器碗			(4.0)		型紙摺		
11-12	染付磁器碗	(12.0)				銅版摺		
11-13	染付磁器碗	(10.5)				銅版摺		
11-14	青 磁 碗	(12.0)						淡緑白色釉
11-15	磁 器 碗	(11.4)						白地に黄褐色釉
11-16	染付磁器蓋	(10.5)	2.7	[3.8]		型紙摺		
11-17	染付磁器蓋	10.0	2.6	[4.2]		型紙摺		
11-18	染付磁器蓋	10.5	3.1	[3.4]				
11-19	染付磁器蓋	8.8	2.3			銅版摺		
11-20	染付磁器蓋	9.0		[7.4]				淡青白色釉
11-21	染付磁器碗			(5.4)				
11-22	色絵磁器蓋物	(7.6)				銅版摺		
11-23	染付磁器蓋物	(10.5)	8.2	7.3				
11-24	染付磁器小杯	(6.7)	4.3	3.3		銅版摺		
11-25	染 付 磁 器 仏 版 器			4.5				
11-26	染付磁器小碗	6.4	2.6	2.3				高台内記号
11-27	色絵磁器小碗	(8.0)	(2.9)	(2.8)				赤絵付
11-28	磁 器 小 碗	(7.2)	2.9	2.5				濃灰茶褐色釉で絵付
11-29	染 付 磁 器			(5.8)				

図版 番号	器種	法 量 (cm)			器形の特徴	絵付の方法	窯詰技法	備 考
		口径	器高	底径				
11-30	染付磁器皿	13.6	6.6	3.8	高台内蛇ノ目輪ハギ			
11-31	青磁皿		1.8	(5.0)				変形皿、三田青磁?
11-32	染付磁器皿	8.8	2.7	3.4				「成化年製」崩れ銘、 角福字銘
11-33	染付磁器皿	9.8	2.3	5.8				
11-34	陶器小瓶	4.8	4.5	4.0				青色釉、「をしろいこ」 「大阪埋蔵」
11-35	陶器小瓶	3.8	4.6	4.0				青色釉、「登録商標」
11-36	陶器小瓶	3.8	3.6	3.0				外面淡青色釉、 「四季の友柏園製」
11-37	陶器小瓶	3.8	4.0	2.5				外面青色釉、「四季の友 柏園製」「登録商標」
11-38	陶器壺							色調淡黄褐色、釉緑褐色
11-39	陶器壺	8.0	3.5	[6.0]				色調淡灰黄色、釉灰緑色
11-40	陶器土瓶	8.1	11.8	8.0				外面淡白褐色の地に色絵 彩色、褐紫

表12 SK01 (2)

図版 番号	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
12-1	陶器壺	11.0	2.8	[3.6]		良好		淡黄色の地に黒色釉
12-2	陶器壺	9.6	2.6	[2.4]	0.5mm大の白色砂粒を含む	良好		黄褐色釉
12-3	陶器鍋	(21.2)				良好		淡黄褐色釉、 底部外面黒変
12-4	陶器灯火器	(5.9)	3.5	4.1		良好	淡灰褐色	淡緑白色釉
12-5	陶器壺	9.2	3.0	7.4		良好	黄褐色	灰白色釉
12-6	陶器壺	10.8	2.6		0.2mm大の黒色砂粒を含む	良好	淡黄褐色	淡白緑色釉
12-7	陶器仏花瓶	16.2			1mm大の白色砂粒を含む	良好		濃茶褐色釉
12-8	陶器徳利			3.3		良好	淡白褐色	白緑色釉
12-9	陶器小碗	(6.6)	2.7	4.0	0.2mm大の黒色砂粒を多く含む	良好	淡白褐色	淡黄褐色釉
12-10	陶器小碗	6.7	2.7		0.1mm以下の黒色砂粒を含む	良好	淡黄褐色	
12-11	陶器壺	(6.4)				良好	暗茶色	
12-12	陶器鍋	14.4	8.9	4.8		良好	黒褐色	明白褐色釉
12-13	陶器鍋	(17.2)				良好	灰黒色	淡灰褐色釉
12-14	陶器鍋	(14.8)				良好	淡赤褐色	緑灰色釉
12-15	陶器壺	7.6	12.5	5.9		良好	黄褐色	暗茶褐色釉

図版 番号	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
12-16	陶器 壺	7.2	15.4	8.4	0.5mm以下の白色砂粒を含む	良好	灰茶褐色	暗茶褐色釉
12-17	陶器 徳利			10.8	1mm大の白色砂粒を含む	良好	暗茶褐色	
12-18	陶器 徳利	3.8	16.3	(6.0)		良好		濃赤褐色
12-19	陶器 鉢	25.4	12.0	(15.5)	0.5mm以下の黑色砂粒を含む	良好	淡黄白色	白色釉、褐色釉
12-20	陶器 鉢	(32.2)				良好	淡赤褐色	淡赤褐色釉
12-21	陶器 鉢	(61.0)				良好	淡黄褐色	淡灰緑色釉、藍色釉

表 13-a SK01 (3)・SK02

図版 番号	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
13-1	陶器 植木鉢	(17.8)	10.5	(8.0)		良好	褐色	
13-2	陶器 植木鉢			(15.6)	0.5mm大の黑色砂粒を多く含む	良好	淡白褐色	明白褐色釉
13-3	瓦質土器 植木鉢		8.3		1mm以下の白色砂粒を多く含む	良好	淡黒灰色	上辺11.0、下辺7.2の平面 四辺形、管形
13-4	陶器 植木鉢		4.2			良好	淡白黄色	淡黄白色釉、上辺9.2、下辺 7.2の平面四辺形、完形
13-5	土師器 かんて	(24.4)	4.9	(18.2)	雲母を少量含む	良好	淡灰褐色	
13-6	土師器 七輪	(23.6)			1mm大の白色砂粒と雲母を含む	良好	淡赤褐色	
13-11	陶器 猪口			2.5		良好	淡灰白色	
13-12	陶器 小碗	(6.8)	2.7	2.4		良好	茶褐色	
13-13	陶器 蓋	9.2	3.8	[7.2]		良好	灰白色	天井部に染付風の絵付
13-14	陶器 蓋	(18.4)				良好	濃灰褐色	濃緑褐色釉
13-15	陶器 蓋			[5.5]	0.5mm以下の白色砂粒を含む	良好	淡黄褐色	茶褐色釉
13-16	陶器 蓋	(8.3)				良好	淡黄白色	淡緑白色釉
13-17	陶器 蓋	(8.3)				良好	淡白褐色	天井部に絵付
13-18	陶器 蓋	(9.8)				良好	淡黄白色	灰白色釉
13-19	陶器 蓋	(10.8)		[9.0]		良好	淡黄褐色	
13-20	陶器 蓋			[4.4]		良好	淡黄褐色	茶褐色釉
13-21	陶器 蓋			[4.0]		良好	黄褐色	淡黄褐色釉
13-22	陶器 植木鉢			5.8	0.2mm大の白色塵を含む	良好	茶褐色	
13-23	陶器 鉢	(12.2)	4.9	(12.0)		良好	濃茶褐色	

図版 番号	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
13-24	陶器土瓶	8.4	10.7	7.2		良好	褐色	明灰白色釉
13-25	陶器土瓶	8.8	10.7	7.8		良好	灰褐色	明灰白色釉
13-26	陶器蓋	9.7	3.5	[7.4]	0.5mm大の白色砂粒を含む	良好	淡黄褐色	明黄白色釉
13-27	陶器皿		3.4	4.2	雲母を含む	良好	淡灰褐色	底部外面に「赤ハタ」の刻印
13-28	土師器急須	(12.0)			0.1mmの黒色砂粒を含む	良好	灰黄色	
13-29	土師器皿	11.1	1.4			良好	淡黄褐色	
13-30	土師器皿	11.6	1.4			良好	淡白褐色	
13-31	瓦製円盤	[6.0]	[1.5]					

表 13-b SK02

図版 番号	器種	法 量 (cm)			器形の特徴	絵付の方法	窯詰技法	備 考
		口径	器高	底径				
13-7	染付磁器碗	(12.4)	5.2	6.8	高台内蛇ノ目軸ハ平			焼継
13-8	染付磁器碗			4.0				
13-9	染付磁器碗			(3.8)				
13-10	染付磁器碗	11.3	4.2	3.7		型紙摺		

表14 SK204

図版 番号	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
16-1	土師器皿	10.6	2.5		雲母を多く含む	良好	暗赤褐色	
16-2	土師器皿	11.0	2.5		雲母を多く含む	良好	暗赤褐色	
16-3	土師器皿	10.6	2.5		1mm大の白色砂粒と雲母を含む	良好	赤褐色	
16-4	土師器皿	10.3	2.3		1.5mm大の白色砂粒を含む	良好	赤褐色	
16-5	土師器皿	10.9	2.5		雲母を多く含む	良好	赤褐色	
16-6	土師器皿	10.3	2.2		雲母を含む	良好	赤褐色	
16-7	土師器皿	10.6	2.1		雲母と1mm大の白色砂粒を含む	良好	赤褐色	
16-8	土師器皿	10.2	2.3		雲母を多く含む	良好	赤褐色	
16-9	土師器皿	10.9	2.4		1mm大の白色砂粒を多く含む	良好	赤褐色	
16-10	土師器皿	10.9	2.6		雲母を含む	良好	赤褐色	
16-11	土師器皿	10.6	2.3		雲母を含む	良好	赤褐色	

図版 番号	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
16-12	土師器皿	11.0	2.4		雲母を含む	良好	赤褐色	
16-13	土師器皿	11.1	2.3		1mm大の白色砂粒を多く含む	良好	淡白赤褐色	
16-14	土師器皿	10.5	2.3		雲母を多く含む	良好	淡赤褐色	
16-15	土師器皿	10.8	2.5		1mm大の白色砂粒を含む	良好	淡黄褐色	
16-16	土師器皿	11.0	2.5		雲母を含む	良好	淡茶褐色	
16-17	土師器皿	11.0	2.6		白色砂粒、雲母を多く含む	良好	赤褐色	
16-18	土師器皿	11.4	2.8		雲母を多く含む	良好	赤褐色	
16-19	土師器皿	11.0	2.5		雲母を多く含む	良好	赤褐色	
16-20	土師器皿	11.0	2.4		雲母を多く含む	良好	赤褐色	
16-21	土師器皿	10.4	2.3		雲母を含む	良好	赤褐色	
16-22	土師器皿	10.8	2.4		1mm大の白色砂粒、雲母を多く含む	良好	暗赤褐色	
16-23	土師器皿	10.9	2.4		1mm大の白色砂粒を含む	良好	赤褐色	
16-24	土師器皿	10.2	2.3		1mm大の白色砂粒を多く含む	良好	赤褐色	
16-25	土師器皿	10.7	2.3			良好	赤褐色	
16-26	土師器皿	10.8	2.0			良好	赤褐色	
16-27	土師器皿	10.9	2.1			良好	赤褐色	
16-28	土師器皿	11.2	2.6			良好	赤褐色	
16-29	土師器皿	10.9	2.2		1mm以下の白色砂粒を多く含む	良好	赤褐色	
16-30	土師器皿	(11.2)	(2.4)		雲母を多く含む	良好	赤褐色	
16-31	土師器皿	10.8	2.4		1mm大の白色砂粒を多く含む	良好	明赤褐色	
16-32	土師器皿	10.6	2.3		1mm大の白色砂粒を多く含む	良好	淡茶褐色	
16-33	土師器皿	11.2	2.6		雲母を含む	良好	赤褐色	
16-34	土師器皿	10.2	2.3			良好	淡赤褐色	
16-35	土師器皿	11.0	2.5		1mm以下の白色砂粒を含む	良好	淡赤褐色	
16-36	土師器皿	10.8	2.5		1mm大の白色砂粒を含む	良好	淡赤褐色	
16-37	土師器皿	(11.2)	(2.7)		雲母を含む	良好	赤褐色	
16-38	土師器皿	10.4	2.4		1mm以下の白色砂粒を含む	良好	赤褐色	
16-39	土師器皿	(11.4)	(2.3)		1mm大の白色砂粒を含む	良好	赤褐色	

図版 番号	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
16-40	土師器皿	11.3	3.0			良好	淡黄褐色	
16-41	土師器皿	8.7	1.5		雲母を含む	良好	赤褐色	
16-42	土師器皿	8.1	1.6		1mm大の白色砂粒含む	良好	淡赤褐色	
16-43	土師器皿	8.6	1.4		0.5mm大の白色砂粒を多く含む	良好	淡赤褐色	
16-44	土師器土釜 (24.2)					良好	淡白褐色	
16-45	須恵器鉢			(10.4)	0.5mm大の白色砂粒を多く含む	良好	暗灰色	

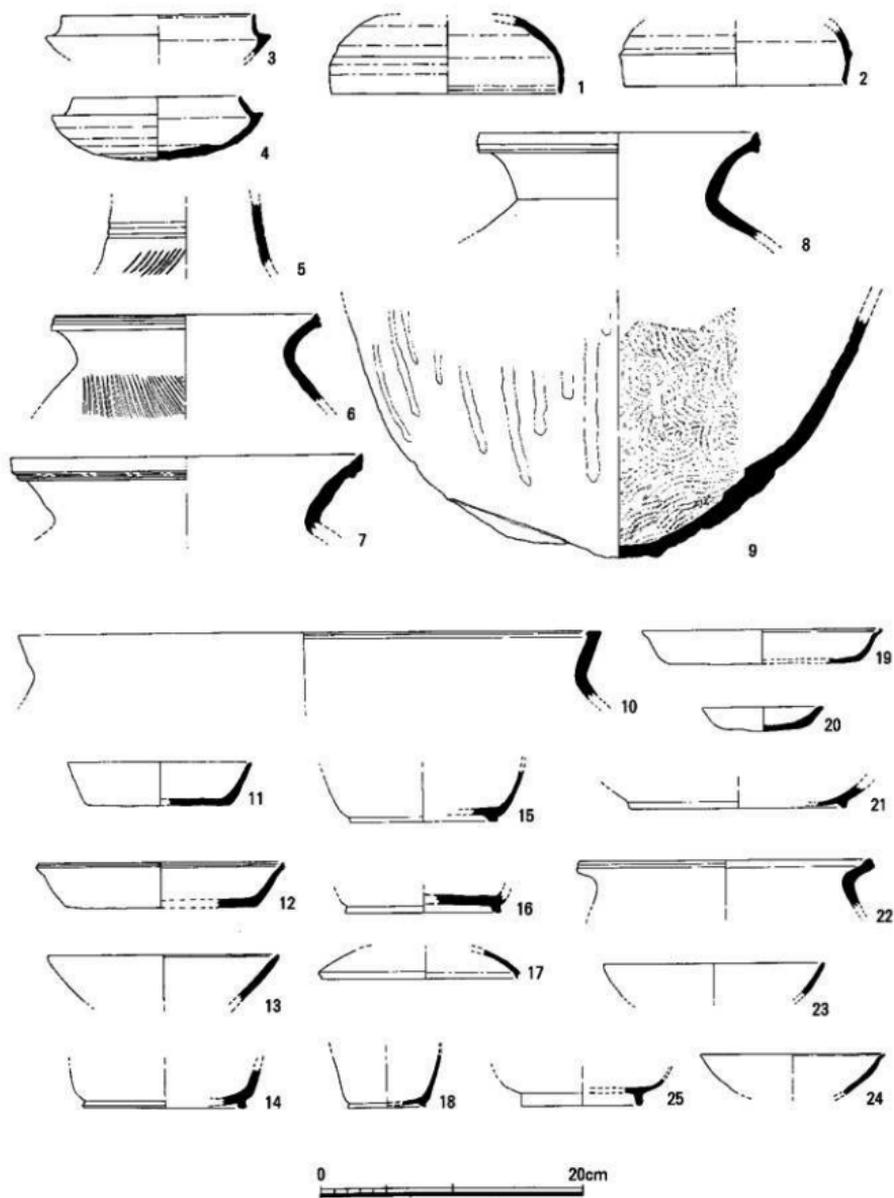
表 15-a SK101

図版 番号	器種	法 量 (cm)			器形の特徴	絵付の方法	高跗技法	備 考
		口径	器高	底径				
17-1	青磁染付碗	11.6	6.8	4.8		手描き五弁花	渦福字銘	
17-2	染付磁器碗	11.2	5.8	4.3		見込花枝文 コンニャク判		
17-3	染付磁器碗 (12.5)							
17-4	染付磁器碗 (10.9)		5.3	5.1			渦福字銘	
17-5	染付磁器碗 (11.7)							
17-6	染付磁器皿 (15.0)		(3.5)	(9.0)		見込五弁花 コンニャク判	渦福字銘	
17-7	染付磁器小碗	7.4	3.8	2.6				
17-8	染付磁器小碗 (6.5)		(3.9)	(2.1)		コンニャク判		
17-9	白磁小碗	7.5	3.7	2.8				
17-10	染付磁器 飯器			3.6				
17-11	染付磁器鉢			(5.5)		見込五弁花 コンニャク判	渦福字銘	
17-12	磁器蓋物	14.8	10.5	8.9				
17-13	陶器壺 (22.0)						内外面暗茶褐色釉	
17-14	陶器搦鉢 (35.0)						内外面鉄釉 (暗紫色)	
17-15	陶器小碗 (8.8)						淡褐色釉	
17-16	陶器小碗			(2.7)			淡褐色釉	

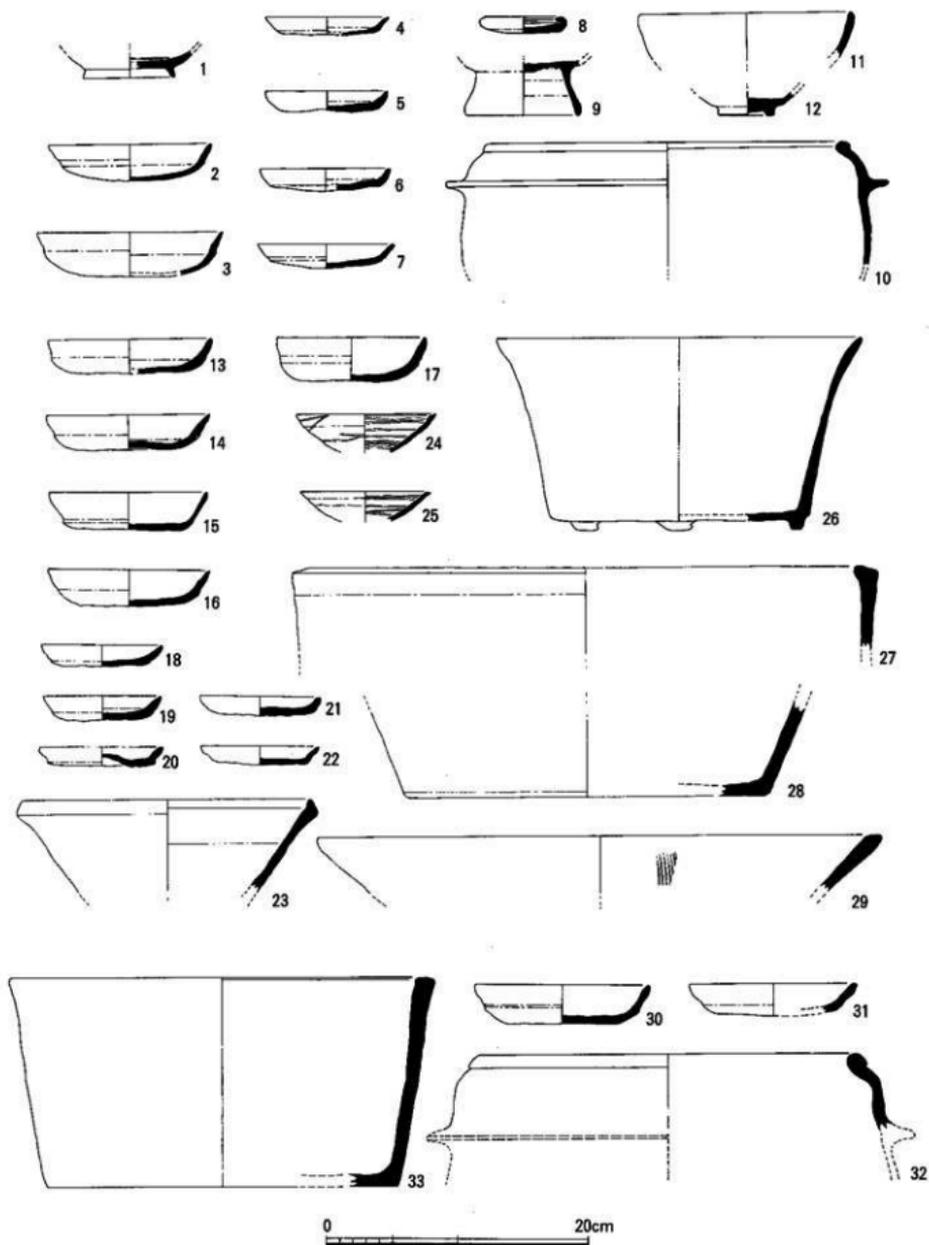
表 15-b SK101

図版 番号	器種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
17-17	土師器く	(29.0)	(9.0)					

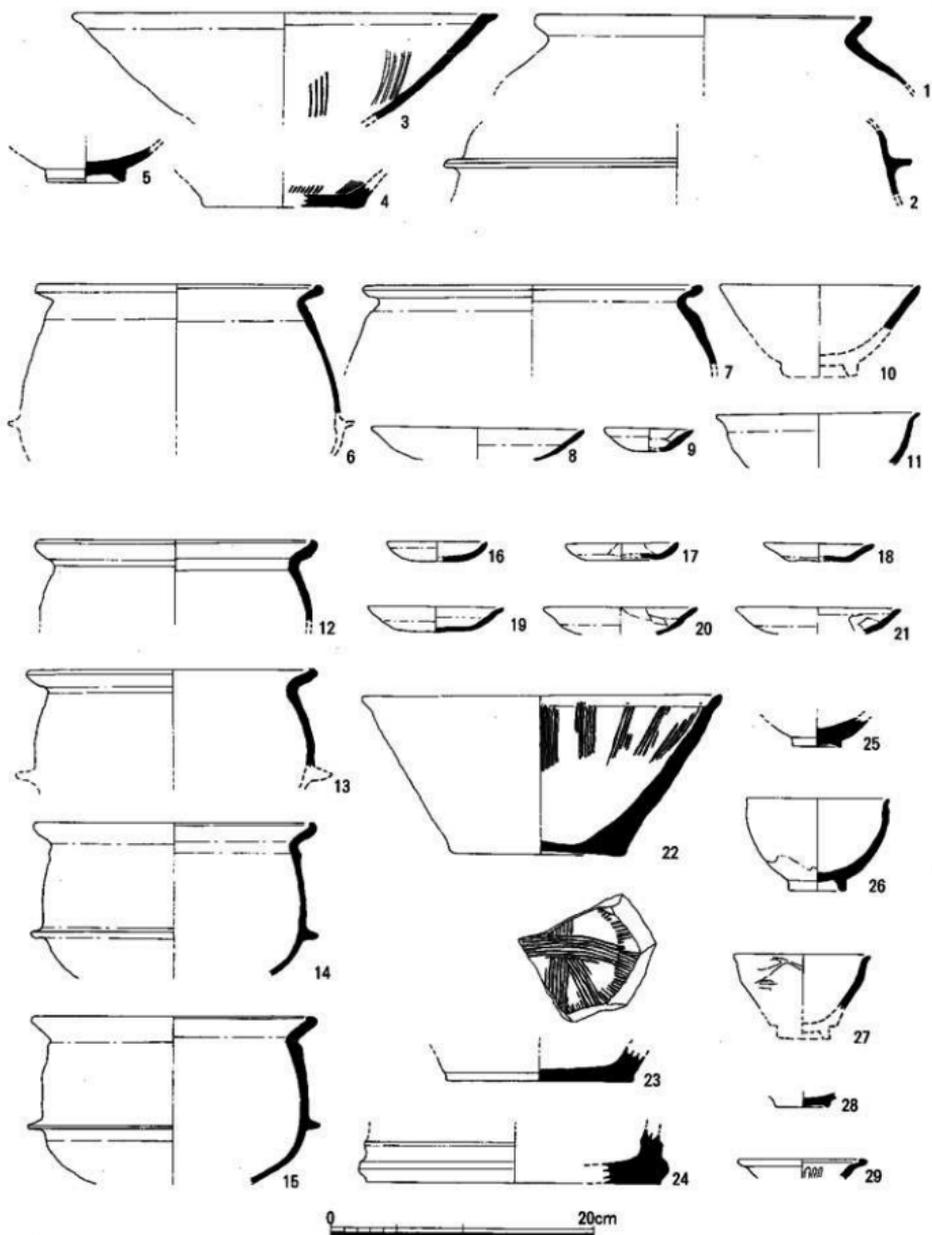
図版 番号	器 種	法 量 (cm)			胎 土	焼成	色 調	備 考
		口径	器高	底径				
17-18	土 師 器 皿	7.5				良好	明灰褐色	全体にスス付着
17-19	土 師 器 皿	(6.8)				良好	明褐色	
17-20	土 師 器 皿	(7.6)			1mm大の白色砂粒を含む	良好	茶褐色	
17-21	土 師 器 皿	6.8				良好	淡褐色	
17-22	土 師 器 皿	7.0				やや軟	茶褐色	
17-23	土 師 器 皿	7.5				良好	茶褐色	全体にスス付着
17-24	土 師 器 皿	6.6				良好	淡白褐色	
17-25	土 師 器 皿	7.2			1mm大の白色砂粒を含む		淡褐色	
17-26	土 師 器 皿	6.9			1mm大の黑色砂粒を含む		淡褐色	
17-27	土 師 器 皿	7.3			2mm大の灰色砂粒を含む	良好	淡褐色	
17-28	土 師 器 皿	6.7				良好	淡褐色	
17-29	土 師 器 皿	(7.4)				良好	淡白褐色	
17-30	土 師 器 皿	6.8				良好	明淡褐色	
17-31	土 師 器 皿	(7.5)			2mm大の白色砂粒を含む	良好	明茶褐色	
17-32	土 師 器 皿	(7.0)			1mm大の白色砂粒を含む	普通	茶褐色	
17-33	土 師 器 皿	(7.1)				良好	淡白褐色	
17-34	土 師 器 皿	9.1			2mm以下の砂粒を含む	良好	明淡褐色	
17-35	土 師 器 高 杯	8.8	6.2		5mm以下の灰色砂粒を含む	やや軟	明黄褐色	
17-36	土 師 器 皿	(6.8)				良好	明淡褐色	内面に墨書「=」(カ)
17-37	土 師 器 皿	6.5			1mm大の白色砂粒を含む	普通	茶褐色	外面に墨書「ハ」
17-38	土 師 器 皿	7.2				良好	明淡褐色	内面に墨書「一」 外面に墨書



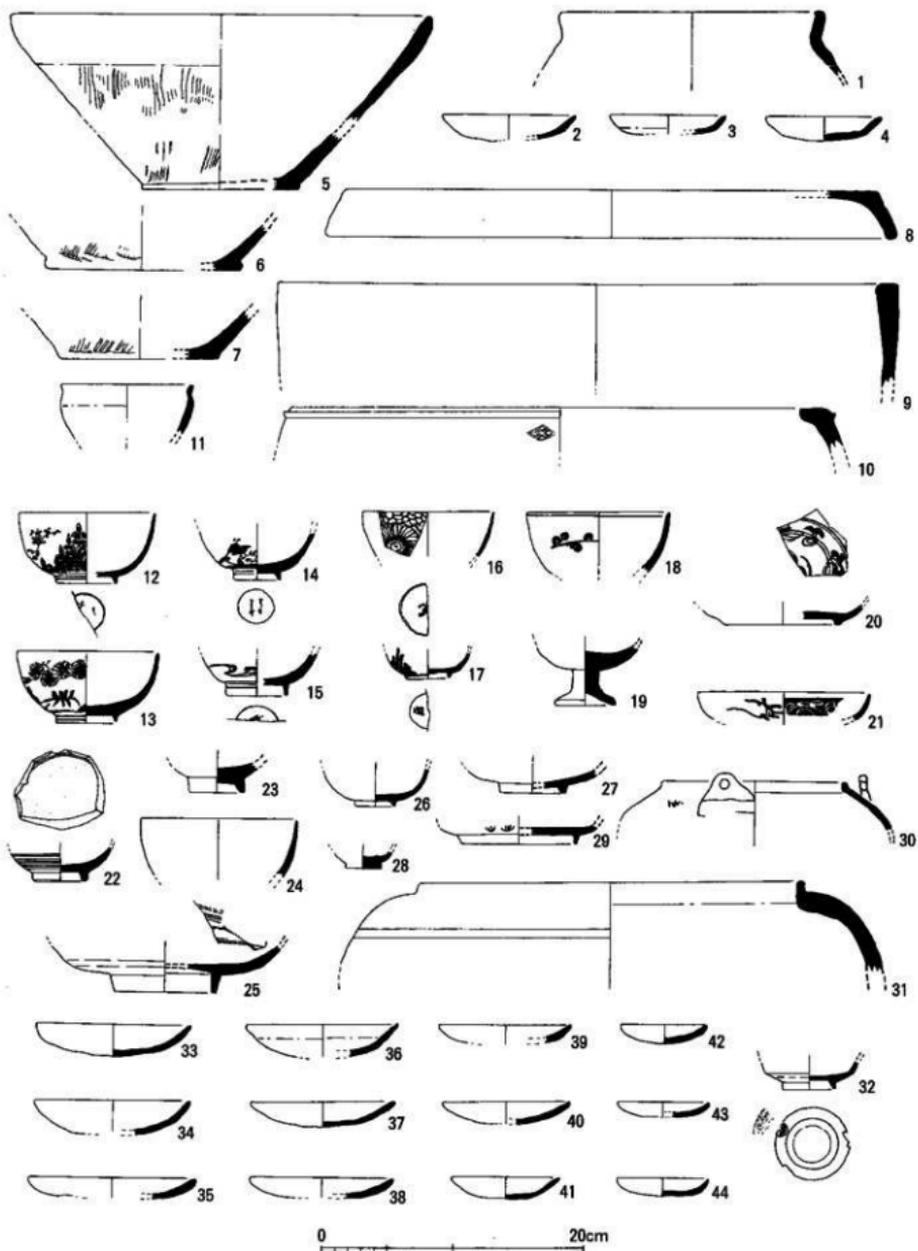
第1図 古墳・奈良・平安時代の土器



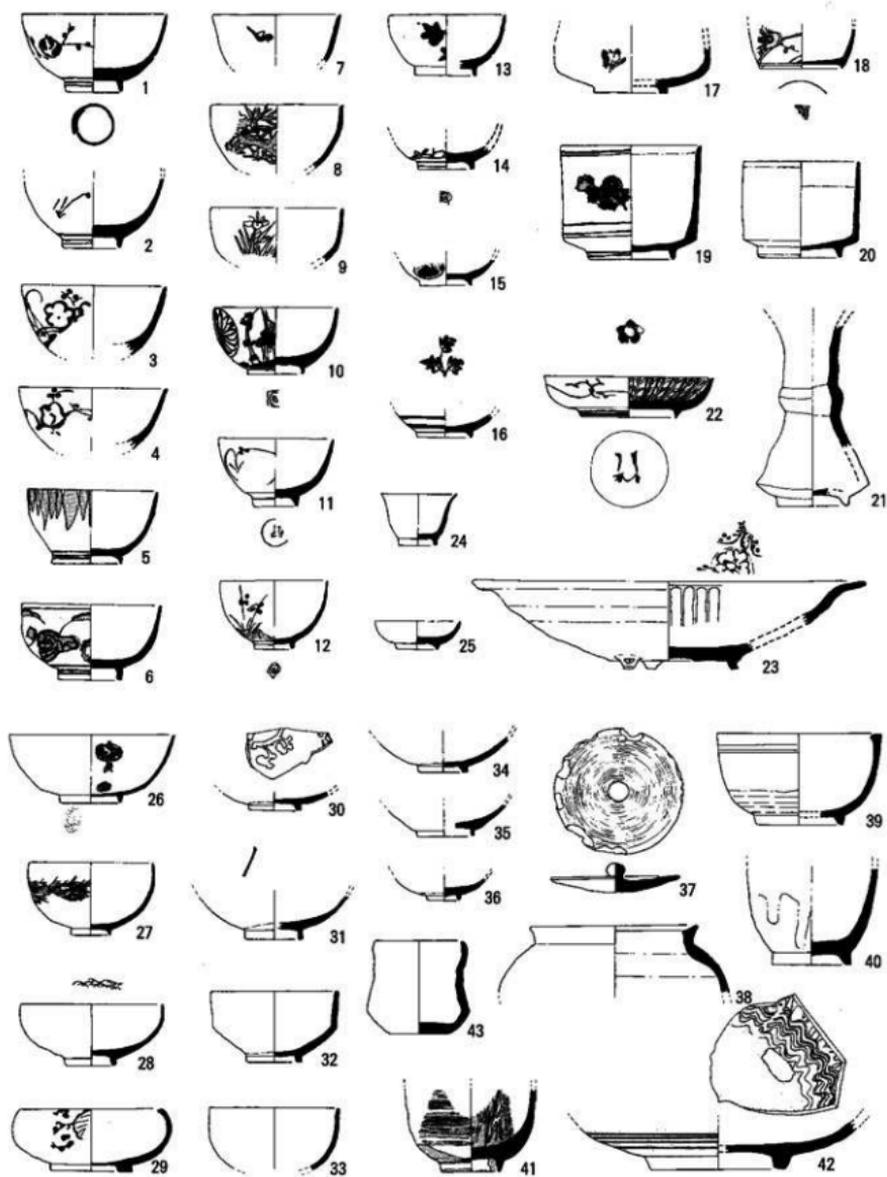
第2圖 SD06・SD07・SE26 出土土器



第3圖 SK12・SK18・SK17出土土器

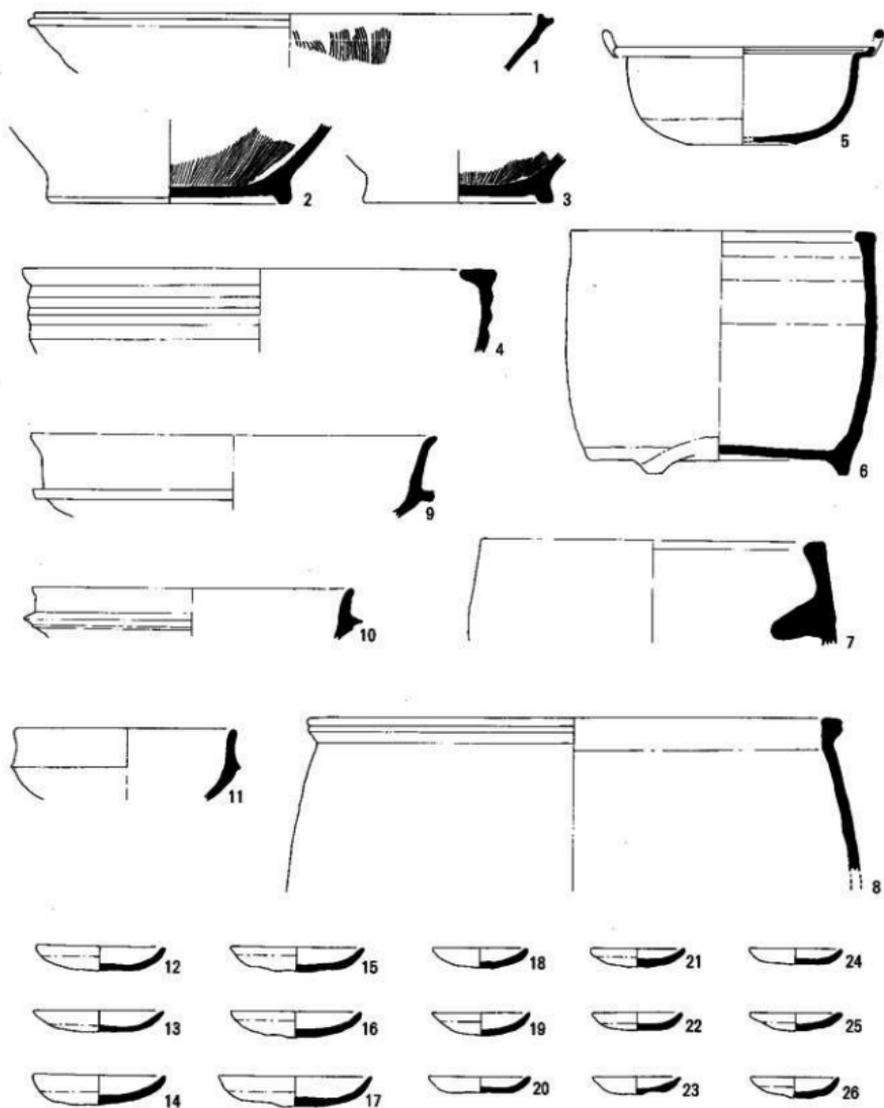


第4図 SK23・SE20 出土土器



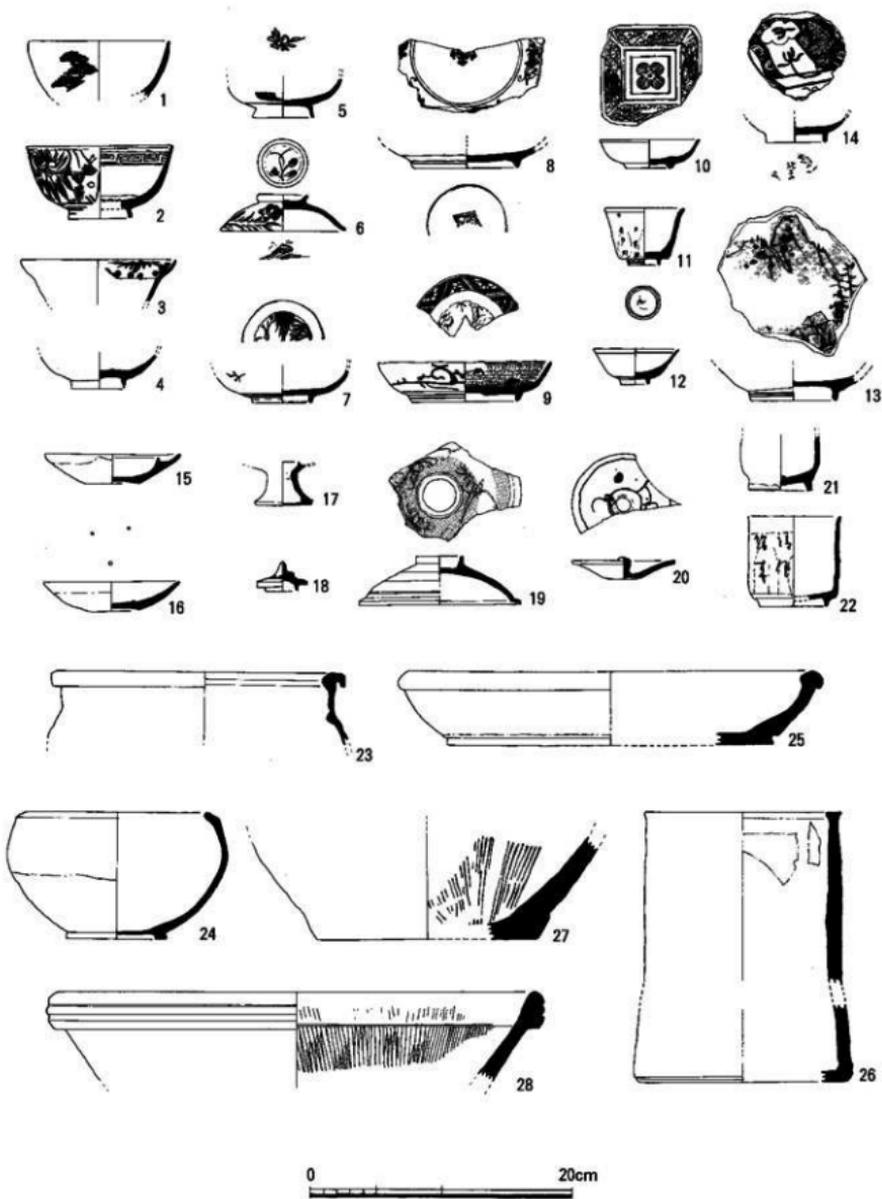
0 20cm

第5圖 SE21 出土土器 (1)

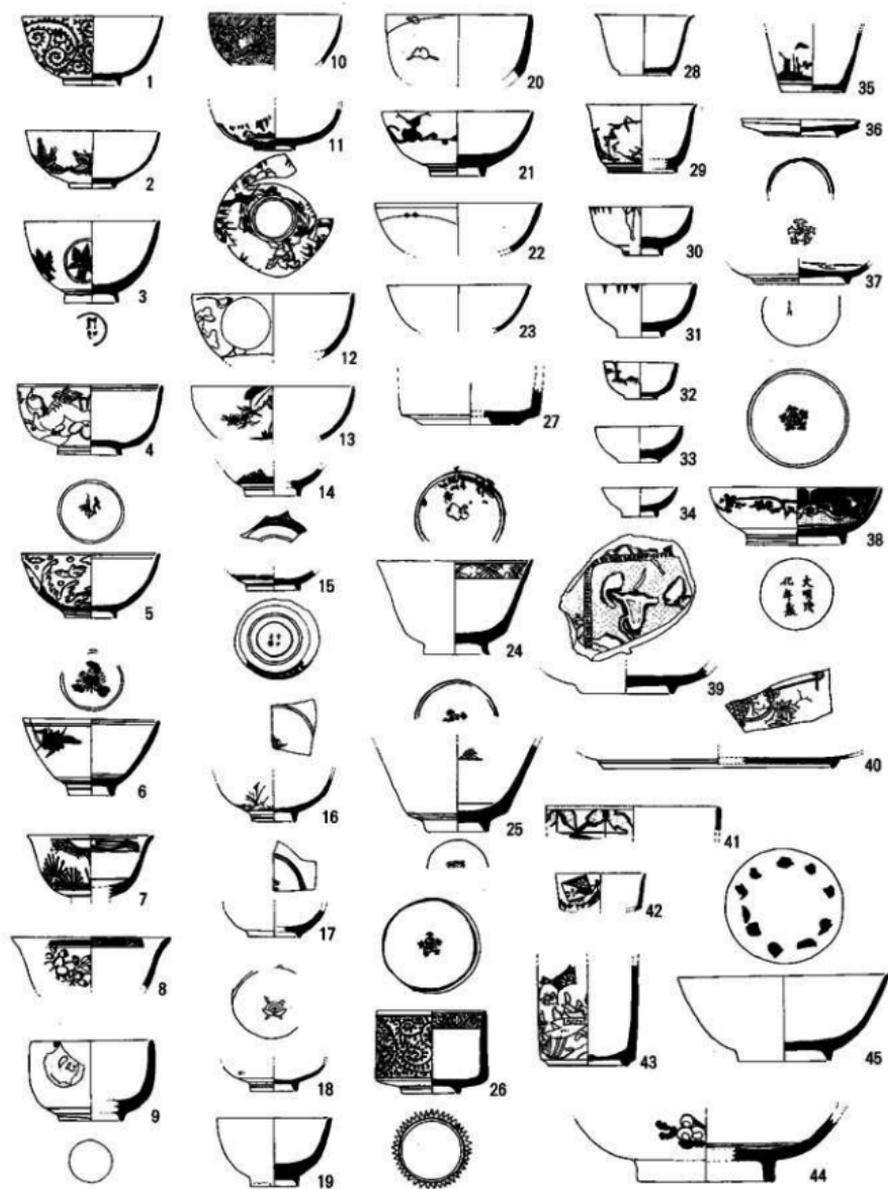


0 20cm

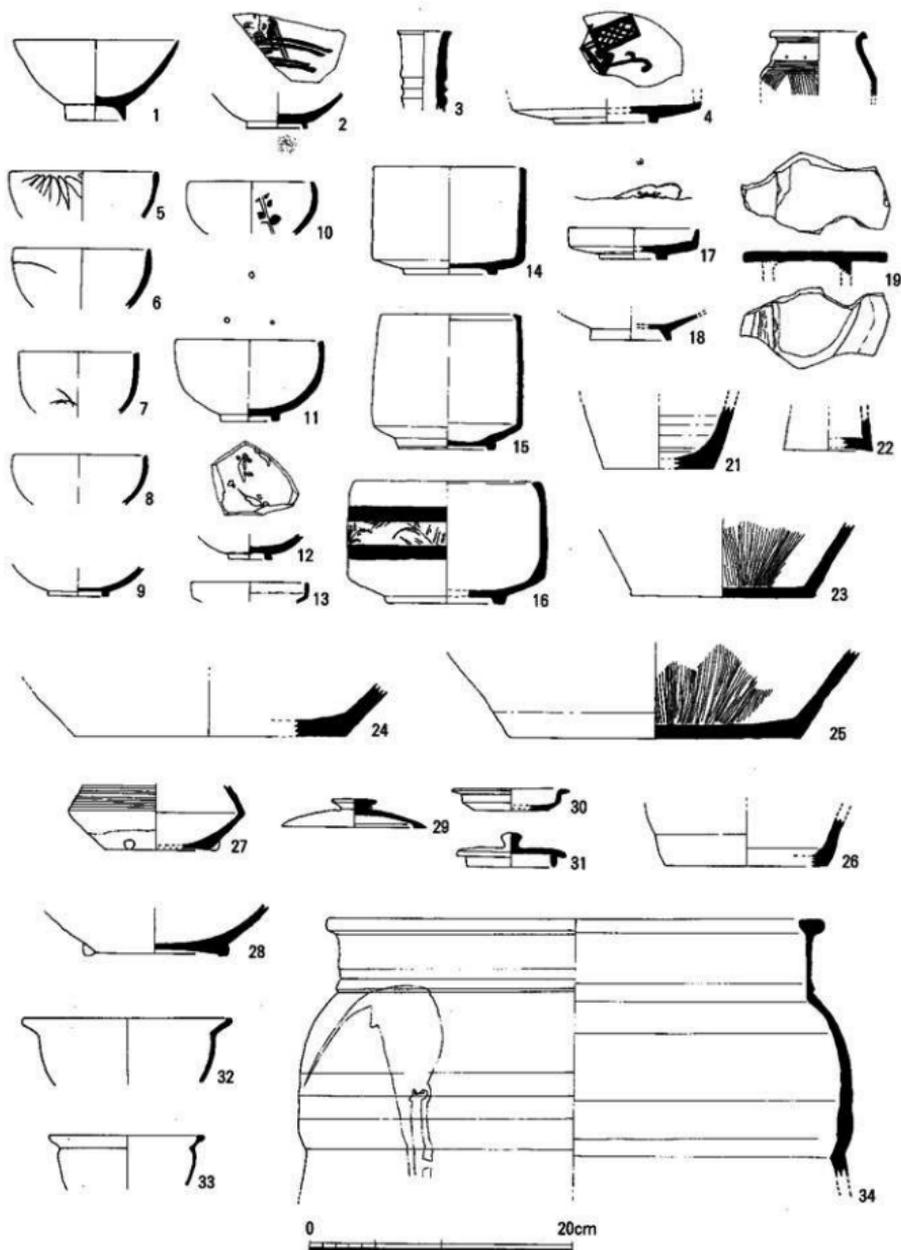
第6图 SE21出土土器(2)



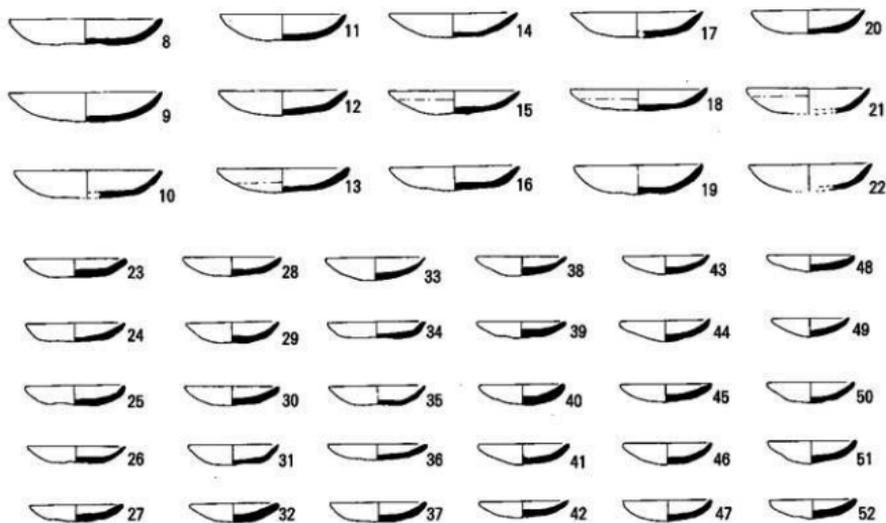
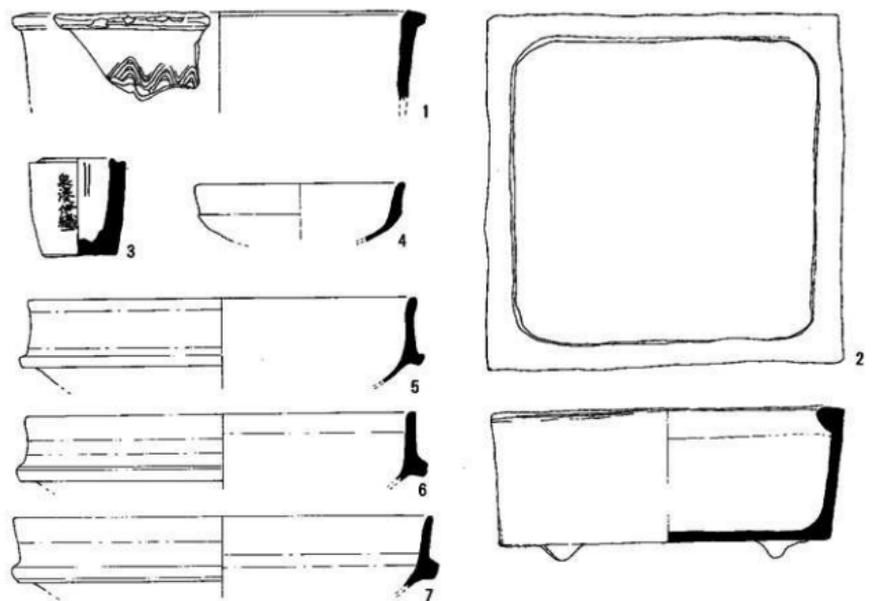
第7图 SE22 出土土器



第8圖 SK25出土土器(1)

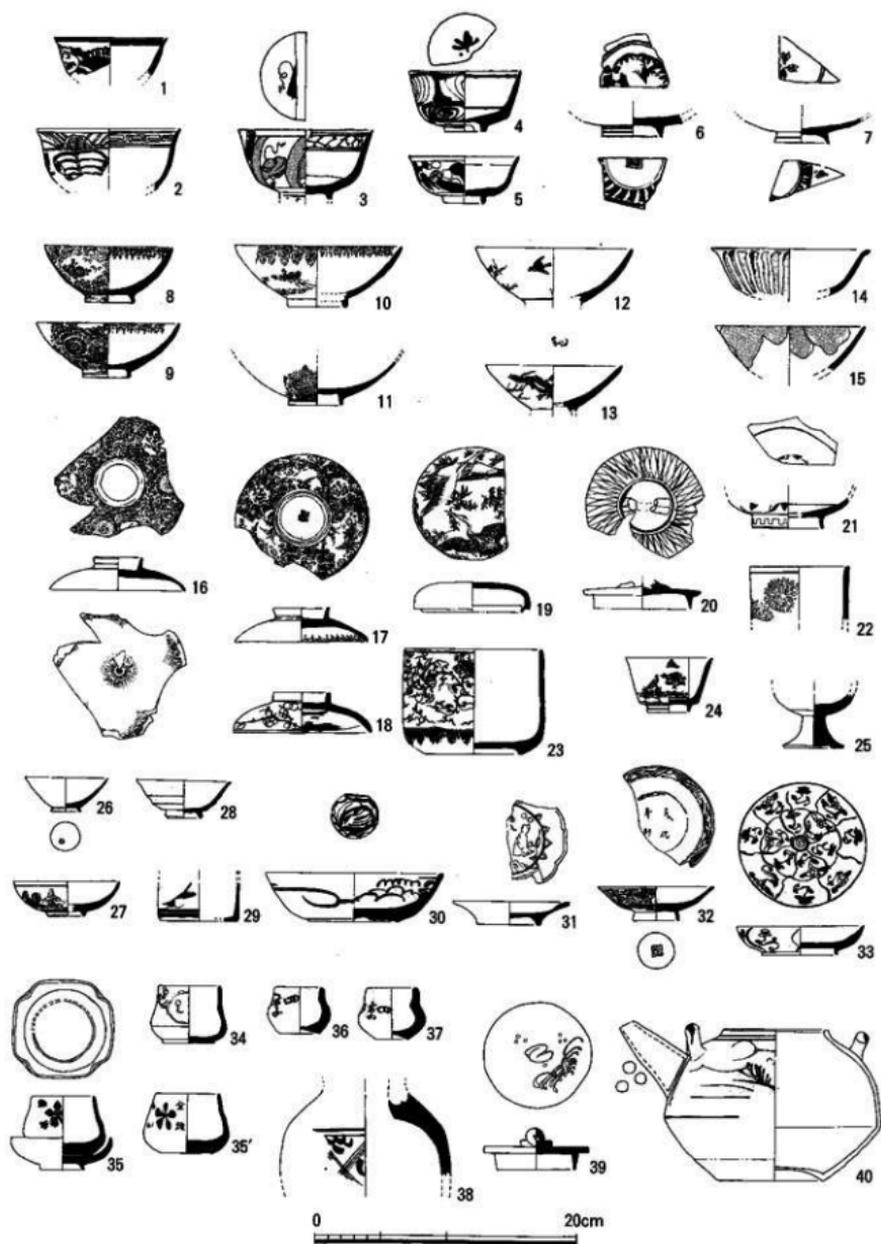


第9圖 SK25出土土器(2)

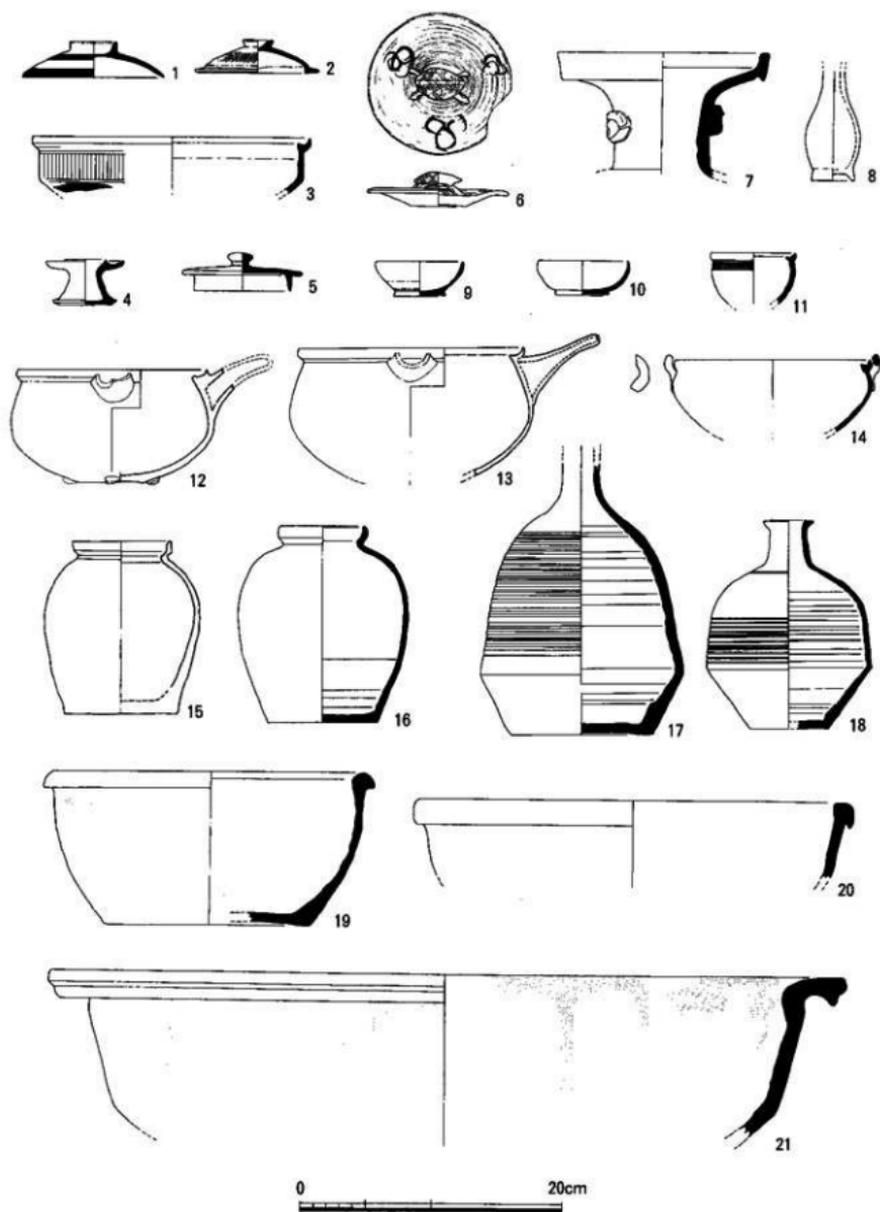


0 20cm

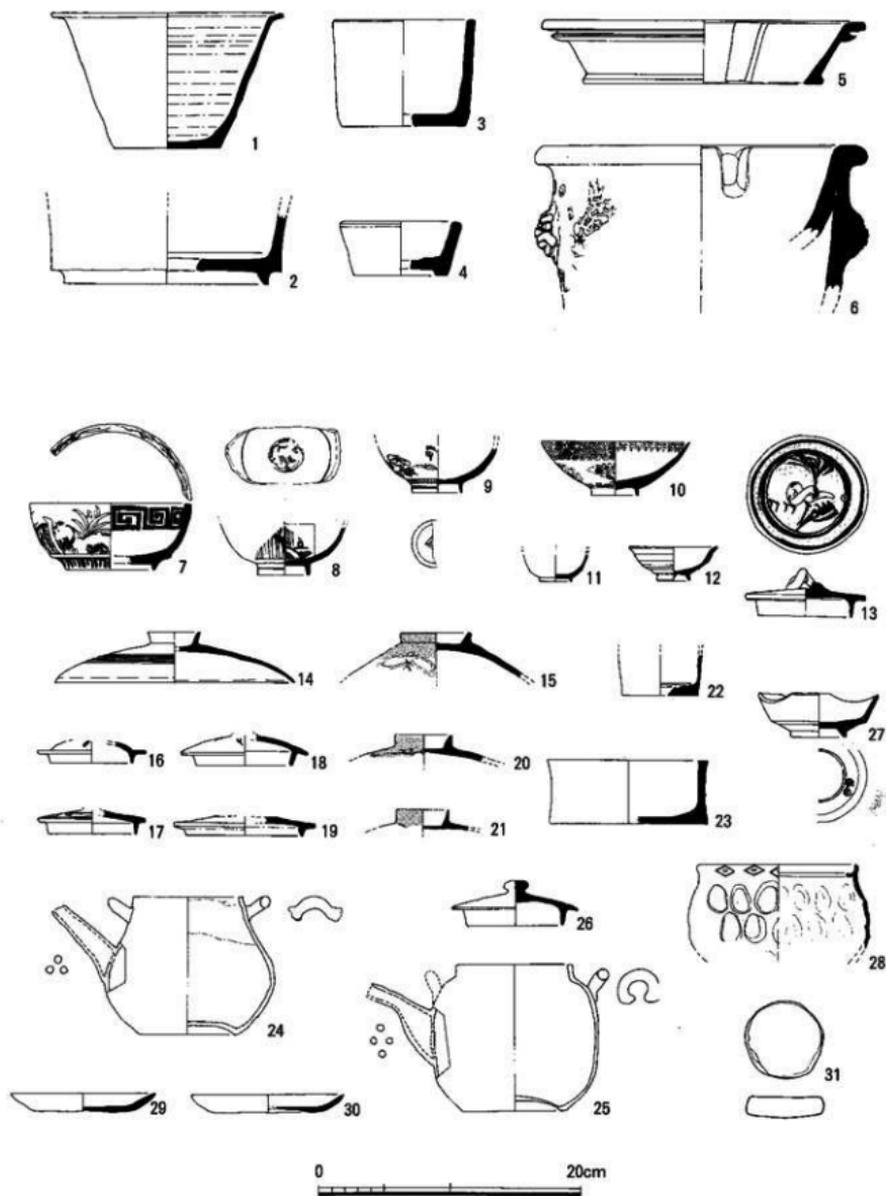
第10圖 SK25 出土土器 (3)



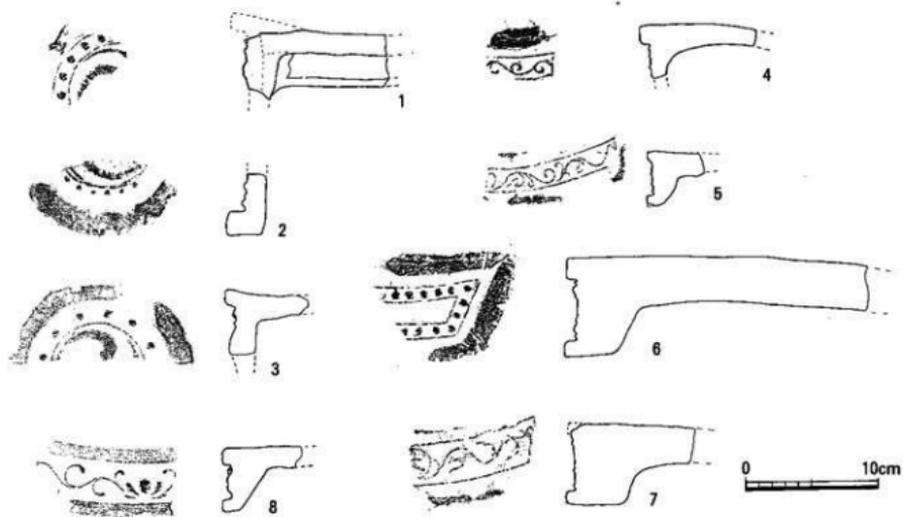
第11图 SK01出土土器(1)



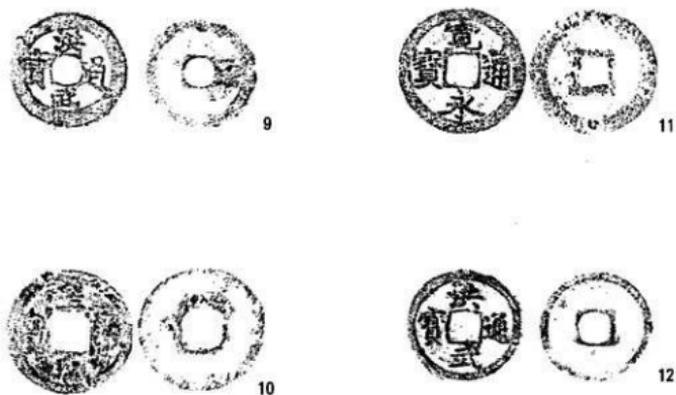
第12図 SK01 出土土器 (2)



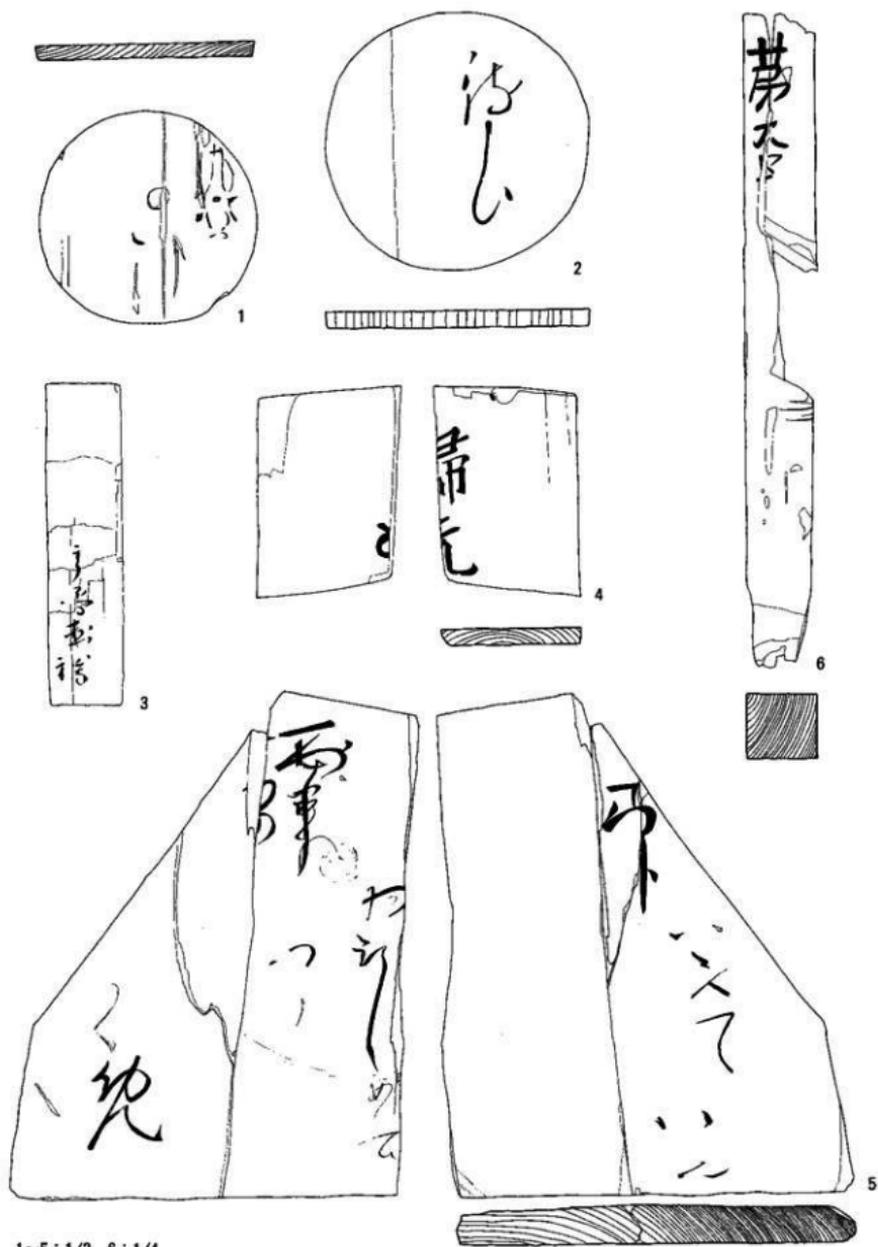
第13圖 SK01 出土土器 (3)・SK02 出土土器



軒瓦

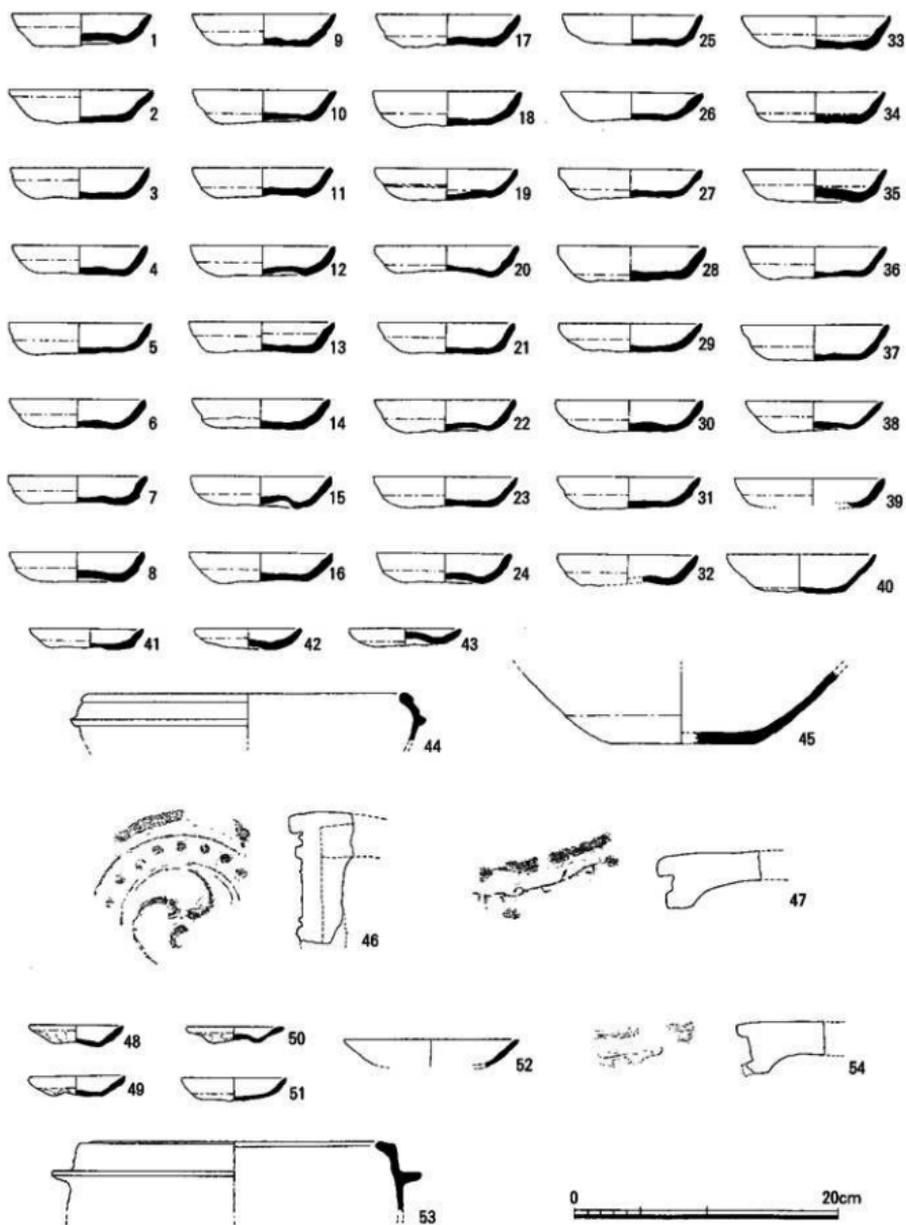


錢貨 (1/1)

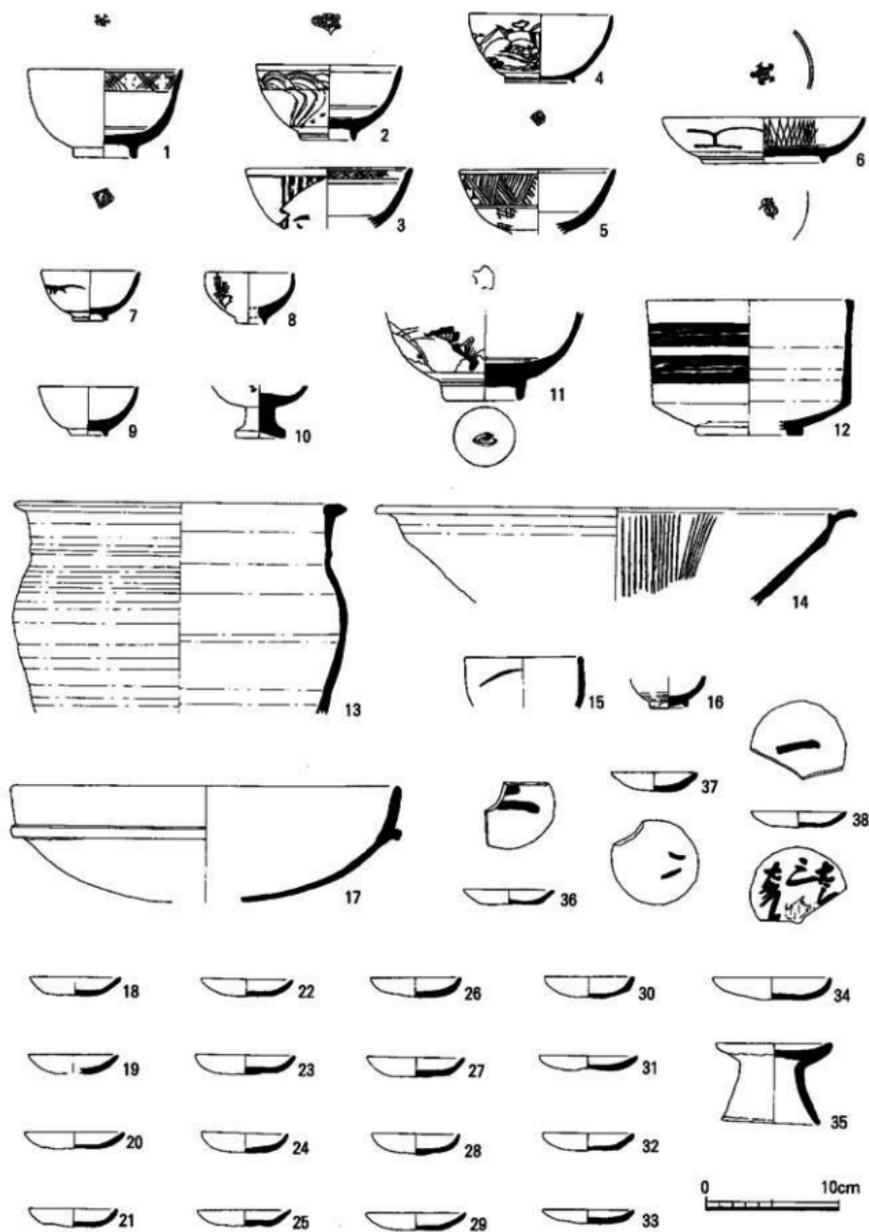


1~5: 1/2. 6: 1/4

第15図 木簡

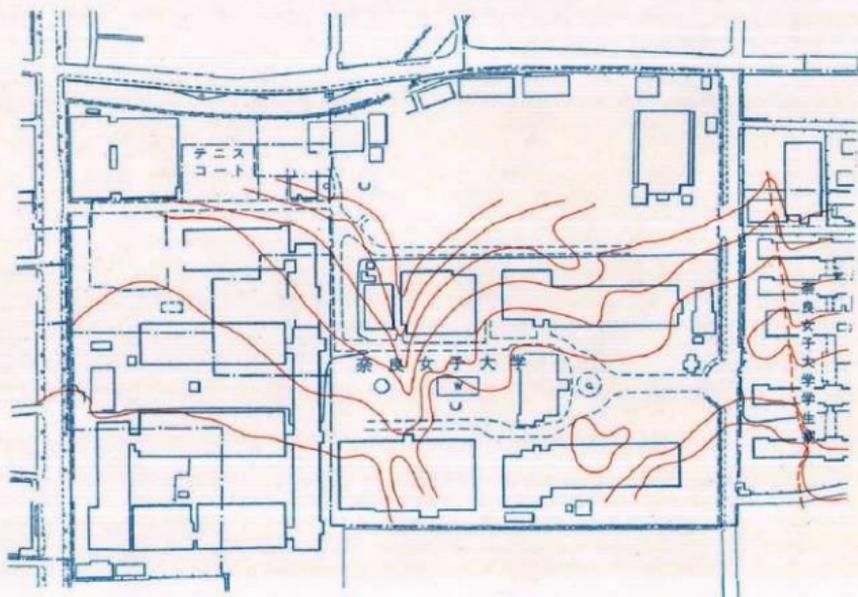


第16图 SK204・SK301 出土土器・軒瓦

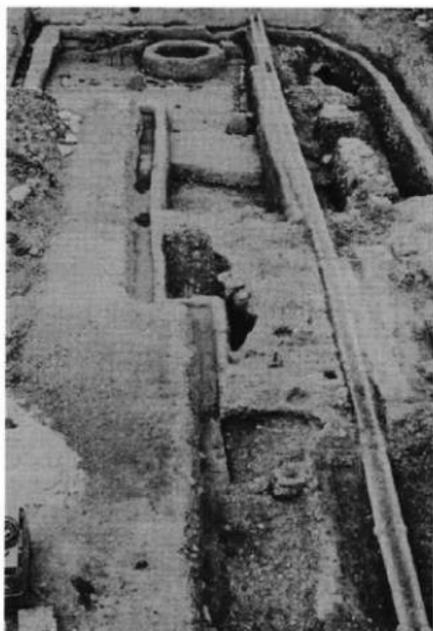


第17图 SK101 出土土器

Fig 1 構内旧地形復原図と3D画像



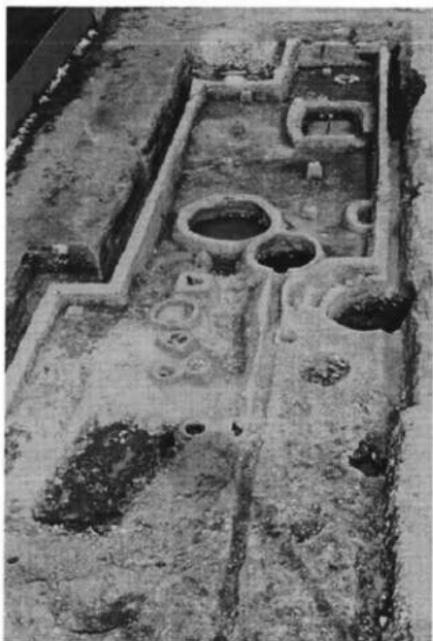
(北東から)



西から



東半下層



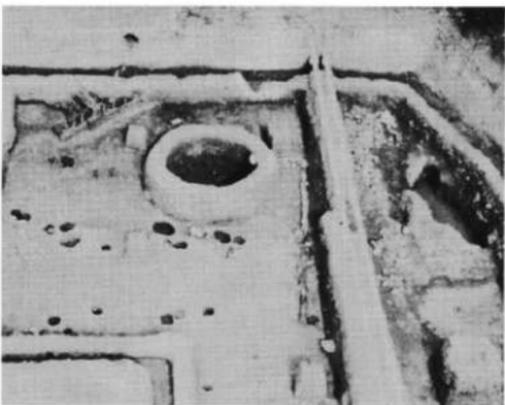
西から



東から



S区西半



S区東半



N区西半

古墳・奈良・平安時代

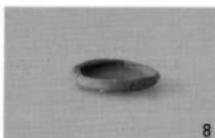


9

SD06



5



8



9

SD07



13



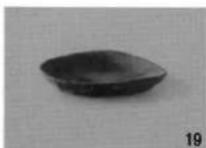
14



16



18



19



20



22

(第2図)

SK17



22



14



26

(第3図)

SE 20



12



13



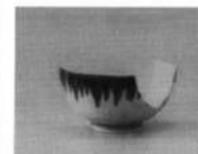
19

(第 4 圖)

SE 21



1



5



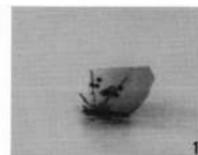
6



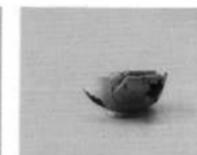
10



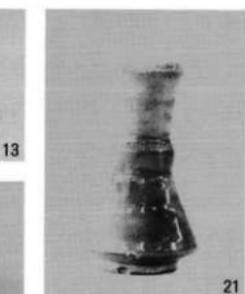
11



12



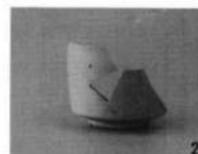
13



21



19



20



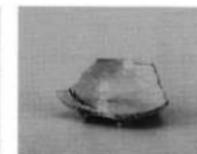
22



26



27



28



32



37



39



40



43

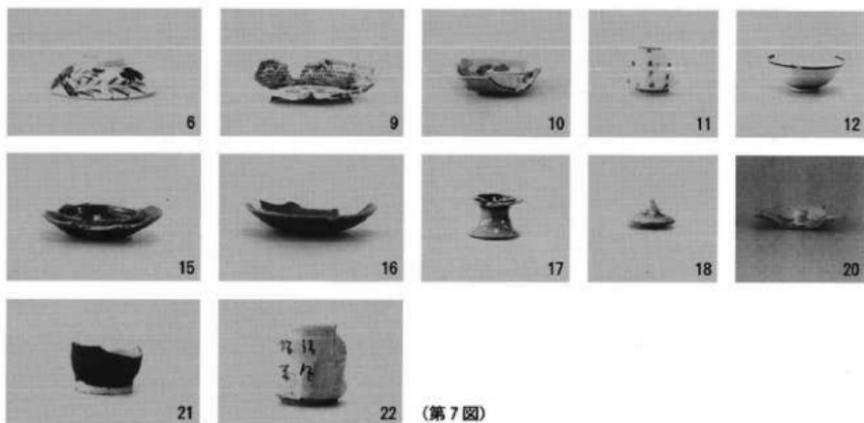
(第 5 圖)



6

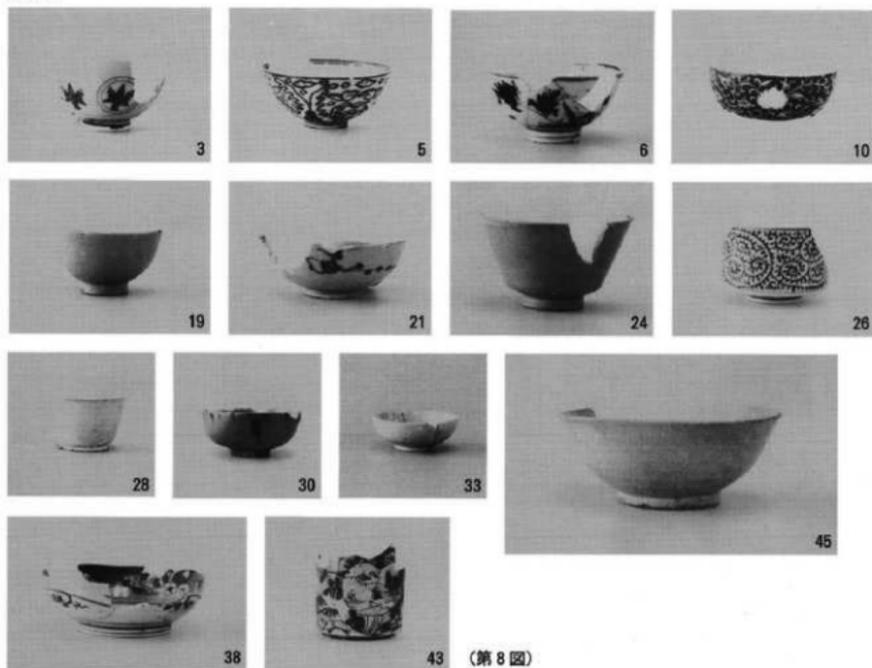
(第 6 圖)

SE 22

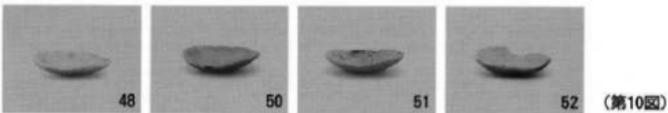
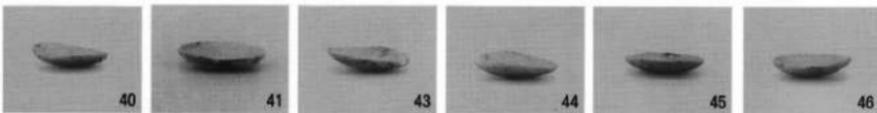
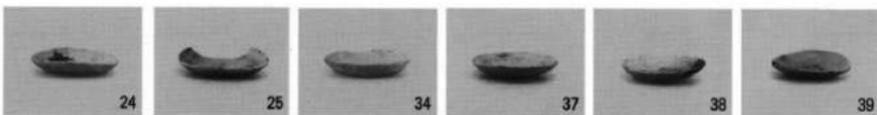
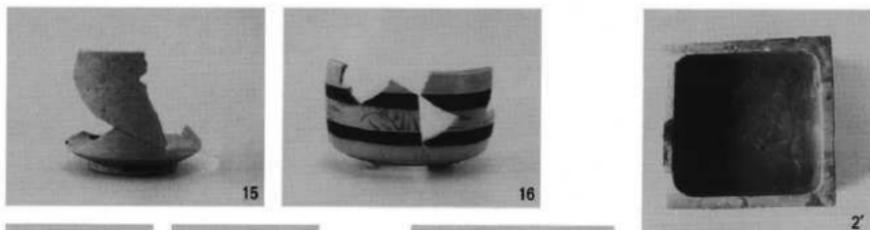
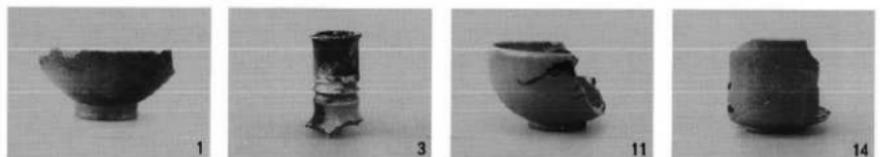


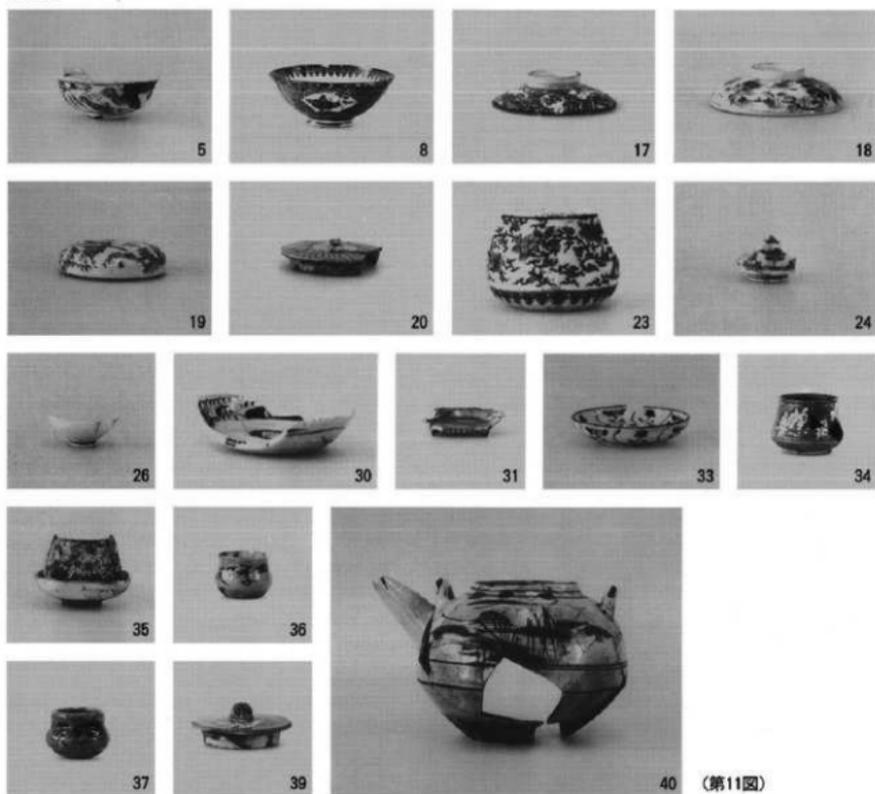
(第 7 図)

SK 25

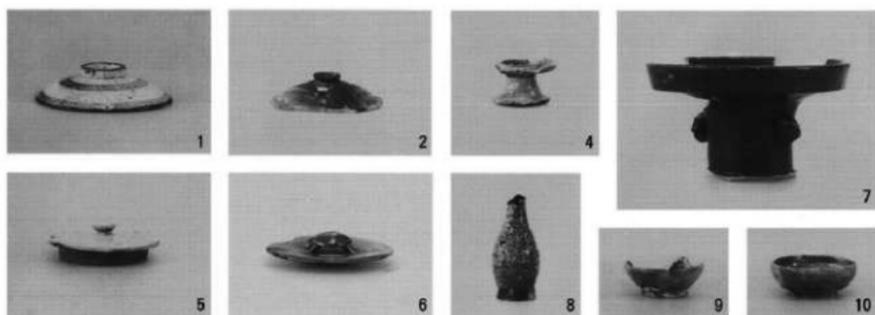


(第 8 図)



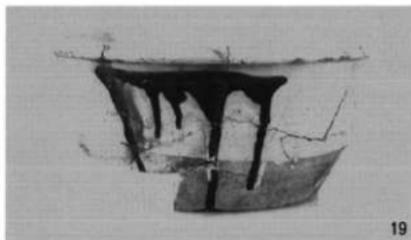


(第11図)



(第12図)

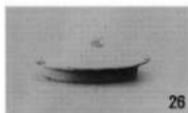
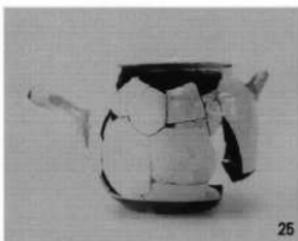
SK 01



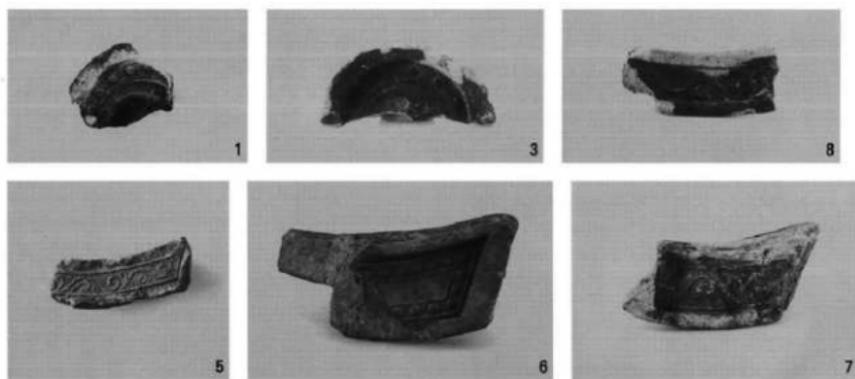
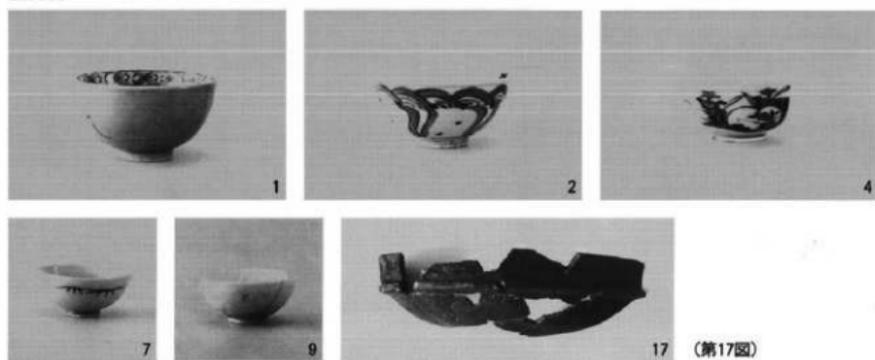
(第12図)



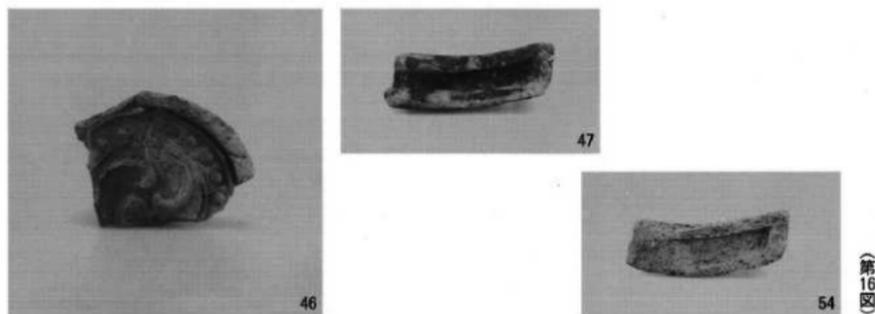
SK 02



(第13図)



(第14図)



(第16図)

奈良女子大学構内遺跡

発掘調査概報Ⅶ

平成16年3月31日 発行

編 集 奈良女子大学埋蔵文化財発掘調査会

発 行 奈良女子大学

印 刷 株式会社 新踏社
